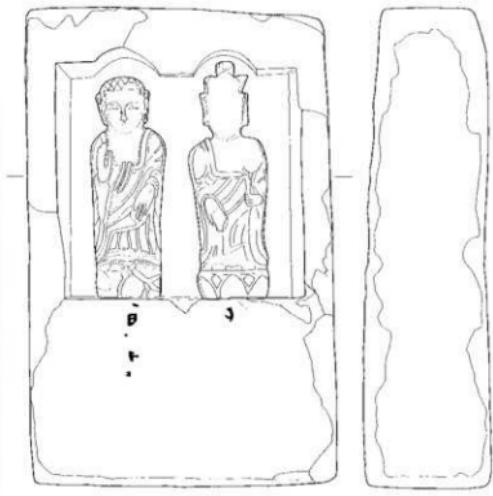


198の表面



198の裏面



199

0

(1 : 6)

20cm

第69図 石塔群出土石塔⑧ [画像板碑6 (拓本)・7] (S=1/6)

### 3. 板碑

【板碑 1 【第70図-200】】 完形で出土した。頂部は三角形を呈し、2本の頂上線をもつ。上中央部には逆向きの「冂」、中央には「奉造立塔□一本」左側には「為雪山妙好（？）禪定…」右側には「〒時慶安二…」と書かれている。慶安は5年までしかないので、「慶安二年（1649年）となる。

【板碑 2 【第71図-201】】 部分的に欠損しているが、完形で出土した。頂部は三角形らしき形であるが、頂部が丸くなっている。2本の頂上線をもち、額部には「冂」や「閑」らしき「もんがまえ」の文字の墨書きが確認できる。塔身部には3行の墨書きがあり、中央は「祖師西靈（「靈」は異字体）」。左側は「為貨（？）□昌□□」。右側は判読が困難であるが、「〒時寅□四…」といった文言が考えられる。

【板碑 3 【第71図-202】】 上半部のみの検出である。頂部は明瞭な三角形を呈し、2本の頂上線をもつ。額部には墨書きで「もんがまえ」の文字が書いてあり、「冂」や「閑」のような文字が連想される。額部の下は切断していて不明であるが、舟形光背状の崖み上部らしきものは確認できる。

【板碑 4 【第72図-203】】 上半部の検出である。検出されたものも半分が折れた状態であり、残存状況は良好とは言えない。頂部は一応三角形を呈しているが、丸みを帯びている。刻字や墨書きなどの痕跡は確認されなかった。

【石塔 1 【第73図-204】】 上部と下部が欠損し、中位のみの部分的な検出である。表面には3行の刻字があり、中央は「造立石塔壇基」左は「為月頭常金也」右は「…□地」となっている。

【経碑 【第72図-205】】 上部と下部が欠損し、中位のみの部分的な検出である。表面には3行の刻字があり、中央は「欽奉書寫…」、左は「為雪嶺吉…」、右は「為桂…」と書かれている。内容や県内の類例から考えて、この石塔は一字一石経や一部一千経を埋納した時の経碑と考えられる。一字一石経の経碑であれば、付近から経石が出土する可能性があったが、一次調査では確認されなかった。二次調査のD区において、経碑が確認されなかったが、約80個の一字一石経の経石が出土した。この経碑がD区で出土した一字一石経の経碑であるかは判断できないが、この場所で一字一石による供養があったことは推定できる。なお、この経碑のタイプは江戸時代に多く存在する。

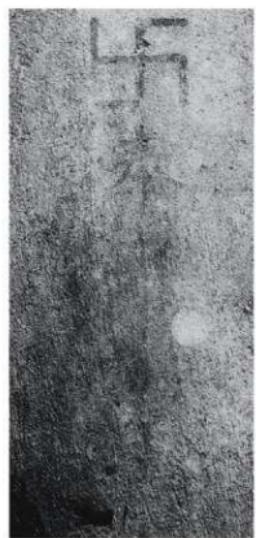
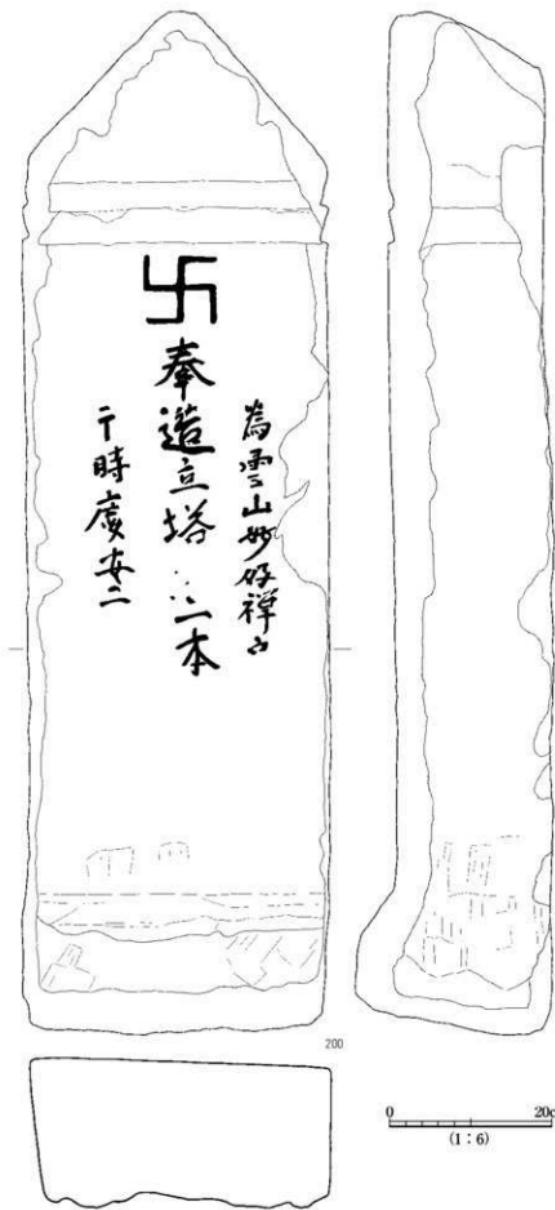
### 4. その他

【地蔵 1 【第73図-206】】 座像であるが、首から上、両手が破損しており、全体像が不明である。右手は胸のあたり、左手は膝の上にあり、地蔵菩薩であるならば、左手は錫杖、右手は宝珠を持っていた可能性がある。両手が無いので、地蔵菩薩と断定できず、他の仏像の可能性もある。

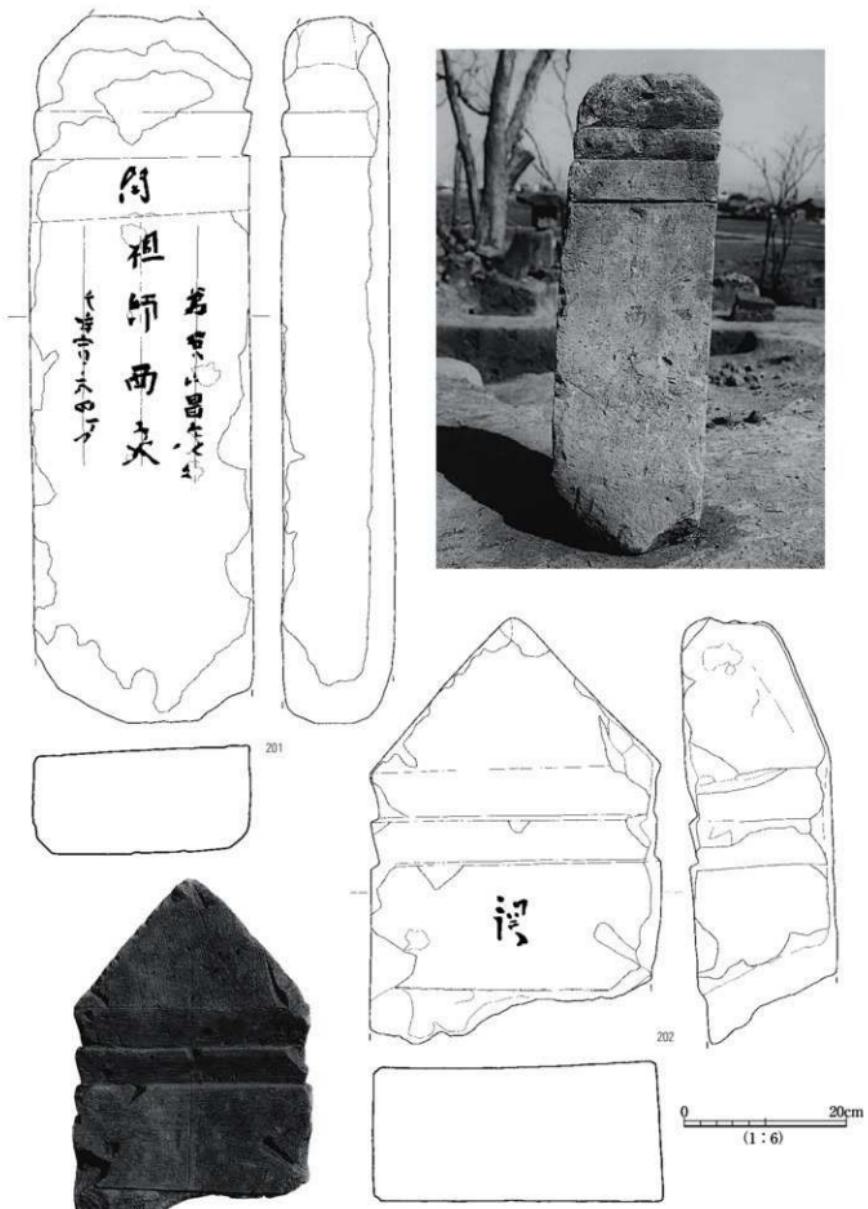
【地蔵 2 【第74図-207】】 下部周辺が破損しているが、全体像が把握できる形で検出された。地蔵菩薩の立像である。左手は宝珠をもち、右手は現在何も持っていないがおそらく錫杖を持っていたようである。像の左右両脇と右側面に刻字が施されており、右は「明次二年巳十一月吉祥日／石立（工？）祥天」、左は「瑞雲…」。右側面「寄布三ヶ所中」とある。「明次」は「明治」、「寄布」は「寄付」の誤りであろう。「瑞雲」の文字は、この遺跡が「瑞雲寺」関連であったことを裏付ける史料である。なお、ここが瑞雲寺とすれば、この地蔵は、刻字の明治2年（1869年）に造られたとすれば、「日向地誌」の記述による瑞雲寺の廃仏毀釈があった明治5年の3年前に造られたことになる。また、右側面部に刻まれている「祥天」は、後述する無縫塔（第79図-214）に書かれている「弟子祥天」と同一人物の可能性がある。

【地蔵 3 【第75図-208】】 右上部が破損しているが、全体像が把握できる形で検出された立像である。1枚の凝灰岩製の板石をレリーフ状に彫りあげている。像は、蓮華座の上に立ち、左手には宝珠らしきものを掲げ、右手は胸元で施無畏印を結んでいる。顔は柔軟な僧形である。顔部の背後には円形の光背の一部分が見られる。

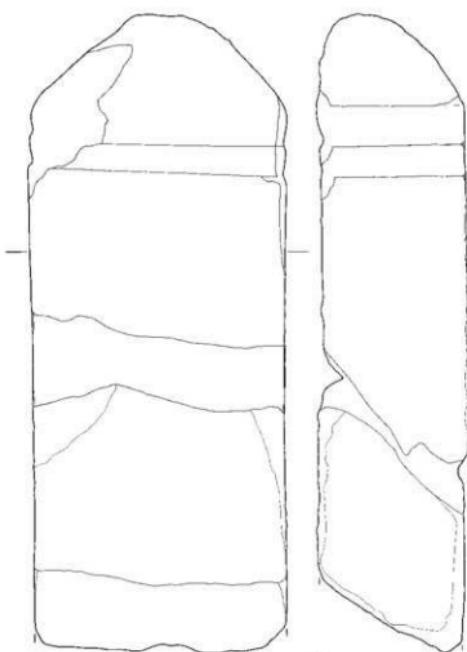
【地蔵 4 【第75図-209】】 地蔵輪の龕部と考えられる一辺約28cmの立方体を呈する。残存状況は比較的良好であるが、顔部分が破損している。立方体6面中1面にのみ舟形光背状の崖みに錫杖を両手で持った地蔵菩薩立像が彫られている。



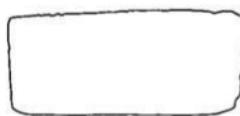
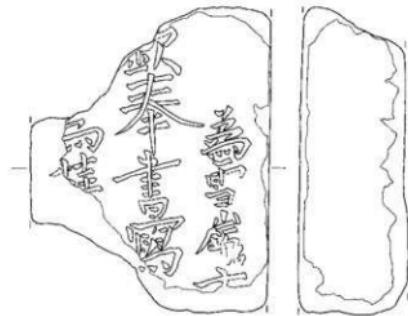
第70図 石塔群出土石塔⑨【板碑1】(S=1/6)



第71図 石塔群出土石塔⑩ [板碑2・3] (S=1/6)



203



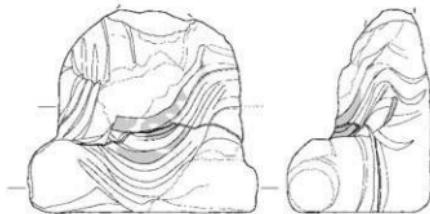
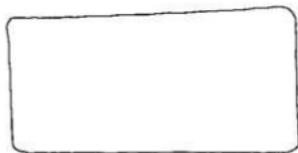
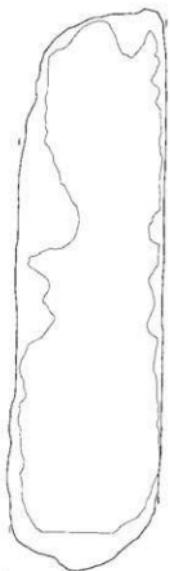
205

0  
(1 : 6)  
20cm

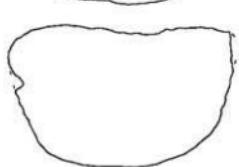
第72図 石塔群出土石塔⑪ [板碑4・5] (S=1/6)



204



205



網掛け部は赤色顔料が残る部分

0 20cm  
(1 : 6)

第73図 石塔群出土石塔⑫ [石塔1・地藏1] (S=1/6)



207



0  
(1 : 6) 20cm



(S=1/6)



(S=1/6)

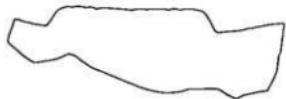


(S=1/3)

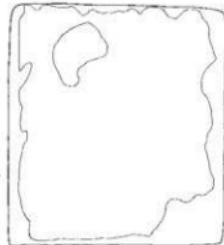
第74図 石塔群出土石塔⑩ [地蔵2] (S=1/6・1/3)



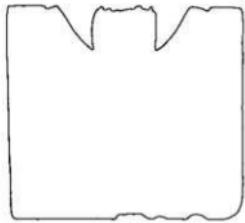
208



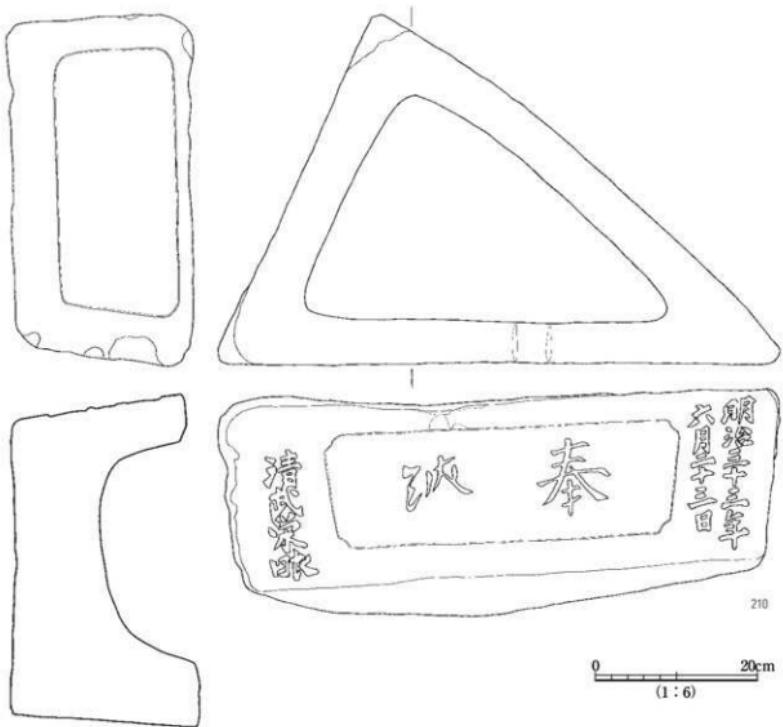
0  
20cm  
(1 : 6)



209



第75図 石塔群出土石塔⑩ [地藏3・4] (S=1/6)



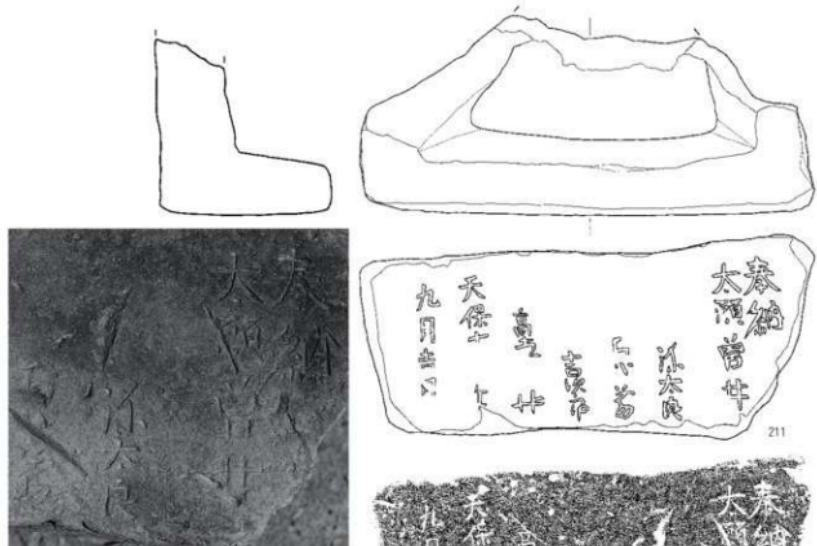
第76図 石塔群出土石塔⑩【手水鉢1】(S=1/6)

【手水鉢1【第76図-210】】御堂跡の階段脇にあった。平面三角形で中央部が彫り窪めている。長辺部分には、中央部に大きく陽刻で「奉納」、左側に「明治三十三年／六月二十三日」、右側に「清武栄咲」と刻字されている。「清武」姓は、現在でも曾井地区周辺に多く居住していることから曾井の人間、もしくは曾井に縁のある人物と考えられる。明治33年〔1900年〕は、明治5年〔1872年〕廢仏毀釈後なので、復旧した後に奉納された可能性がある。

【手水鉢2【第77図-211】】破損しているので、全体像は不明であるが、手水鉢1と同じく中央を彫り窪めた平面三角形を呈する。長辺の1辺には線刻による「奉納／太順曾井／弥太郎／□□□／吉次郎／高□…／天保□…／九月吉日」が確認される。この手水鉢の製作年代は、「天保」の文字から、天保年間〔1830～1844年〕と考えられる。

【地蔵幢【第77図-212】】六角柱を呈し、中央部には径約4cmの穴が穿たれている。6面にはそれぞれ、繊維模様の背景に無文の円形内に梵字が1字ずつ刻まれている。梵字の示すところは現段階では解読できていない。

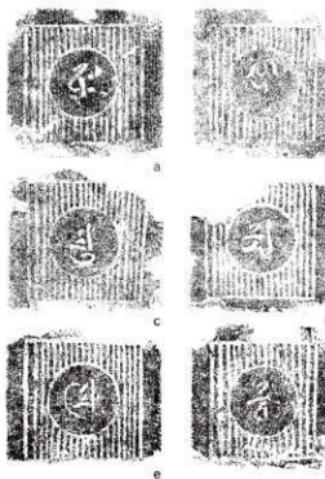
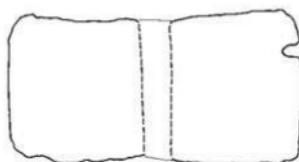
【石塔片【第78図-213】】石塔の先端部と考えられる。右側に文様が確認され、錫杖の先端部の可能性がある。線刻による円形文様が確認され、円形光背と考えられる。これらのことから、この石塔片は地蔵菩薩像の破片と考えられる。



0 20cm  
(1:6)



212



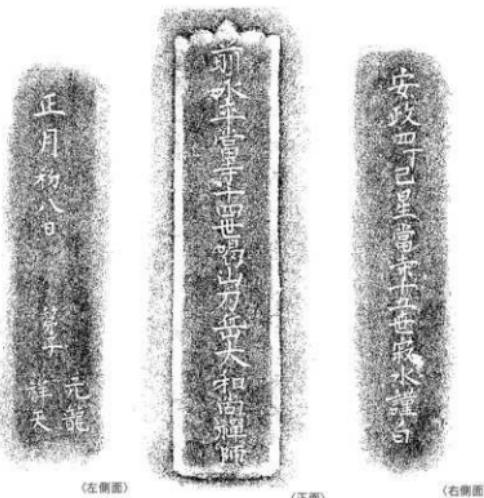
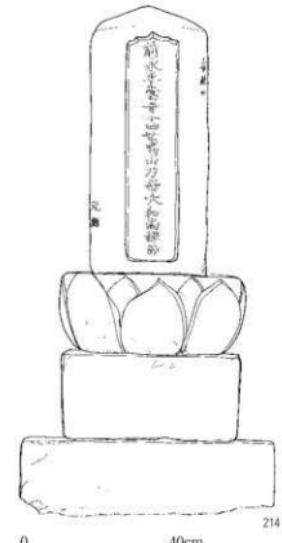
拓本はaから右方向へまで

第77図 石塔群出土石塔⑮ [手水鉢2・地蔵幢] (S=1/6)



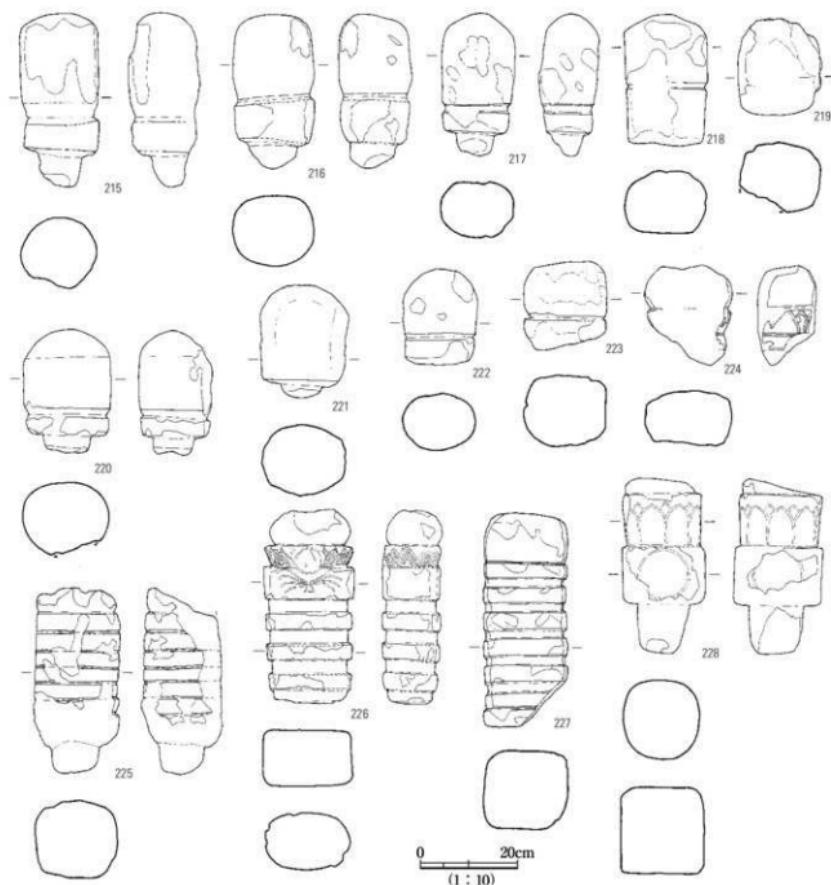
第78図 石塔群出土石塔⑪【石塔片】(S=1/10)

【無縫塔 [第79図-214]】石塔群の中心部に1基建立されている。総高123cm、塔身1段・請花1段・基礎3段の計5段で構成される。塔身部には正面と両側面の3面に刻字が施されている。正面は「前永平當寺十四世喝山刀岳大和尚禪師」、左側面は「安政四丁巳星當寺十五世寂水譯白」、右側面には「正月初八日 弟子 元龍／祥天」と記されている。この無縫塔は瑞雲寺十四世の墓であり、十五世の寂水と弟子の元龍と祥天がこの墓を安政四年[1857年]に建てたと考えられる。十五世の寂水は1号井戸の木枠に書かれていたものと同一人物と考えられ、幕末から明治頃に瑞雲寺住職であった可能性がある。また、弟子の一人の祥天は地蔵2(第74図-207)の祥天と年代からみても同一人物と考えられる。この無縫塔の下を掘り下げたが、土坑などは確認できなかったことから、他の石塔と同じく再配列されたと考えられる。この無縫塔は、石塔群の中心部に配されていることから考えて、明治時代の再配列時に配列の中心的存在であった可能性がある。



第79図 石塔群出土石塔⑪【無縫塔】(S=1/12・1/6)

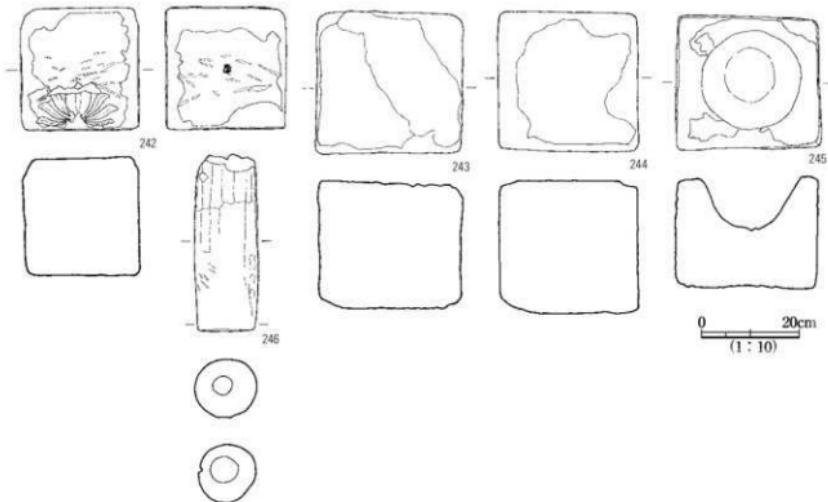
【石塔群A出土その他遺物〔第80図～第82図-215～246〕】215～245は石塔片である。215～223は空風輪である。いずれも宝珠部の先端が尖らず、丸みをおびた形態となっている。224は上端部のみの出土で、全体像が把握できないが、228と類似する相輪と考えられる。225～231は相輪である。相輪部の断面は、229のみが円形で、他は長方形（226）や隅丸方形（225・227・230・231）である。228は先端が欠損しており不明であるが、請花部をもった空風輪と考えられる。232も先端が欠損しており不明であるが、相輪の宝珠・請花・伏鉢部と考えられる。233～237は火輪片である。233～235は緩やかながら直線的な笠の傾斜をもつ。236は風化著しく形態が不明瞭であるが、高さが低く扁平な形態と推測される。238は宝鏡印塔の笠部である。239～241は水輪片である。239と240は風化著しく不明瞭であるが、納骨孔は無く、高さが低い扁平形である。241は高さの高いタイプで、浅い納骨孔をもつ。242～245は立方体の石塔片である。242は蓮花が刻まれ、245は孔が開いている。宝鏡印塔や擬宝塔などに用いられたと考えられる。



第80図 石塔群出土石塔⑩〔宝塔片1〕(S=1/10)

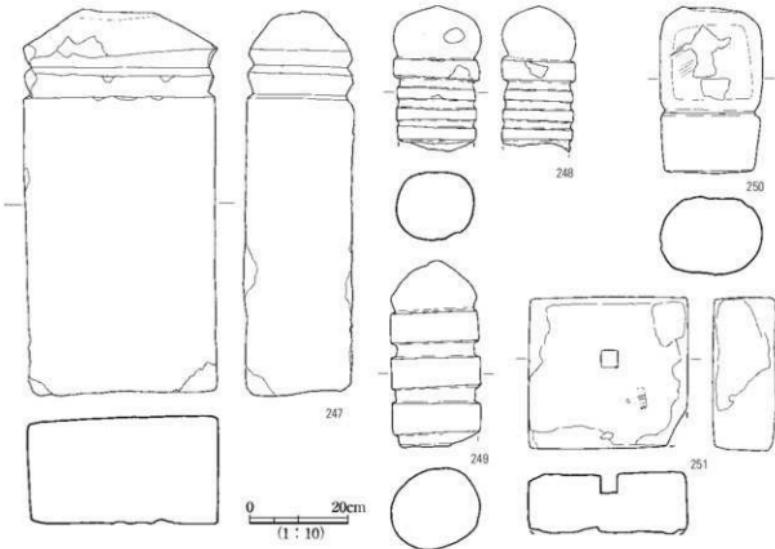


第81図 石塔群出土石塔片 [宝塔片2] (S=1/10)



第82図 石塔群出土石塔② [宝塔片3] (S=1/10)

【石塔群B出土その他遺物〔第83図-247~251〕】いずれも六地蔵幢の西側背後で、折り重なるように検出された。247は石碑である。頂部三角形に2本頂上線をもつ。肉眼では墨書や刻書は認められない。248・249は下部が欠損しているが相輪である。250は断面長楕円形の扁平形空風輪である。251は平面方形の地輪と考えられるが、中央部付近に一辺約3cmの方形孔がある。



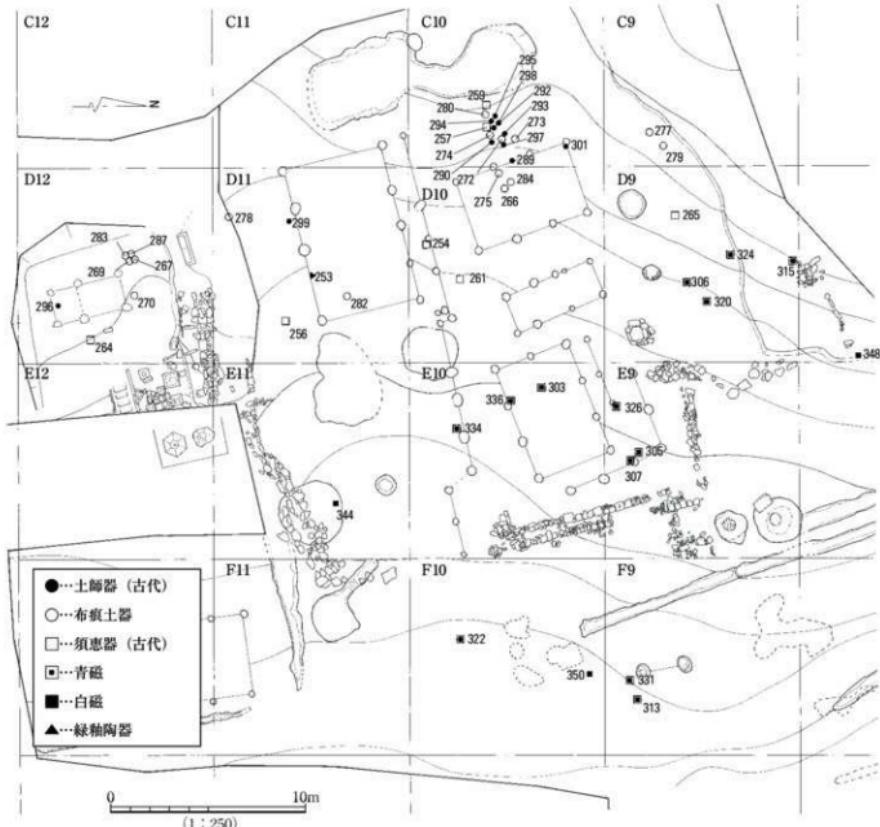
第83図 石塔群出土石塔② [石塔群B] (S=1/10)

## 第6節 遺構外出土の遺物（第84図～第111図・252～586）

遺構以外から多くの遺物が出土した。ここでは、第Ⅰ層～第Ⅱ層の表土・耕作土や第Ⅲ層～第Ⅴ層の包含層出土遺物、遺構内出土ではあるが遺構の構築年代と著しく異なる遺物、遺構内出土であるが埋土上部で流れ込みと考えられる遺物などを遺構以外出土遺物として扱う。出土した遺物は、弥生土器から近世までの土器・陶磁器・石器など多種多様にわたる。ここでは、およそ年代順に出土した遺物の特徴を記す。

### 1. 弥生時代～中世の遺物

【分布状況】弥生時代から中世にかけての遺物は、第84図に示すようにA区を中心に出土した。特に古代から中世にかけての遺物はA区西側とC区に集中する。さらに器種別にみると、古代に属する土師器（布痕土器を含む）は3号掘立柱建物跡（SB3）と分布の重なるC10とD10グリッドの中間地点に極端に集中する場所があることから、ここに住居跡など何らかの遺構が存在していた可能性が考えられる。また、中世に属する青磁は、極端な集中箇所は存在しないが、A区中央部のD9・E9・E10・E11グリッドに集中する。



第84図 古代～中世遺構外出土遺物分布状況図 (S=1/250)

## (1) 弥生時代～古代の遺物（第85図-252～265）

252は弥生土器の高台の脚部である。下方に透かし穴が確認できる。253は縁軸陶器椀片である。体部がゆるやかに立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反する。254～265は須恵器である。254は壺の蓋部片である。推定口径10.6cmで、器高の低いプロポーションである。TK43期前後（6世紀末葉頃）に比定できるか。255・256は須恵器の甕片で、双方とも4～5mmと器壁は薄く、外面が格子状タタキ、内面が同心円状の当て具痕を有する。古墳時代終末期～古代に比定されるか。257～263は古代頃の須恵器甕である。260・261・262は胴部片であり、外面に格子状タタキを有する。260・261の内面は当て具の凹凸痕はあるが、明瞭でなくタタキの後にナデを施した可能性がある。257・258の外面は平行タタキを施している。259は外面に不定方向で交叉させた平行タタキを施す。内面は当て具痕が確認できるが、同心円状の当て具ではなく、同心弧状の当て具を用いていると考えられる。263は甕の底部である。外面に格子状タタキを施し、内面に平行状の当て具痕が確認できる。また、外面に他の須恵器片が2枚（1枚は外面、もう1枚は内面）が軸着している。264・265は甕である。264は口縁部であり、外面の口縁部と頸部の屈曲付近に工具による波状の沈線がある。265は甕の口縁部付近から頸部にかけての部分であり、くびれた頸部にS字状の飾耳が付く。

## (2) 古代の遺物（第86図～第87-266～301）

【①土師器】一部遺構から出土したもの除去して、主に第V層中から出土した。時期は9世紀後半～10世紀前半頃と考えられる。

【壺・椀（第86図-266～288）】数量は多くはないが、底部形態にいくつかパターンが存在するので大きく3つに分類する。

壺I類…脚状の高台を有する高台椀タイプ（266～271）。高台内面はナデなどによって比較的丁寧な調整を施している。脚部の形態によって、緩やかに外反する高台（A：SL1出土181・267・268・270）、直線的に伸びる高台（B：266）、緩やかに内湾気味に伸びる高台（C：SL1出土180・269）の3つに細分される。

壺I類…円盤状の高台を有するタイプ（272～274）。底部は椀I類同様、ナデなどによって比較的丁寧な調整を施している。272は、口縁部が緩やかに内湾しながら立ち上がり、体部のナデ単位が比較的明瞭である。

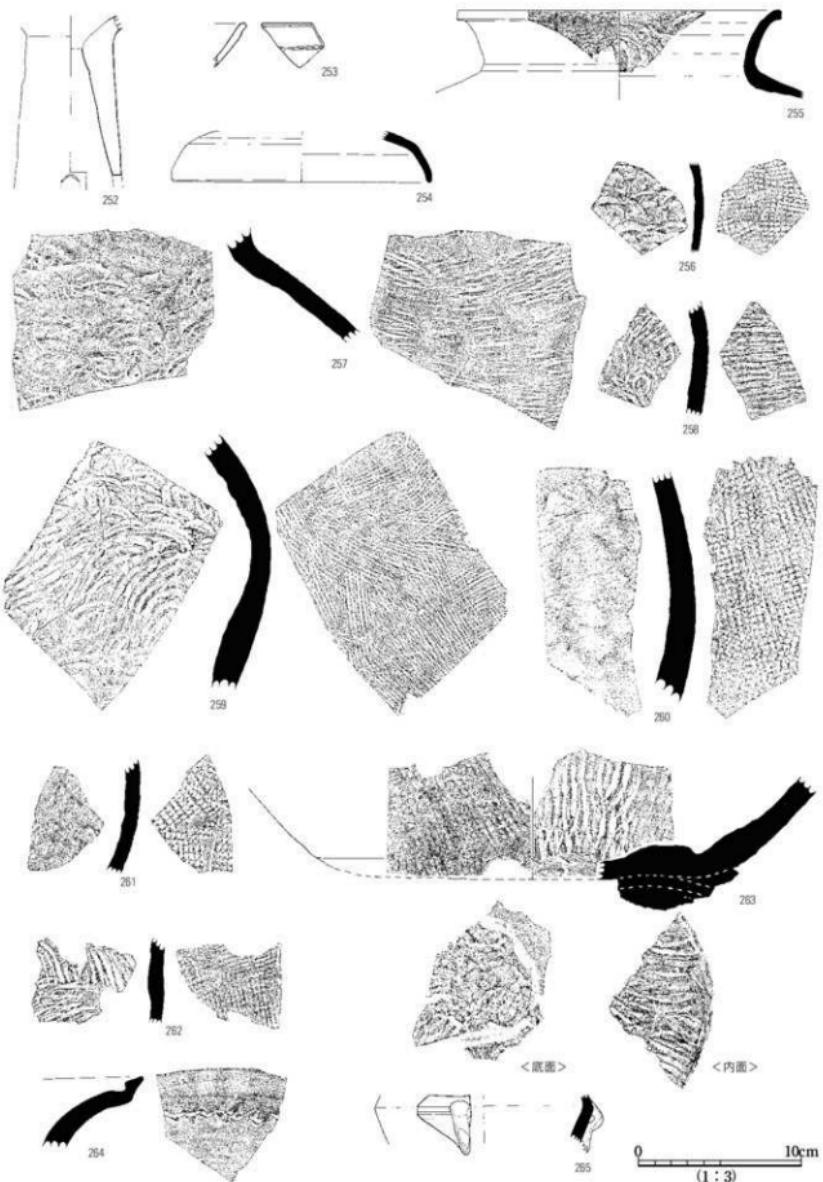
壺II類…高台を有しない平底タイプ（275～288）。本遺跡では主流の形態である。275・276を除いて体部のナデ単位が不明瞭なものが多い。また、体部が直線的に立ち上がるもの（A：275～278、280～282）、内湾しながら立ち上がるもの（279・283～288）の2分類に細分される。風化著しく不明瞭なものが多いが、底部はヘラ切り痕が明瞭に残るもの（275・276・288）、ナデなどによって比較的丁寧な調整を施しているもの（280・281）がある。

【布痕土器（第87図-289～301）】細片の状態で約90点出土した。全点包含層からの出土である。このうち形態が推測できる13点を図化した（第87図-289～301）。口縁端部を整形し、外面はナデと指押さえ、内面は布目痕、底部は尖底で、緩やかに内湾しながら立ち上がる逆円錐形を呈する。推定口径は8.6～13.1cmであるが、10～12cmぐらいのものが多い。完形がわかるものは無いが、器高は9～10cm前後と推測できる。器壁は1.0～1.3cm程の厚いものが多い。胎土は、橙色（Hue-5YR6/6周辺）で、1～5mm前後の赤系・橙系土粒を多量に含む脆弱な土質である。主に口縁端部の形態によって大きくI～III類の3つに分類する。

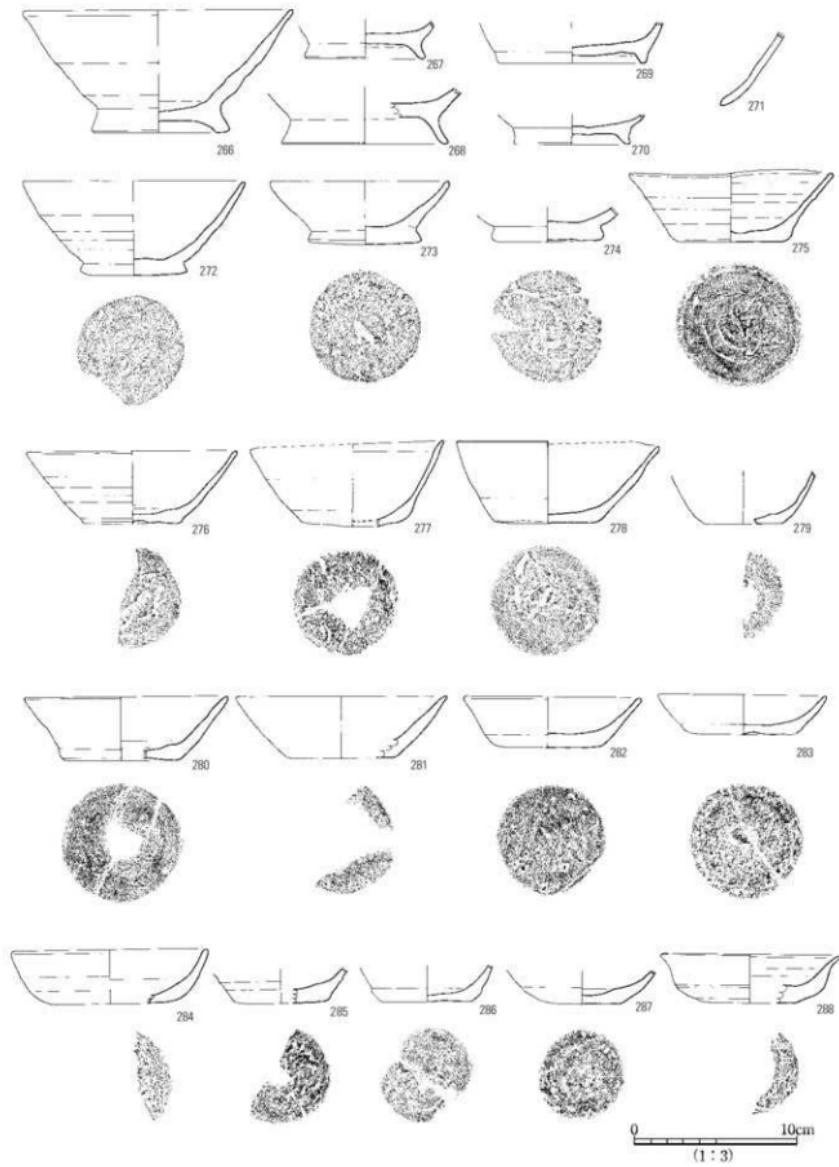
I類…口縁部は肥厚させずに断面三角形に尖らせ、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる（289）。

II類…口縁端部を体部と直交もしくは銳角になるよう整形し、口縁部下に稜線を形成する。体部と口縁部の厚さはほぼ等しい。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がるもの（II A類：290～295）直線的に立ち上がるもの（II B類：296～298）がある。

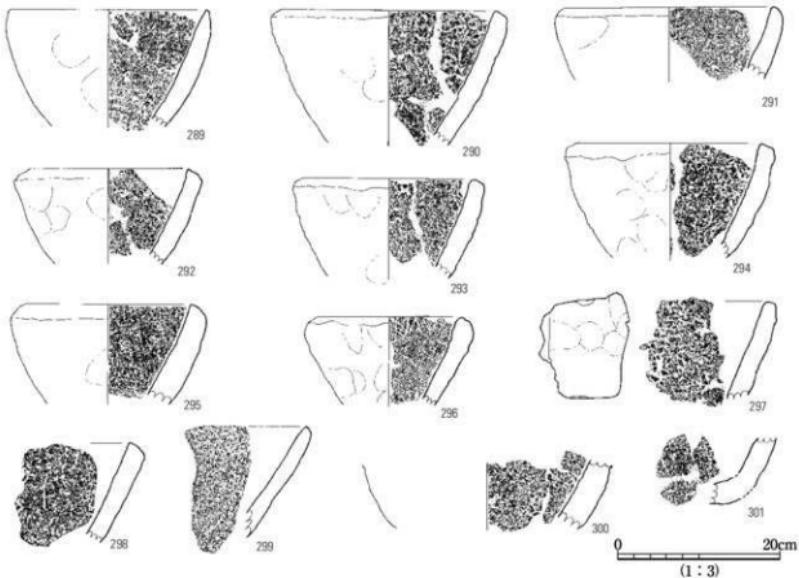
III類…口縁部はII類のように銳角になるよう整形しているが、緩やかな整形である。299は他と異なり器壁が0.5cmと薄い。胎土は他と同じく1～5mm前後の赤系・橙系土粒を含むが、少量でその他2mm前後の灰色系土粒を含む。



第85図 遺構外出土遺物① [弥生～古代：弥生土器・須恵器] (S=1/3)



第86図 遺構外出土遺物② [古代：土師器] (S=1/3)



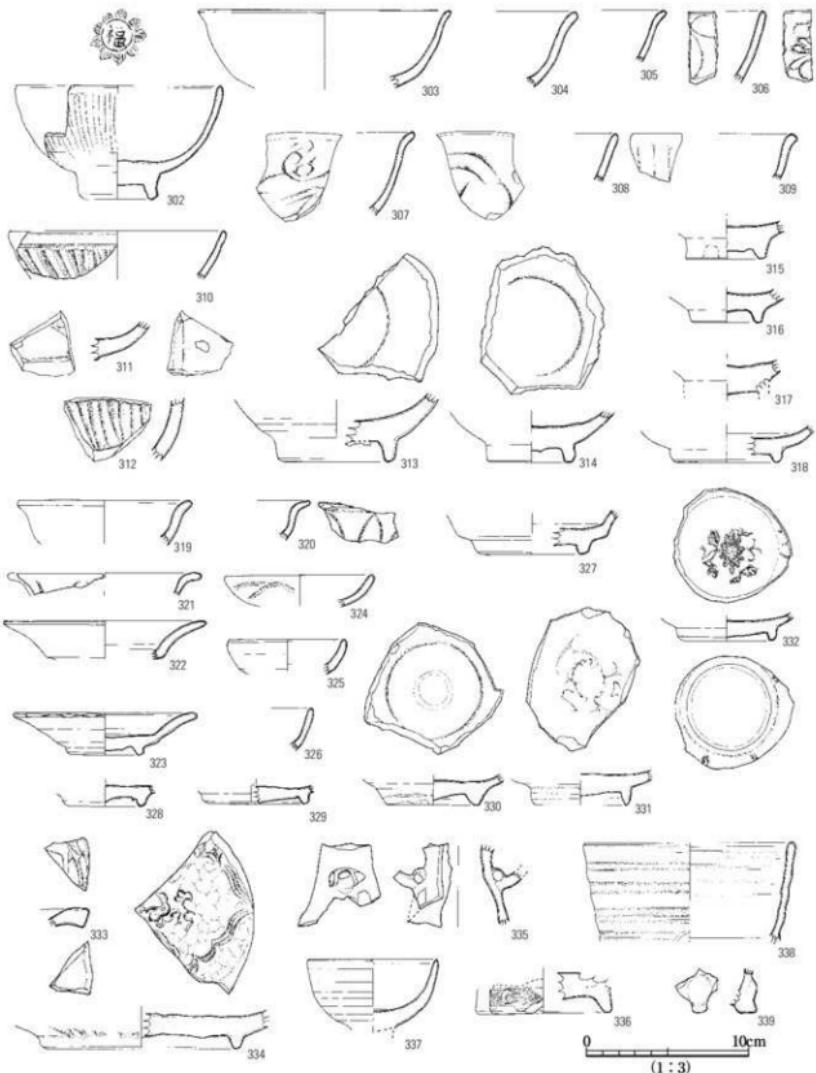
第87図 遺構外出土遺物③【古代：布痕土器】(S=1/3)

(3) 中世の遺物（第88図～第93図-302～384）

【①青磁（第88図-302～339】一部遺構から出土したものを除いて、主に第Ⅲ～Ⅳ層中から出土した。遺構出土のものは溝状遺構からの出土である。近世～近代の溝状遺構に混入したものもあるが、中世遺物のみを伴う溝状遺構からも検出されている。時期は13世紀～15世紀頃と考えられる。

碗（第88図-302～318）302は、外面が細線による退化した蓮弁文、内面見込に「福」の銘をもつ。303～305は内外面無文で、外反する口縁部をもつ。14世紀後半～15世紀前半頃と考えられる。306は内湾しながら立ち上がる口縁部、307は外反する口縁部で、両者とも内外面に劃花文をもつ。13世紀後半～14世紀初頭頃と考えられる。308・310は外面に鏽のない蓮弁文を有する。310は丸彫りによる表現である。311・312は胴部細片である。311は、内面に劃花文らしき文様が、外面に釉着があり不明であるが蓮弁文がうかがえる。312は細片で詳細不明であるが、内面に丸彫りの退化型蓮弁文が確認できる。313～318は底部である。313～314、317は高台内の釉を削りとっている。313は露胎部と施釉部の境界が赤色に変色している。315は高台外面の一部から高台内まで、316は豊付部分のみ無釉である。318は見込部わずかながら印花文らしき痕跡が確認できる。高台部は角高台に全面施釉した後に輪状に削り取っている。

环・皿・浅形碗（第88図-319～332）全体のプロポーションがわかるものが少なく、「环」「皿」「浅形碗」に区別できないものが多くある。ここでは、碗より浅形のものを一括して扱う。319～321は外反する环の口縁部である。320・321は外面に鏽のない蓮弁文がある。322・323は腰部で大きく屈曲する环である。323は口縁部に輪花を有し、見込が円形に無釉である。高台は外端をわずかに聞く角高台で、豊付部のみ釉を剥ぎ取っている。324～326は皿の口縁部である。324は風化しているが、外面にうっすらと退化した蓮華文と考えられる波形文様が確認できる。327～332は高台をもつ底部である。327は腰部で大きく屈曲する环の底部で、高台内のみが無釉である。



第88図 遺構外出土遺物④【中世：龍泉窯系青磁】(S-1/3)

328・329は見込部が円形の無軸、低めの角高台に高台内側が無軸、高台内側の削り方は凸状である。330は見込部に圓線、高台外端を面取りしており、脛付部と高台内側が無軸、高台内側の削り方は凸状である。331は环の底部で、見込部に印花文、高台外端を面取りし、高台外端まで施釉している。332は外面が2本の縱線で5分割し、

内面見込部に印花文、内面に詳細不明蓮弁文を施す。底部は全体施釉後輪状に削り取っている。無釉部と施釉部の境界が赤色に変色している。

**盤**（第88図－333～334）333は口縁部である。口縁部付近で大きく屈曲し、外反している。大きく口縁帯内側には不明瞭であるが、飛雲文のような文様が認められる。334は底部である。復元推定の底部径は12.3cmと大きい。外面には詳細不明の蓮弁文が、内面見込部には蜂の巣のような幾何学文と中心部に劃花文が描かれている。底部は全体施釉後輪状に掻き取っており、無釉部と施釉部の境界が赤色に変色している。

**瓶**（第88図－335～336）335は双耳壺の頸部付近と考えられる。大部分が欠損しているが、耳部と遊環が軸着しているのがわかる。336は瓶の底部である。復元推定の底径は8.4cmで、底部外面に雷文帶をもつ。全体施釉後豊付部の釉を掻き取り、境界部分が赤褐色化している。また、内部の底部に釉が溜まった痕跡がある。336の年代推定は困難であるが、釉の状況などから13～14世紀代と考えられる。

**脚付き壺**（第88図－337）337は壺部のみの検出である。やや深めの壺部の下部に屈曲部分があり、ここに脚部が付属していたと考えられる。この種類の脚付き壺は馬上壺として呼称されることが多い。

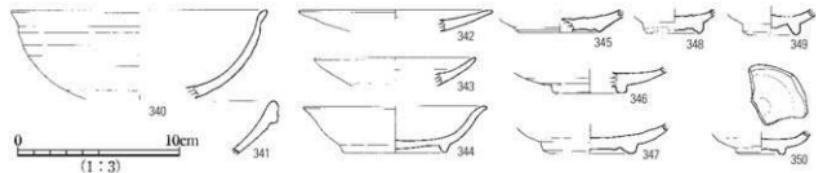
**香炉**（第88図－338～339）338は口縁部～体部片である。器壁は、主に外面からの回転ケズリによって、薄い波板状となっている。下部には脚の痕跡らしきものがうかがえる。339は脚部である。胎土・釉・製作技法などから338と339は同一個体と考えられる。

青磁は細片で年代比定の困難なものが多いが、305・306・312・331・332・333は13世紀中頃～14世紀初頭頃（大宰府分類青磁Ⅲ類の併行期頃：大宰府F期）、303・304・315・317・319・320・322・327～330は14世紀初頭～14世紀後半頃（大宰府分類青磁Ⅳ類の併行期頃：大宰府G期）、302・307・309は15世紀前半以降（大宰府分類青磁Ⅳ類期以降）頃に比定できると考えられる。

**【②白磁（第89図－340～350）】**明らかに近世～近代の造構に混入したものを除いて、主に第Ⅲ～Ⅳ層中から出土した。福建・廣東系の粗製の皿または壺が多い特徴がある。時期は、細片が多く比定に困難なものが多いが、主に14世紀～16世紀頃と考えられる。中には古代に比定されるような白磁も含まれるが、ここでは一括して扱う。分類及び編年基準は大宰府分類、森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」（森田分類）、新垣力・瀬戸哲也「沖縄における14～16世紀の中国産白磁の再整理」「沖縄埋文研究3」2005（沖縄分類）、田中克子「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁」「博多研究会誌 第11号」（田中分類）を参考としている。

**碗**（第89図－340～341）340は、外反する口縁部下を薄くしており、丸みのある体部に回転窓ケズリを施している。内面は滑らかに成形し、見込部には圓線を施している。釉は体部下半までかかっている。沖縄分類B類・田中分類J-2類（14世紀後半～15世紀初頭頃）と考えられる。341は口縁部を折り重ねることによって肥厚させ、玉縁状をしている。大宰府分類IV類（11世紀後半～12世紀後半頃）に属すると考えられる。

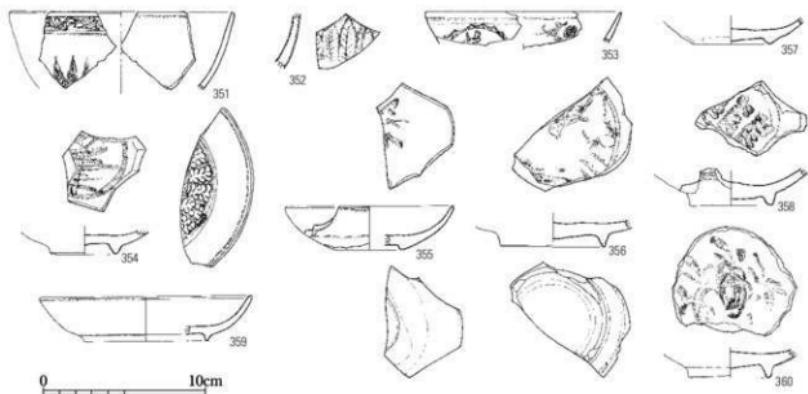
**壺・皿・浅形碗**（第89図－342～350）344は外反する口縁をもつ薄手の皿である。豊付部以外に釉を施してあり、小形高台をもつ。高台内の釉は薄く工具等で平滑に伸ばしているようである。景德鎮系で森田分類E群（16世紀代）と考えられる。342・343は大きく外側に聞く皿の口縁部である。両方とも口縁部付近のみの施釉である。345は菖蒲底気味であるが、少し高台も意識したような印象も受ける。内外面ともわずかに上部のみに釉が確認できることから、342・343のような口縁部をもつ皿の底部と考えられる。体部下半の底部付近にはカンナ目のようなケズリ痕が確認できる。346は見込部が円形釉剥ぎ、高台付近は露胎、高台外面を斜めに削りだしたタイプである。342・343・345・347は体部が大きく開き、見込部を釉剥ぎするタイプで、沖縄分類F類（14世紀後半～16世紀代）と考えられる。346・348・350は、高台外部を斜めに削り取った皿や壺の底部片であり、外面下半部が無釉で回転ヘラ削り痕跡が残っている。沖縄分類D類・森田分類D群（14世紀後半～16世紀前半頃）と考えられる。349は見込蛇の目釉剥ぎを行っている。350は高台内の中心部を菊花状に抉って凸部を減じている。



第89図 遺構外出土遺物⑤【中世：白磁】(S=1/3)

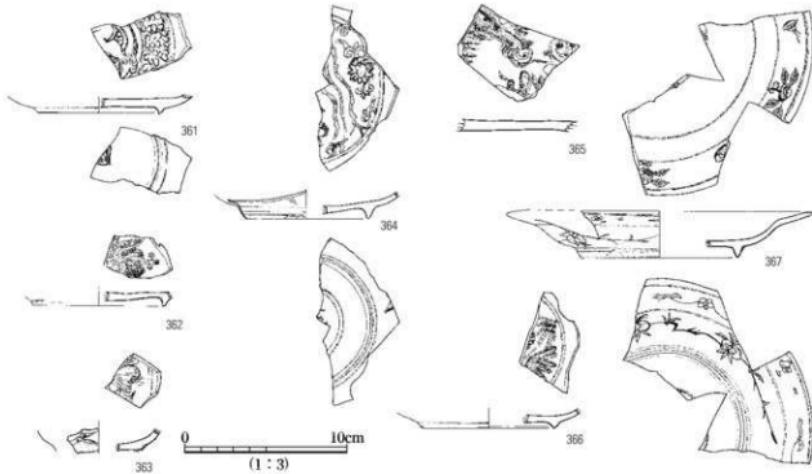
〔③青花〔染付〕(第90図～第91図-351～367)〕 4号溝状遺構(S E 4)と明らかに近世～近代の遺構に混入したものを除いて、主に第Ⅲ～Ⅳ層中から出土した。細片が多く時期比定に困難なものが多いが主に14世紀～17世紀頃と考えられる。一部近世の範疇にも入るが、一括して扱う。器種は碗が少なく皿が中心となる。分類及び編年基準は、1982小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその時代」『貿易陶磁研究No. 2』(小野分類)を参考としている。碗(第90図-351～353, 355, 358) 351・352は体部外面に芭蕉文をもつ。器形は「蓮子碗」のタイプである。351は口縁部外面に波濤文帯、口縁部内面に圓線をもつ小野分類皿C群I類(15世紀後半～16世紀前半)に入ると考えられる。353は外面に文字を、内面に漁をする人が描かれている。355は見込に丸に「寿」を書いており、高台内は疊付部から露胎である。358は陶胎の粗製タイプであり、見込に染色体のような幾何学文をもち、高台内は疊付部から露胎である。

皿(第90図・第91図-354,356,357,359～367) 355・357は葵筒底の小野分類皿C群(15世紀後半～16世紀前半)と考えられる。355は緩やかに内湾しながら立ち上がる器形を呈する。内面見込に「寿」もしくは「宝寿」らしき吉祥字を書いている。357は黄味がかった釉が体部下半までかかっていて、底部付近は回転窓ケズリ痕跡を残したものである。356は底部片であり、見込は圓線に囲まれた山水人物図が、外面は腰部に圓線、高台内に圓線がある。疊付部だけが無釉で、赤化した上に砂の付着が確認できる。おそらく小野分類皿E群X I類(16世紀後半～17世紀初頭)に入ると考えられる。360は見込に花卉文を、疊付部のみが無釉である。漳州窯産の可能性がある。359・361は同一個体の可能性がある。内湾しながら立ち上がる器形で、見込に獅子が描かれている。高台付底部で、疊付部は無釉である。361の高台内には四角で囲んだ文字が確認できるが、判読不能である。小野分類皿E群X



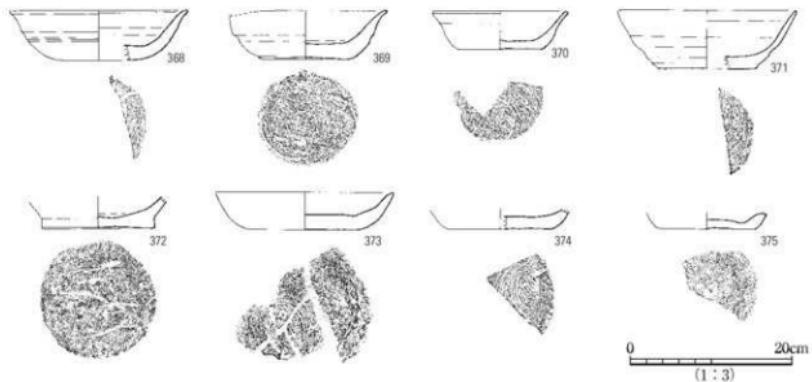
第90図 遺構外出土遺物⑥【中世：青花染付①】(S=1/3)

II類（16世紀後半～17世紀初頭）と考えられる。362・363は細片であるが、脛付部のみが無軸で、見込に十字花文を描いている。363は外面に牡丹唐草らしき文様が確認できる。小野分類皿B群VI類（15世紀後半～16世紀前半）に入ると考えられる。364～367は、薄手で、内湾しながら立ち上がるが一度胴部中位で大きく屈曲する器形の「つば皿」の部類である。共通点は、内傾する高台、高台外側に界線、脣付部が無軸で拭取りか砂が付着しているものがある。小野分類皿F群（16世紀後半以降）に入ると考えられる。



第91図 遺構外出土遺物⑦ [中世：青花染付②] (S=1/3)

【④土師器（第92図—368～375】中世に時期比定できる土師器片は8点図化した。うち1点（373）が近世に属する造構と考えられるSZ5から、3点（368、371、372）がビット中の埋土から出土した。8点のうち回転糸切りによる底部切り離しは6点（368～371, 373～374）、回転ヘラ切りによる底部切り離しは1点（372）、不明1点（375）である。368・369は壺であり、厚手の底部から緩やかに内湾するように立ち上がり、口縁部で外反する器形をもつ。369は外面全体及び内面底部が著しく黒変している。371はやや内湾しながら直立気味に立ち上がる壺で、外面には凹凸著しいヘラ削りの痕跡が確認できる。372は壺である。風化し不明瞭であるがヘラ切りによる底部切り離しと

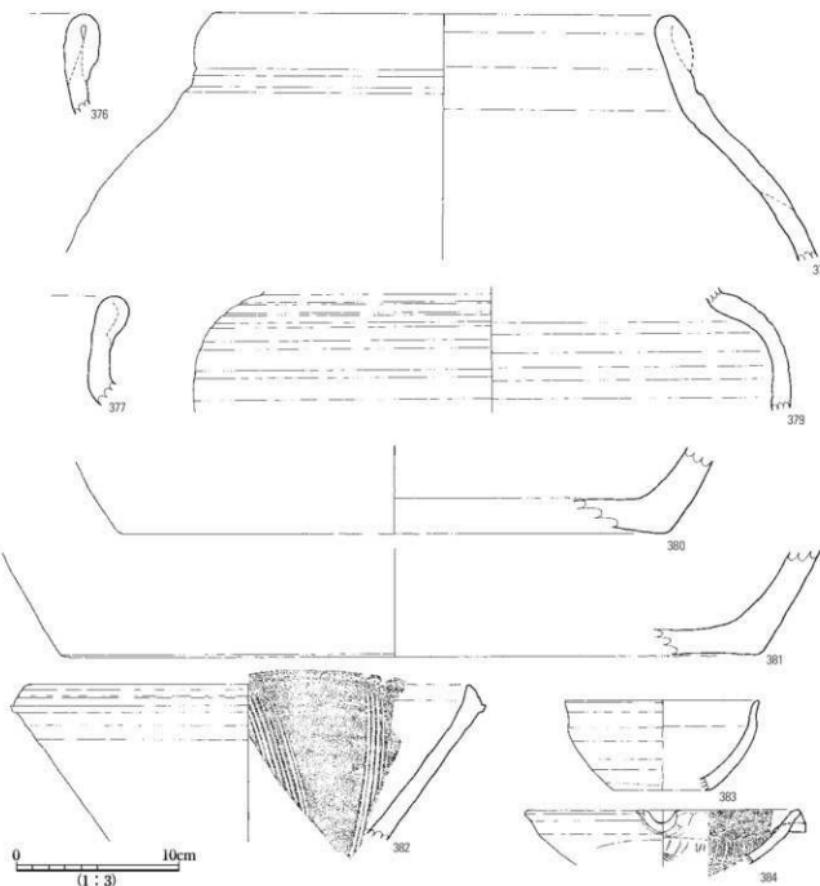


第92図 遺構外出土遺物⑧ [中世：土師器] (S=1/3)

考えられる。また、底部には4条の条線がある。他の回転糸切りの底部をもつものに比べて時期的に古く、中世の早い段階に位置づけされそうである。373～374は皿である。375は風化著しく、全体の調整や形態が不明である。底部の切り離し方法も確認できない。器形はおそらく皿であろう。

#### 【⑤陶器】

(a) 備前系陶器 (第93図-376～382) 出土したものを8点図化した。内訳は4号井戸跡 (SF 4) 出土1点 (66), 遺構外出土7点 (376～382) である。376～381は甌である。376～378は直立または内傾気味の口縁部を折り曲げ、玉縁状に肥厚させる口縁部をもつ。間壁編年 (間壁忠彦1991『備前焼』ニューサイエンス社) の第Ⅳ期(主に15世紀代)の特徴をもち、この時期に比定できる。378は外面に灰黄色～オリーブ黒色系の自然釉が口縁部から胴部上半にかけてかかっている。380～381は底部である。断定はできないが、胎土や焼成状況から考えて備前系甌の底部と判断



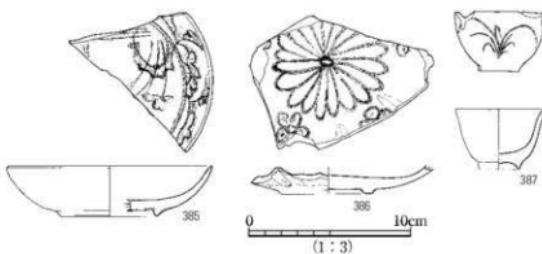
第93図 遺構外出土遺物⑨ [中世：備前系・瀬戸美濃系陶器] (S=1/3)

した。382は擂鉢である。放射状にひろがる7条1単位の擂目をもつ。口縁部は、上部を少し立ち上げ、下部を摘み出すことによって器壁よりも少し厚い口縁帯を作っている。口縁帯には条線はもたないが、わずかにナデによって調整を施している。開窓編年を参考にすると、376~381の変同様、第Ⅳ期に時期比定できるのではないか。 (b) 濑戸・美濃系陶器 (第93図-383~384) 遺跡からは4点出土した。内訳は遺構から3点 (SZ 6 [第93図-383]・S E 4 [第57図-185]・石列A [第23図-44])、包含層から1点 (384) である。遺構出土3点のうちSZ 6出土 (383) は遺構年代と大きな開きがあるので考えられるので、ここで扱う。383は天目茶碗である。口縁はS字形にくびれ、外外面に鉄釉を施す。胴部下部は無釉である。底部が欠損しており、詳細は不明であるが、14世紀後半から15世紀代と考えられる。384は瀬戸の御皿である。外側の口縁部から体部上半には緑釉が施され、内面の体部下半部には緑釉で、底部付近は横方向の鉄目が施されている。15世紀代と考えられる。

#### (4) 近世の遺物 (第94図~第108図-385~554)

##### 【①初期伊万里系磁器 (第94図-385~387)】

遺跡からは5点出土した。そのうち4点の図化を行った。4点の内、1点が石列A区内出土 (第23図-45)、3点が遺構外出土 (385~387) である。385・386は皿である。386は見込部に菊花文をもつ菊花形皿である。385・386はいずれも底厚な器形で、疊付部に砂が付着し、器面にはフリモノが付着している。387は小杯である。底部は外側の約半分まで施釉してあり、高台内や疊付部は無釉である。外側には緑色の草文が確認されるとともに、わずかに青色の文様が確認できる。



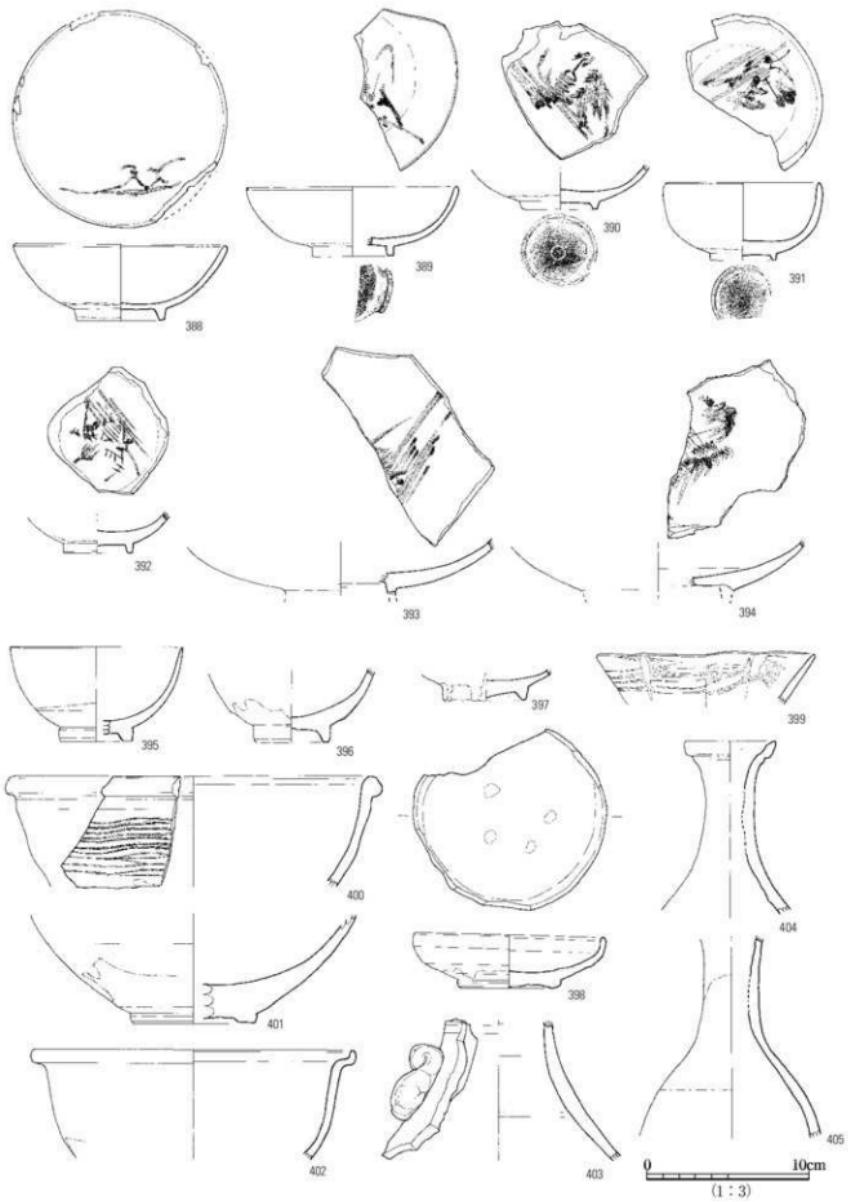
第94図 遺構外出土遺物⑩ [近世：初期伊万里系磁器] (S=1/3)

##### 【②京焼風唐津系陶器 (第95図-388~394)】

図化した8点のうち、遺構出土は1点 (SZ 6: 1点)、遺構外出土7点 (第95図-388~394) である。17世紀後半頃に時期比定できる。388~392は碗である。いずれも底部は疊付部分を平坦に削り、高台内を平滑に仕上げている。見込部には錦絵風の山水文や竹林文が描かれている。388は底部付近に鉄釉を施して後、外側面の施釉を行っている。疊付部のみ無釉である。389・390は高台内にわずかに印銘が確認できるが、判読できない。391は高台内に「清水」の印銘が確認できる。393・394は皿である。いずれも高台部分が欠損しているため底部の調整は不明であるが、いずれも高台内の施釉が確認できる。

##### 【③唐津系陶器 (第95図-395~405)】

図化した18点のうち、7点が遺構出土 (S E 4: 2点, SF 4: 1点, SZ 2: 1点, SZ 6: 3点)、11点が遺構外出土 (第95図-395~405) である。395~397は碗である。395は内面全面に灰オリーブ色の、外側に青緑色釉をかけている。体部下半から底部にかけて露胎である。396は内面灰オリーブ色、外側緑銅色に釉をかけている。体部下1/3から底部にかけて露胎である。SZ 2出土の144と類似している。いずれも内野山北窯産の可能性があり、17世紀後半から18世紀前半頃に時期比定される。397は淡黄白色の施釉が施してあり、底部付近は露胎である。底部は疊付部分を平坦に削っているが、高台内は兜巾底気味に仕上げている。京焼風陶器にも見える。398は皿である。

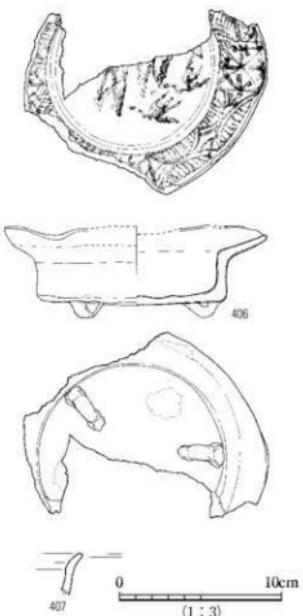


第95図 遺構外出土遺物⑪ [近世：唐津系陶器] (S=1/3)

内外面灰色施釉、底部は低い高台で、ヘラ切りのようである。見込部に4つの胎土目積みをもつ。外面および見込部に液体などの跡か鉄錆色の付着物をもつ。16世紀末葉頃と考えられる。399は後花形の鉢(向付)である。白化粧土を刷毛塗りしている。18世紀代か。400・401は鉢である。400は口縁部を肥厚させた口縁帯を有し、内外面に白化粧土を刷毛塗りしている。18世紀前半頃と考えられる。401は内面と外面は体部の途中まで褐色釉を施している。底部は低めの器台で、豊付部と高台内を削り、平滑に仕上げている。402は土鍋である。上半部のみ施釉している。関西系の可能性もある。403~405は瓶である。403は鉄釉を施す。頸部にS字状の把手をもつ。花生と考えられる。404・405は瓶であるが、形態から徳利と考えられる。いずれも17世紀代と考えられる。

#### 【④瀬戸・美濃系陶器（第96図-406~407）】

瀬戸・美濃系と考えられる陶器は2点出土した。いずれもA区の遺構外出土である。406は1号掘立柱建物跡（SB1）近くで出土した輪花鉢（向付）である。おそらく志野と考えられる。全体の約2/5が出土しており、全体のプロポーションがおよそ推定できる。底部は紐状のものをアーチ状に貼り付けた脚台を3分割にした箇所に取り付けている。器形は体部上部で大きく外側に向く。見込部に竹林文、大きく開いた内側口縁帯に幾何学文を鉄釉で描いている。その上から灰透明色のおそらく長石釉をかけている。いわゆる絵志野の類と考えられる。時期は16世紀末~17世紀初頭頃か。407は口縁部である。細片であるため詳細は不明であるが、釉調や胎土が406と酷似しているため列記する。



第96図 遺構外出土遺物②  
【近世：瀬戸美濃系陶器】(S=1/3)

#### 【⑤肥前系磁器（第97図~第102図-408~488）】

肥前系と考えられる磁器は本遺跡出土遺物の中でも中心的存在であり、多数出土した。ここでは、器種別を中心とした記述を行う。中には肥前に産地を求めることが困難で、断定できないものが多く存在するが、産地不明の染付磁器も「肥前系」としてここで取り扱うこととする。

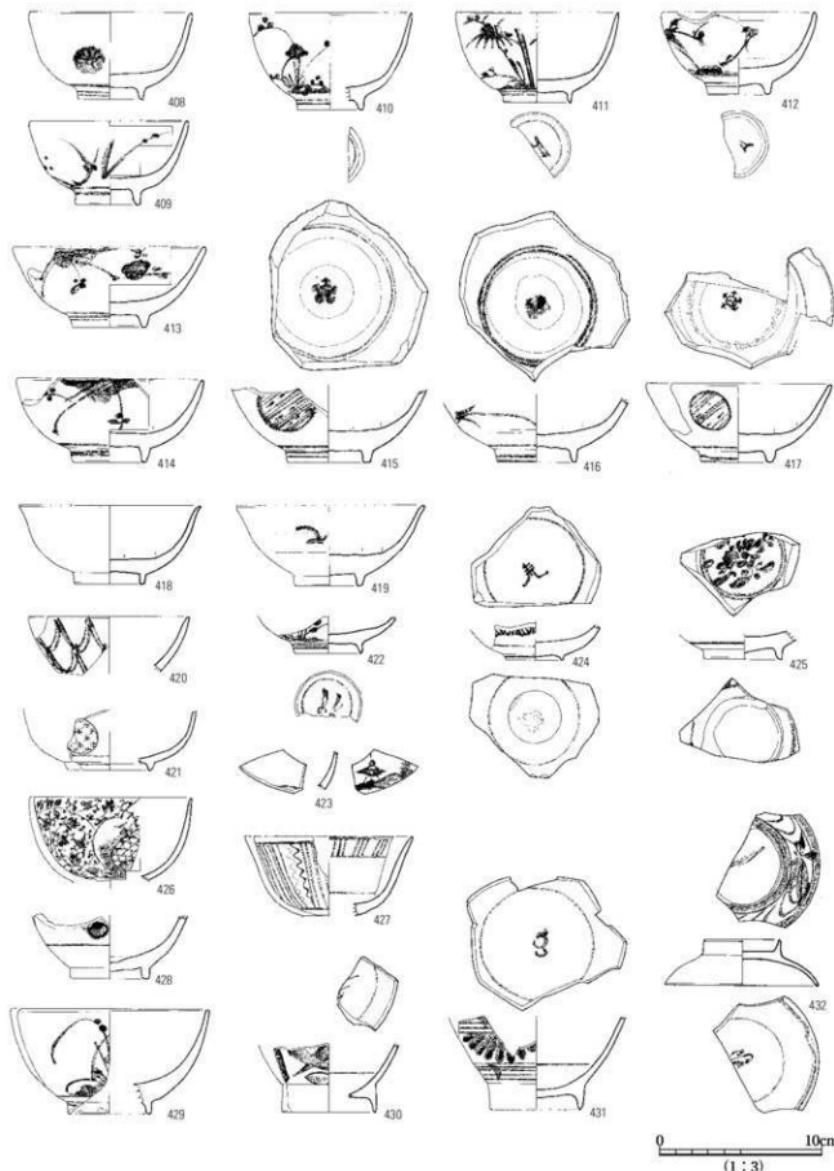
(A) 碗（第97図~第99図-408~446）…碗は器形によってさらに細分する。

碗Ⅰ類…丸形碗a（408~412, 420）：丸みをおびながら立ち上がる器形をもつ。粗製のいわゆる「くらわんか碗」。

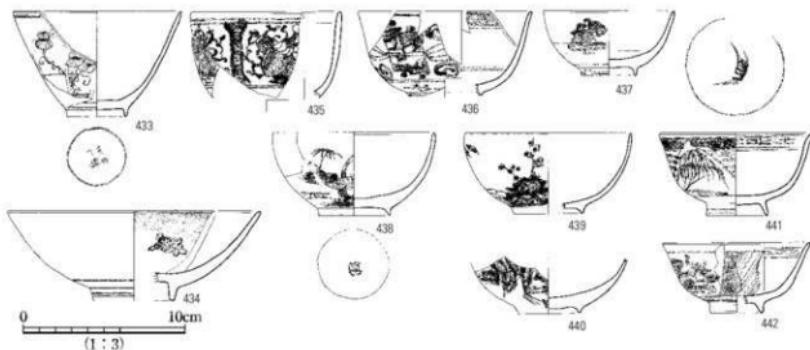
主に18世紀後半頃に属する。図化していない破片などをあわせると20~30個体分出土している。コンニヤク印判による菊花文（408）、草花文や竹林文（409~412）、二重網目文（420）を施すものがある。

碗Ⅱ類…丸形碗b（413~417）：碗Ⅰ類と似ているが、口縁は、口径がやや大きく、丸みを帯びているが碗Ⅰ類ほどではなく、やや開き気味に立ち上がる。見込部は蛇の目釉剥ぎである。主に18世紀後半頃に属する。図化していない破片などをあわせると20個体前後分出土している。415~417は見込部に五弁花のコンニヤク印判を施している。文様には多様性があり、梅樹文（413・414）、丸文（415・417）、草文（416）などがある。

碗Ⅲ類…丸形碗c（421~426, 428~429）：部分的な細片であるため、分類が困難なものを一括して扱う。421は外面に龍目文をもつ。器形は碗Ⅰ類に似ているが、薄手で胎土が陶質のようである。422は高台内に文字を崩したような文様が描かれている。崩された「大明年製」の可能性がある。423は薄手で外面に東屋山水文が確認できる。424は見込部に寿文字文を施す。18世紀後半頃か。426は薄手で、丸みを持ちながら立ち上がる器形で、



第97図 遺構外出土遺物① [近世：肥前系磁器①] (S=1/3)



第98図 遺構外出土遺物⑩ [近世・肥前系磁器②] (S=1/3)

外面に花唐草文と丸文の組み合わせの文様を施す。17世紀後半頃と考えられる。428は内面見込部が他と異なり平坦ではなく凹状となっている。429は器形が碗Ⅰ類で、碗Ⅱ類のように蛇の目軸剥ぎをもつ。文様もくらわんか碗に多い雪輪梅花文と考えられる。18世紀後半頃と考えられる。

**碗IV類…端反碗** (418・419・427)：口縁部形は丸みを帯びながら立ち上がるが、口縁端部付近で外反する。18世紀末葉頃から19世紀前半頃に属する。SZ1で3点出土している(第39図-76~78)。遺構外での出土数は少ない。蛇の目軸剥ぎをもつもの (418・419) がある。427は外面によろけ繪文を施す。

**碗V類…広東碗** (430~432)：薄手で底部から口縁部にかけて直線的に開く器形をもつ。高台は高く径が大きい。18世紀末葉頃から19世紀中頃に属する。432は蓋部である。

**碗VI類…朝顔形碗** (433)：薄手で、底部で大きく屈曲し、開きながら直線的に立ち上がる器形をもつ。433は外面に朝顔文、底部高台内に「宣明年製」の銘款がある。17世紀後半頃と考えられる。

**碗VII類…大形碗** (434)：434の口径は、他の碗の口径が10cm前後に比べて、15.5cmと大きい。器高に対して口径が大きく、底部から口縁部にかけて大きく開く器形をもつ。うがい茶碗と考えられる。

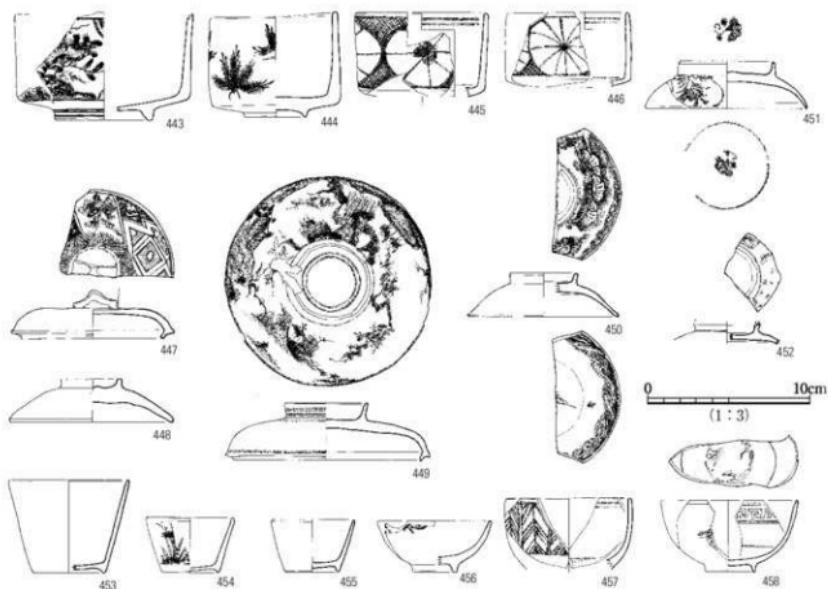
**碗VIII類…小丸碗** (435~442)：口径が8~10cmと口径の小さいものを一括して扱う。435は蓋付きの碗か鉢である。口縁部内面に幅0.7cm程軸を搔き取った帶状的部分が存在する。外面は宝文であり、17世紀後半頃と考えられる。436は外面に宝文で、卷物をモチーフとしているようである。呉須の青色発色が鮮やかで、呉須が盛り上がる特徴をもつ。瀬戸・美濃系磁器と考えられる。19世紀中頃か。本遺跡では、同じような文様をもつものが5個体以上出土している。437は粗製で淡黄色である。外面に松文のコンニャク印判が施されている。18世紀後半~19世紀頃と考えられる。438は高台内に「簡江」の銘款がある。「簡江」は簡江窯を示す。18世紀代と考えられる。439は雪輪梅樹文であり、18世紀前半と考えられる。440は呉須が群青に発色しており、筆文を施している。18世紀後半頃か。441は端反形で、口縁内面に変形した雷文帯、外面には筆文、見込部に筆文をもつ。19世紀前半に属する。442は色絵磁器である。やや端反気味の口縁をもち、口縁内面は赤色細線書きの雷文帯をもつ。19世紀代と考えられる。

**碗IX類…筒形碗** (443~446)：底部で直角に立ち上がる円筒形の碗である。443の推定口径は11.2cmと大きいのに対して、444~446の推定口径は7.8~8.2cmである。443は18世紀代の蓋付鉢の可能性がある。444~446は18世紀後半頃から19世紀初頭にかけての湯呑碗と考えられる。

(B) 蓋 (第99図-447~452)：蓋は碗や鉢などに用いられてきたと推定できるが、どの器種に用いられてきたか断定に難しい。ここでは蓋部に用いられたものを一括して扱う。ほとんどが18世紀中頃~19世紀代に属すると

考えられる。447は熨斗状の鉢をもつ色絵磁器である。448は青白磁調で、内面が蛇の目釉剥ぎとなっている。449は庭園らしき文様を描いている。18世紀代頃か。450は暗青灰色の呉須で、外面に松木文、口縁部内面に墨弾きの技法を一部用いた波文を施している。器形は口縁が外反し、19世紀代の端反碗などの蓋の可能性がある。452は小形蓋である。外面に崩した文字の文様を施している。

(C) 小杯 (第99図-453~458) 453は薄手の白磁調で、他のものより口径が7.4cmと大きい。大きさから考えて18世紀代のそば猪口であろう。454・455は19世紀代に生産された猪口形の盃と考えられる。457は外面矢羽根文を施す。推定口径7.6cmで、大きさから考えて19世紀代の丸型湯呑み碗であろう。458は内面見込部に環状の松竹梅文、口縁部内面に雷文帯、外面に鳥と植物の文様を施す。19世紀前半頃と考えられる。

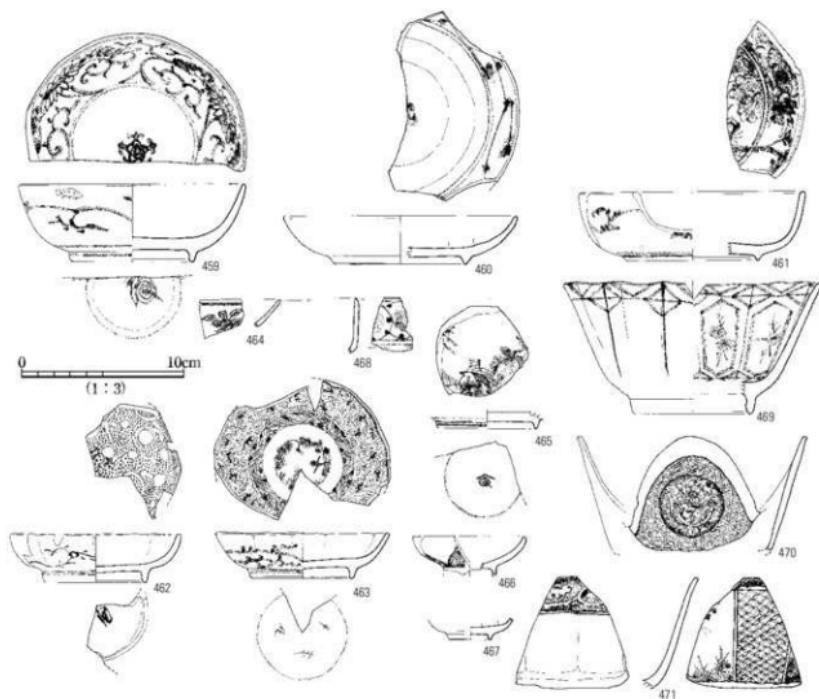


第99図 遺構外出土遺物⑩ [近世：肥前系磁器③] (S=1/3)

(D) 盆 (第100図-459~467)：本遺跡出土の磁器皿は、小皿である直径10cm前後の輪花皿と15cm前後の丸形五寸皿が中心であり、直径20~30cm前の大皿・中皿は少ない。また、遺構外出土は少なく、図化したもので9点である。459~461は推定口径12~14.4cm・推定器高8cm前後のいわゆる平形五寸皿である。外面の蛇行唐草文(459・461)、見込部の五弁花(459・460)、見込部の蛇の目釉剥ぎ(460)、高台内の渦福の銘款など18世紀代のおそらく波佐見窯系の特徴をもつ。459は口縁部に口紅装飾を施す。462は破片であるが、復元すると六角形になると考えられる。内面に点描による円形文、外面は退化した牡丹唐草文を、口唇部には口紅を施す。463は内面に環状松竹梅文、外面に牡丹唐草文を配する。高台内に「成化年製」と銘款がある。18世紀後半に属する。同形のものが図化はしていないが1号井戸跡から出土している。465は底部付近のみであるが、見込部に山水風景文、高台内に山の下に渦福の銘款をもち、18世紀後半頃と考えられる。467は白磁調の小皿で、内面は蛇の目釉剥ぎ、高台内に紅らしき灰赤色の残留物が確認できる。おそらく紅皿である。

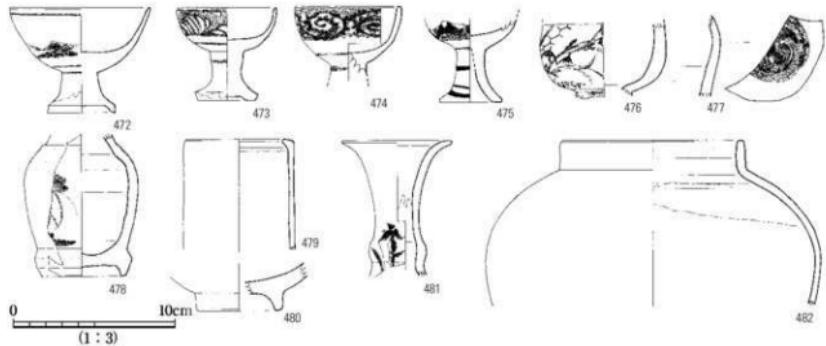
(E) 鉢 (第100図-468~471)：468は薄手の口縁部から体部にかけての破片で、外面に円形文を施している。おそらく段重の部分と考えられる。469は八角鉢で内面全面に幾何学文を施す。471は口縁の外反する八角鉢で

ある。外面が区画され、各区画内に七宝文や草花文を施す。口縁部内面に墨書きによる蛸唐草文帯をもつ。469・471は19世紀代と考えられる。470は赤絵磁器である。4分割した山形突出部をもつ波線鉢である。時期については不明である。



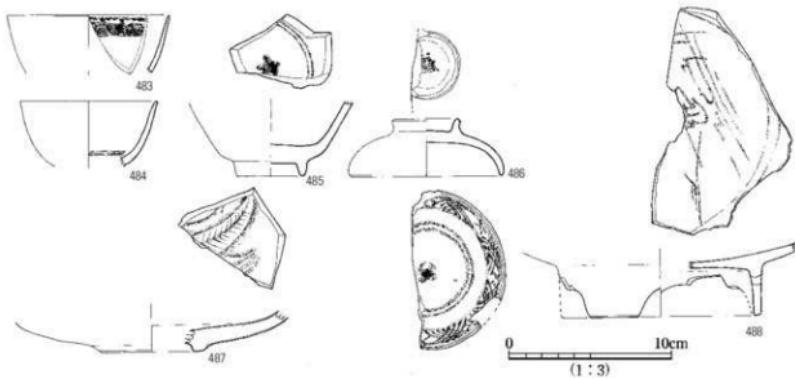
第100図 遺構出土遺物⑩ [近世：肥前系磁器④] (S=1/3)

- (F) 仏飯器 (第101図-472~475) : 473は外面が赤絵による半菊花文と考えられる。474は外面蛸唐草文様を施し、18世紀後半頃と考えられる。475は、脚台が他のようにロクロア形による底部削りだしではなく、坏部付近まで抉こみが存在する。赤・青・緑の三色を用いて文様を描いている。詳細時期は不明であるが、いずれも18~19世紀頃に時期比定できる。
- (G) 瓶 (第101図-476~478, 481) : 476は底部付近であり、丸型湯呑み碗のプロポーションと似ているが、器壁が厚く異なる。477はやや薄手の肩部付近であり、外面に丸に橘らしき文様を施す。478は白磁調の釉を施す。481は徳利の口縁部から頸部にかけての部分と考えられる。SZ1出土の体部 (第40図-116) と酷似し、同一個体の可能性がある。
- (H) その他 (第101図-479~480, 482) その他少数の器種を一括して扱う。479は筒形を呈する。白磁調の釉を外面が全面及び内面が口縁部付近のみに施す。形態から考えて筆筒の可能性がある。480は明緑灰色釉を施す底部である。鉢の底部とともに高台が高く、香炉などの可能性もある。482は壺である。外面が全面、内面が肩部付近まで白磁調の釉を施す。18世紀後半~19世紀代頃に時期比定できる。



第101図 遺構外出土遺物⑪ [近世：肥前系磁器⑤] (S=1/3)

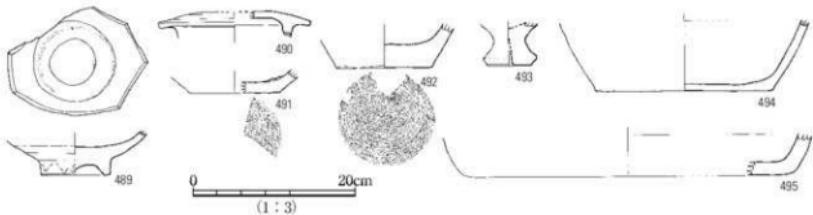
(1) 青磁染付陶磁器（第102図-483～488）：肥前系とされる青磁染付陶磁器を一括して扱う。波佐見窯で生産されたと考えられる。483～485は碗である。外面に明緑灰色の青磁染付を、内面に灰白色釉を施す。483・484は丸形碗、485は蓋付の朝顔形碗である。485は見込部にコンニャク印判の五弁花文を施す。486は形態から考えて碗の蓋である。外面に明緑灰色の青磁染付を、内面に灰白色釉を施す。内面見込部にコンニャク印判の五弁花文を、口縁内面に四方棒文帯をもつ。摘部内側に銘款を有するが、判読できない。487は皿である。龍泉窯系青磁と酷似している。内外面にオリーブ灰・緑灰色の青磁釉を施す。盤付部は無釉で、砂が付着している。内面見込部は芭蕉文を施す。17世紀前半頃と考えられる。488は三方に高台脚をもつ皿である。底部は蛇の目釉剥ぎを行っている。見込部に水辺のような文様を施している。17世紀前半頃と考えられる。



第102図 遺構外出土遺物⑫ [近世：肥前系青磁染付磁器] (S=1/3)

#### 【⑥薩摩系陶器（第103図-489～495）】

489は碗の底部である。外面は底部付近まで施釉。底部は露胎で、兜巾底である。内面は見込部が蛇の目釉剥ぎである。490は土瓶の蓋部である。外面のみ施釉である。491は皿の底部である。内面のみ施釉で、内面にワラ灰か焼成後の付着物が確認される。底部は糸切り底である。灯明皿の可能性がある。492は瓶の底部である。底部は無釉で、糸切り底で痕跡が残る。内外面の釉は光沢のある飴色である。493は無釉で、底部中央部に径約4 mmの穿孔が施されている。形態からひょうそくと考えられる。494・495は、手触りがざらつく灰褐色系の釉が施されている。鉢の底部と考えられる。



第103図 遺構出土遺物⑩ [近世：薩摩系磁器] (S=1/3)

【⑦陶器擂鉢（第104図-496～506）】

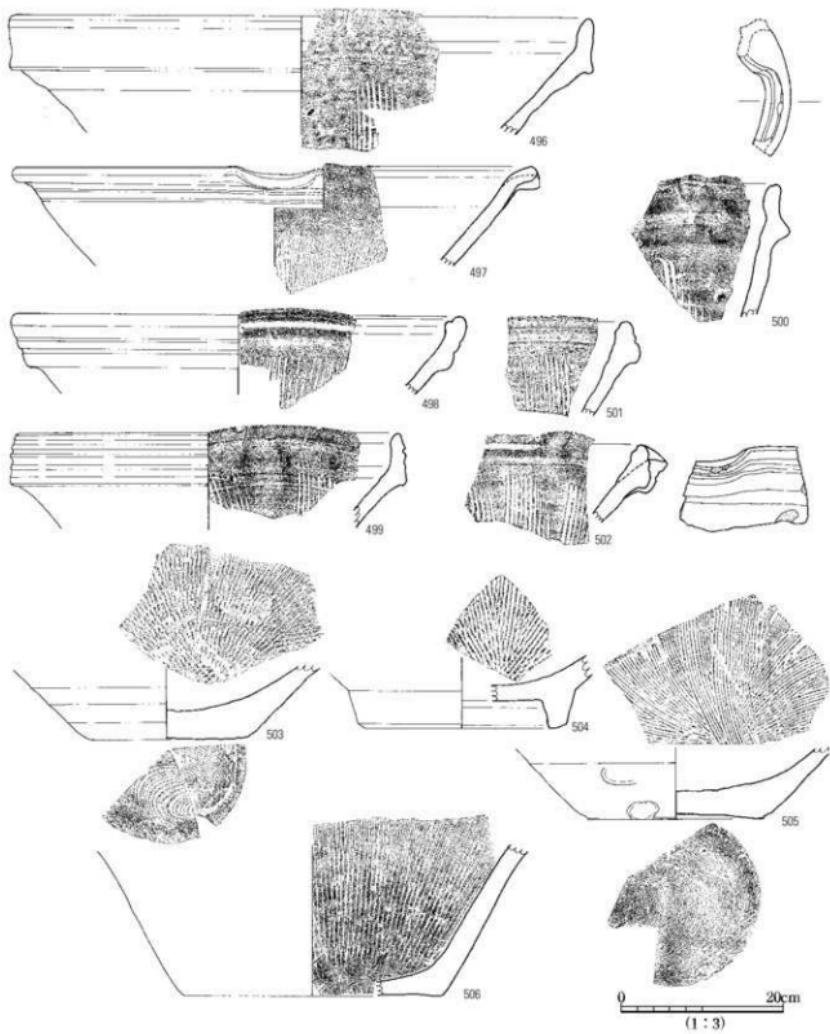
陶器擂鉢が複数出土した。ある程度産地が推定できるものもあればできないものもあるが一括して扱う。496は口縁帯に凹線表現をもたず、放射状の擂目が9条1単位となっている。497は内外面に褐色釉が施されており、わずかに肥厚させた口縁を外反させる。擂目は丁寧な柳描きを施し、上端をなで揃えている。唐津産と考えられる。498は口縁内部に1条の縁帯もつことから堀型と考えられる。499は、灰色系の発色をした口縁部で、口縁帯に4条程度の凹線表現をもち、やや斜方向の擂目をもつ。500は、他の擂鉢に比べて口径が小さく、立ち上がりのある体部をもち、コップのような器形を呈すると考えられる。502は口縁帯に3条の凹線表現、口縁内部に1条の縁帯らしき表現がある。擂目は放射状の10条1単位で、器面にはぶい赤褐色である。503・505は底部糸切り痕をもつ底部で放射状の擂目をもつ。産地は不明である。504は高台をもつ底部で放射状に擂目をもつ。外面にわずかではあるが釉が付着している。産地は不明であるが、18世紀後半～19世紀前半頃の唐津産の可能性がある。506は底面にナデ調整を施す底部である。12条1単位の擂目は放射状であるがかなり摩耗しており、使い込まれたことが推測される。

【⑧産地不明陶磁器・瓦質土器・土器類（第105図-507～529）】

(A) 磁器碗(第105図-507～508):507・508は磁器碗である。白磁調に白粉が吹いたような釉を施す。507は蓋部で、508は碗である。508は疊付部のみが無釉である。2つは径の大きさから蓋と身の関係ではないと考えられるが、同一産地、同一のセット関係であった可能性がある。他にも数個体同じ釉調のものが出土している。

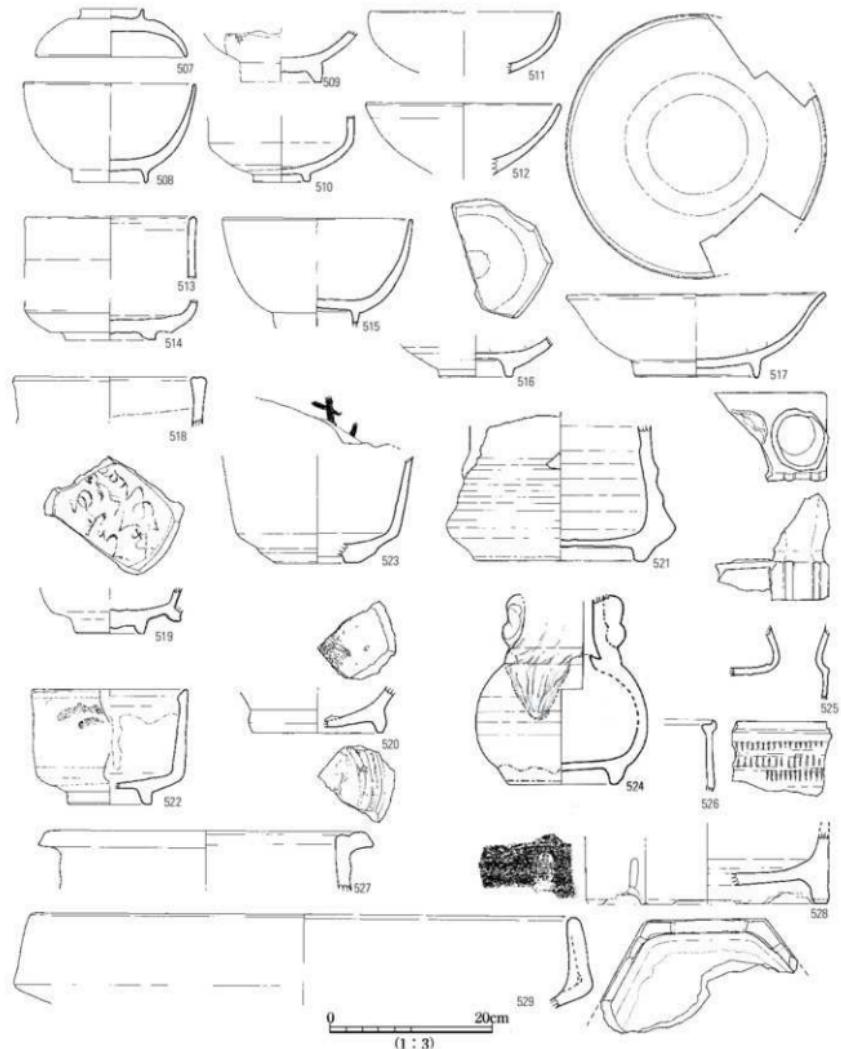
(B) 陶器碗・鉢(第105図-509～517, 520):509～516は碗である。509は疊付部以外施釉している。疊付部は平滑に削られており、17世紀後半頃の唐津産の可能性がある。510は体部下半で大きく屈曲する腰折型で、底部付近が露胎である。底部は疊付部と高台内部が平滑に仕上げられており、唐津産と考えられる。511は口縁部で丸みをもちながら立ち上がる器形を呈し、白磁調釉を施している。碗と考えられるが、合子などの可能性もある。512は貫入著しく、にぶい黄色釉を施す口縁部である。圓化はしていないが、類似する釉をもつ底部は、饅頭心状の底部に疊付部を整形している。513・514は筒形碗である。514の底部は疊付部から高台まで露胎である。両者は、ともににぶい黄橙色釉を施しており、おそらく同一個体と考えられる。形態から考えて、湯呑み茶碗か。515は貫入の多い白磁調の釉が施された深めの碗である。高台付近が欠損しており不明であるが、高台内外面・高台内部は釉が施してある。516は内外面に貫入の多い淡黄色釉を施した碗である。疊付部は平滑に削られており、無釉である。見込部は蛇の目釉剥ぎである。産地は不明であるが、京・信楽系の可能性もある。517は灰色胎土に黄褐色釉を施した鉢である。わずかに口縁部が外反する器形で、見込部には蛇の目釉剥ぎ、疊付部のみが無釉である。520は細片で詳細不明であるが、鉢の底部と考えられる。にぶい黄褐色胎土に黒褐色釉を施し、見込部及び高台内側に薬灰らしきものが付着している。

(C) 陶器香炉・火入・水指(第105図-518～519, 521～523):518・519は同一個体と考えられる陶胎青磁の香炉である。518は外面全面および内面の上半に青磁調釉が施している。519は外面のみ施釉で、内面見込部に、判読不能



第104図 遺構外出土遺物20〔近世：陶製擣鉢〕(S=1/3)

であるが、かな文字が書かれている。521は水指である。きめ細かい灰白色の胎土に内外面に貫入の多い青磁釉を施す。底部の豊付部と高台内に赤変箇所があるが、意図的に鉄釉を塗布しているようである。522は火入である。外面が底部付近を除く部分、内面が口縁部付近に青灰色釉を施している。筒形の器形に内側が玉縁状に肥厚する口縁部をもつ。523は陶胎青磁の火入である。外面が豊付部を除く部分、内面が口縁部付近に青磁調釉を施している。見込部に化粧土を施した上に墨書で文字を書いているが、破片のため識字できない。



第105図 遺構外出土遺物②【近世：産地不明陶磁器・瓦質土器・土師器】(S=1/3)

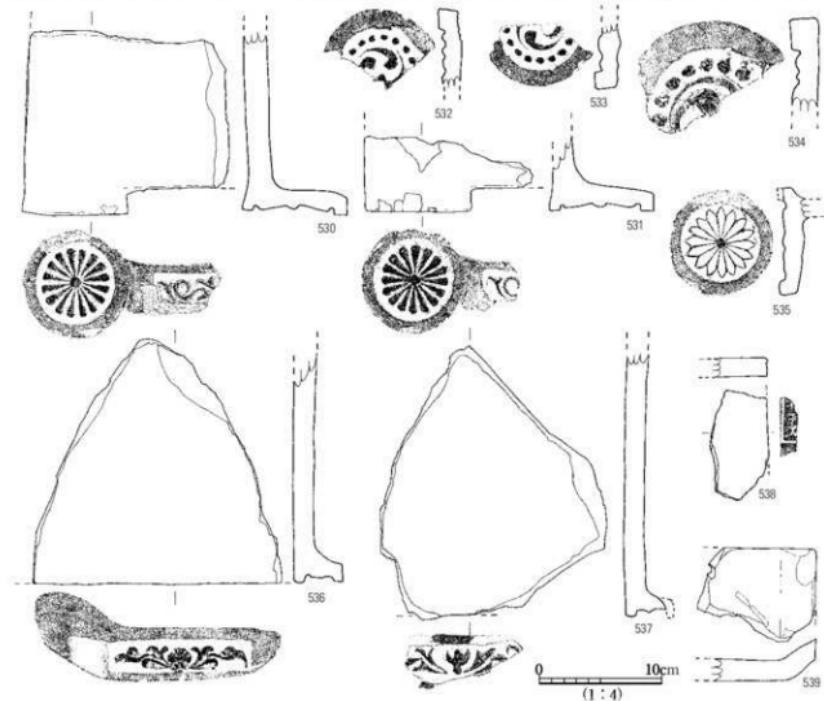
(D) 陶磁器その他 (第105図- 524~526) : 524は仏花瓶である。頭部から上が欠損しているが、頸部にS字状の耳部をもつ。一度暗オリーブ色釉を施した後に、青と白色の混じった釉薬をかけている。525は薄手の磁器の外側に黒色釉を施している。器形は欠損しており全容が不明であるが、上部にむかって緩やかに開く部分と直方体部分から構成される。器種を断言することは難しいが、筆洗の可能性がある。526は関西系の行平鍋の口縁部と考えられる。内面には光沢のある黄褐色釉を施す。外面には暗褐色釉を施した後に飛び鉢が施される。

- (E) 瓦質土器 (第105図-527~528) : 527は鉢の口縁部である。おそらくSZ1出土の獅子頭をもつ鉢の脚部 (第41図-127) と同一個体である。528は六角鉢である。体部に判読出来ないが、印刻が施されている。
- (F) 土師質土器 (第105図-529) : 529は土師質の焰壺と考えられる。産地が不明であり正確なことは不明であるが、関西系焰壺の編年を参考にすれば、類似した形態は18世紀後半~19世紀前半頃に位置付けられていることが多い。

#### 【⑨瓦 (第106図~第107図-530~546)】

瓦は遺構外から多数出土した。多くは御堂があったC区、及びA区からである。図化は銘や瓦当面に文様が確認できるものを中心に17点行った。

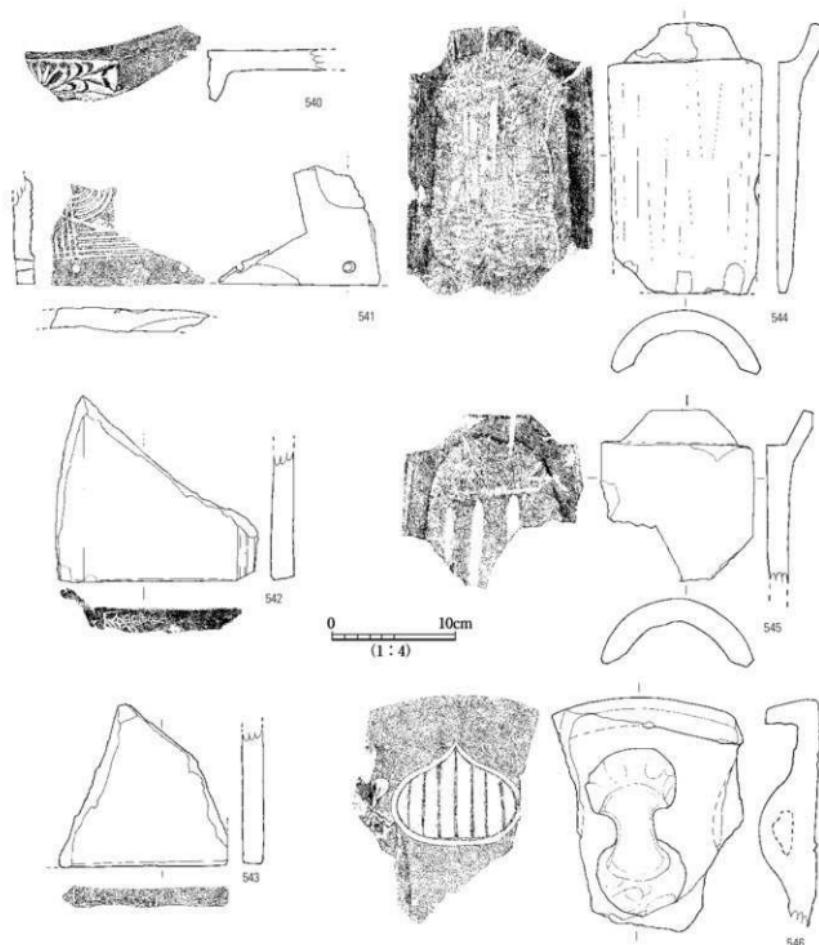
530・531は軒棧瓦である。丸瓦部は陽刻の菊花文、瓦当面は唐草文である。531は中心部が無く不明であるが、530はおそらく中心飾が横文である。532~535は軒丸瓦の瓦当面である。532~534は中心の三巴文を珠文帯が囲む。532の裏面上部には、幅約2.2cmの木蓮などの工具で撫でたと考えられる波状の痕跡が確認される。これは背部の瓦と容易に接合するための接合面とも考えられる。535は菊花文である。裏面上部に長さ2.7cm幅1.5cmの長方形の突起物が確認できる。536・537・540は唐草文をもつ軒平瓦である。536~537は中心飾に柄をもつ。540は中心飾に



第106図 遺構外出土遺物㉙ [近世：瓦①] (S=1/4)

半菊花文と考えられる文様をもつ。538~539、541~543は平瓦である。538・543は「城ヶ崎小平次」またはその一部の印刻をもつ。同じ印刻をもつ瓦は池跡と考えられる遺構 (SZ1) からも多数出土している。542は「久島…」と判読できる印刻をもつ。本遺跡において、銘のある印刻は「城ヶ崎小平次」が主流であり、「久島」の印刻はこ

の1点のみである。541は2か所の釘穴をもち、片面に櫛歯状工具で縦・横・同心円状に文様を施している。目的については不明であるが、文様ではなく滑り止め目的と考えられる。544・545は丸瓦である。いずれも裏面には布目痕跡が確認され、その上から幅約7mmの先丸状工具で縦方向の搔き取りを行っている。製作方法は、丸瓦と玉縁部の境界付近に著しいナデ痕跡と粘土の雜目が確認されることから、丸瓦部分に別造りした玉縁部を合成する方法であることがわかる。544・545、そしてSZ1出土の142は大きさや製作方法から同一規格品の可能性が考えられる。546は飾瓦である。表面は宝珠文が中央部にある。脇部には何らかの装飾が確認されるが、破損しており不明である。裏面は把手状のものが付着している。



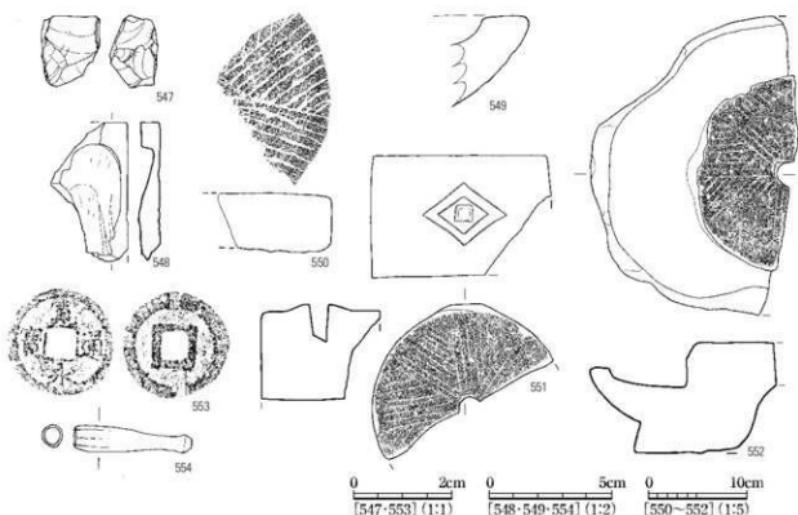
第107図 遺構外出土遺物23 [近世:瓦②] (S=1/4)

【⑩石器（第108図—547～552）】

547は火打石である。乳白色玉髓製で1cm弱の立方体に近い形で、後に連続するツブレが確認できる。548は堆積岩系の石材を用いた硯である。549は凝灰岩製の石臼の口縁部と考えられる。550～552は凝灰岩製の石臼である。いずれにも放射状の擂目が施されている。551は方形の挽き木孔を、中央に心木孔を穿っている。552は、中心に心木孔を穿っている。551・552は擂面同士の径を推定すると18.5～18.8cmとなり、同一個体の可能性がある。形態から考えると茶臼の可能性がある。551・552の擂目は目が浅く、摩耗していると推測できる。

【⑪金属製品・錢貨（第108図—553～554）】

553は錢貨で寛永通宝である。554は煙管の吸口部である。羅宇との接続部から中位にかけてわずかに膨らみ、吸

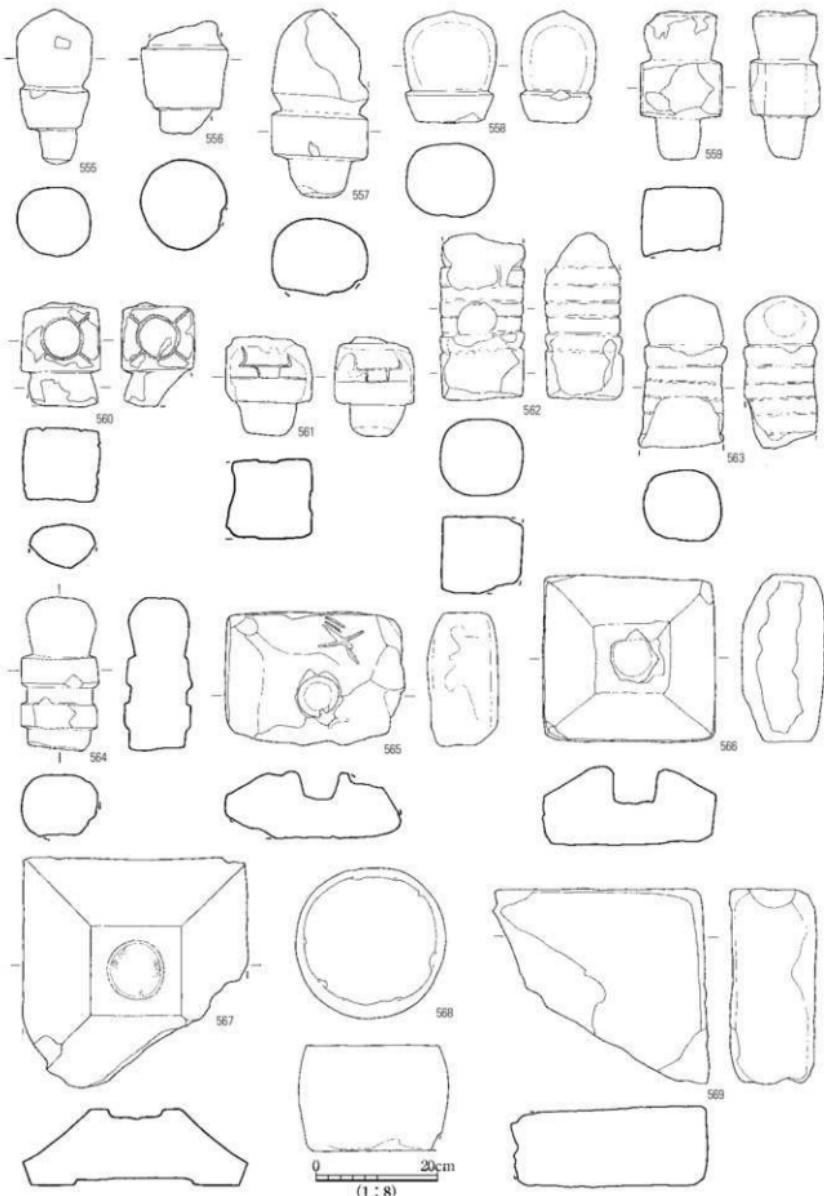


第108図 遺構出土遺物<sup>24</sup> [近世：石器・金属製品・錢貨] (S=1/1・1/2・1/5)

口部にかけて細くなる形態で、羅宇接続部から中位にかけて縱線の条線が施されている。

(5) 中世～近世の石塔片（第109図～第110図－555～574）

遺構外や後世の遺構に配されたものなどを一括して扱う。555～574は石塔片である。時期については不明であるが、一部近代に入るものも含む可能性があるものを除き、中世～近世に時期比定される。555～559は空風輪片である。555と558は宝珠部の先端がわずかに尖る。557は欠損しており不明であるが、先端はおそらく丸みを帯びたものと考えられる。560・561は九輪部をもたない相輪一部であり、露盤付近である。560は○と×の組み合わせのような文様であり、561は十字のような文様である。562～564も相輪部である。562～563は九輪部が線刻によって一つ一つの間隔が密接して表現されているが、564は一つ一つが独立するように間隔をあけて表現されている。565～567は火輪片である。565は屋根部に工具で「×」と短い2本線が刻まれている。後世につけられたものかは不明である。567はA区の石列Dの交点近くの石列Eの上部から検出された。後に記述する574と同一石塔であった可能性がある。574同様、他の凝灰岩製と異なる硬質の凝灰岩を用いる。石材の違いか、製作年代の違いか、他の石塔片に比べて風化の度合いが少なく、直線的な表現である。568は水輪片である。納骨孔はなく、径に比して高さが比較的あるタイプである。569～573は平面方形で、高さがあまりない直方体を呈する。五輪塔の地輪もしくは石



第109図 遺構外出土遺物② [中世～近世：石塔片①] (S=1/8)

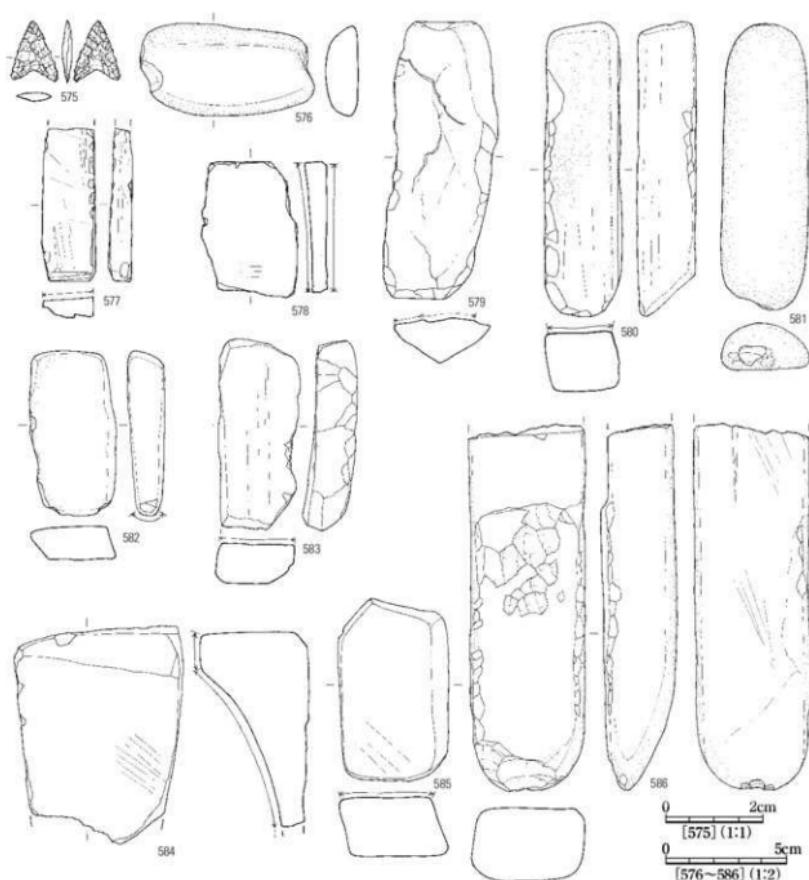


第110図 遺構外出土遺物㉖ [中世～近世：石塔片②] (S=1/8)

(6) 時期不明遺物 (第111図-575~586)

時期の特定できない遺物を一括して扱う。

575~586は石器である。575はチャート製の打製石鎌である。形態からおそらく縄文時代に属すると考えられる。縄文時代に帰属する遺物は他に無く、斜面上方からの混入品の可能性がある。576は石錘と考えられる。扁平の砂岩礫の両端を凹ませている。川近くの立地から考えて、この地での出土は違和感が無いが、他に同類品の出土がない。577~580・582~585は砥石である。580は砂岩製である。583・584は明確な線状痕をもつ。584は頁岩製で、大きな凹面を形成している。近世に属する可能性がある。581・586は砂岩製の敲石である。いずれも下端部に敲打痕が確認できる。581は下端部に丸みをもつ凸面をもつ。砥石とは異なる他の用途で形成された可能性がある。586は柱状に整形されている。



第111図 遺構外出土遺物⑦ [時期不明: 石器] (S=1/1・1/2)

### 第Ⅲ章 第二次調査の記録

#### 第1節 調査の概要

第二次調査の調査対象区域は、調査前から板碑等の石塔の存在が知られていたが、平成17年度の第一次調査時には用地が未買収であり、調査対象からはずれていた箇所である。平成18年度末に用地買収の目処が立つこともあり、平成19年4月18日付け第8001-10047号で宮崎土木事務所より調査依頼が発せられ、平成19年5月24日から発掘調査を開始した。

調査対象区域は第一次調査の南側急斜面に位置する約100m<sup>2</sup>の範囲である(第3図)。作業員の安全を期するため、まず調査箇所までの経路を確保し、その後、各石塔の基底面まで表土を掘削した結果、当初確認されていた石塔の他に、水輪の残欠(第119図-601)や板碑形の墓碑(第114図-591)などが確認できた。

その後、遺構配置図を作成し、石塔を移動した。石塔移動後に、最も東に位置する板碑の周辺から、経石の出土をみたため、その出土状況の記録を行い、調査箇所での作業を終了した。

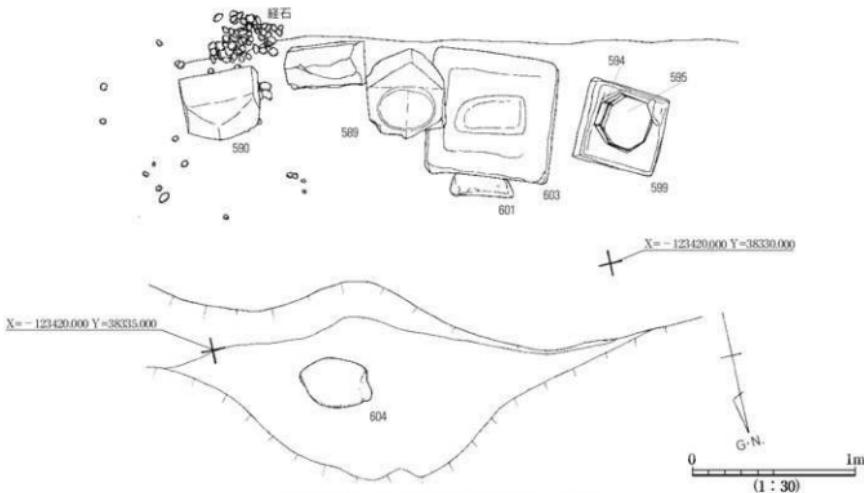
調査箇所での作業終了後、調査事務所で各石塔の精査、実測を行い、平成19年6月29日に調査を終了した。

#### 第2節 D区の調査(第112図～第124図)

第二次調査対象区となったD区では、板碑3、自然石を用いた墓碑1、無縫塔身部2、石塔竿部3、中台部2、基礎部1、相輪1などが確認された。確認された石造物の石材は、墓碑が砂岩製である以外は、全て凝灰岩である。石塔の組み合わせについては、正規の組み合わせのものではなく、調査以前に既に移動され、原位置を止めていないものと考えられる。経石に関しては、石塔類との位置関係は本来のものではないと考えられる。なお、石塔移動後、下面の精査を行ったが墓壙などの下部遺構は検出されなかった。



石塔類の検出状況

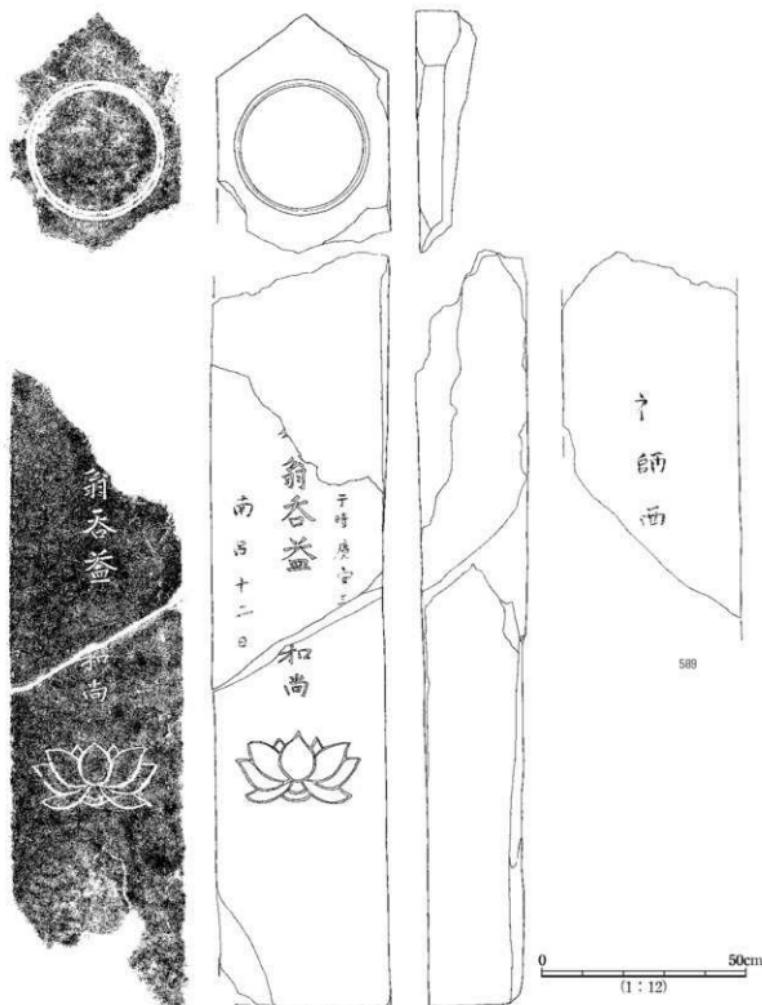


第112図 D区遺構検出状況図(S=1/30)

【①板碑類[第113図・第114図-589~591]】

板碑が3基検出された。

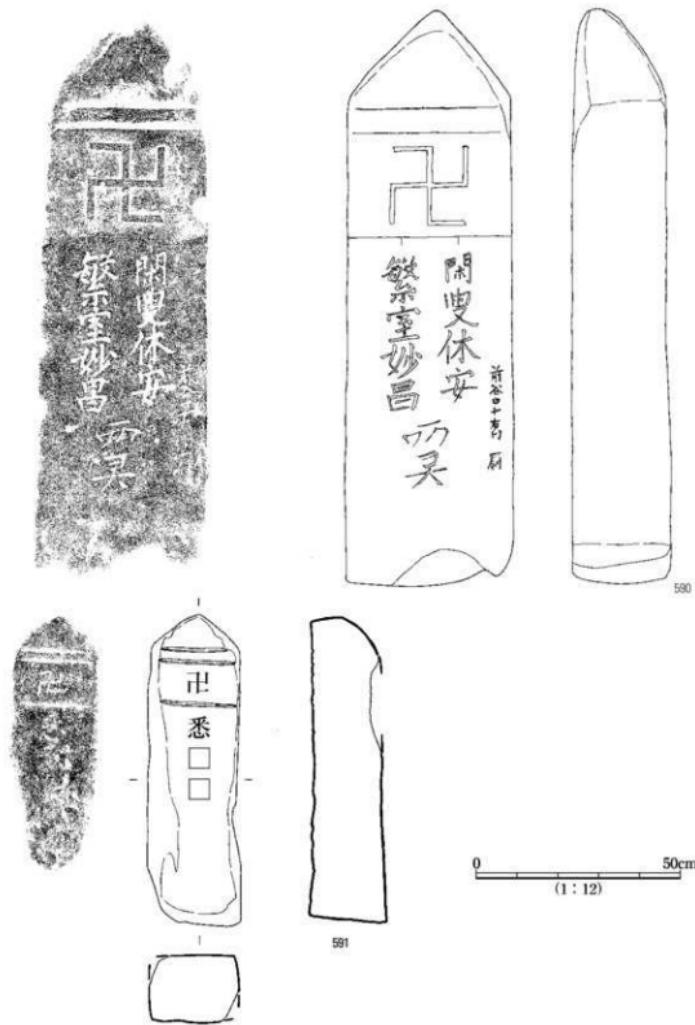
589（第113図-589）は山形部が破損し分離した板碑である。復原長は198cm以上で、幅50cm強、厚さは25cm前後である。二条線ではなく額部に月輪の区画が陽刻されている。碑身中央に「□翁春益和尚」、中央下部に蓮華座が陰刻され、右に「□時慶安三年」、左に「南呂十二日」の墨書がみえる。背面も丁寧に整形されており、「□師西」と墨書きされている。



第113図 D区出土遺物①【板碑】(S=1/12)

590(第114図)は高さ140cm、幅40cm、厚さ23cmで額部に「卍」が陽刻されている。二条線は前面のみに陰刻され、側面には巡らない。碑身部には「開叟休安」「繁室妙昌」の文字が二列に陰刻され、碑身下部中央に「両靈」とある。碑身下部右には「前谷□十右門尉」の銘が陰刻される。

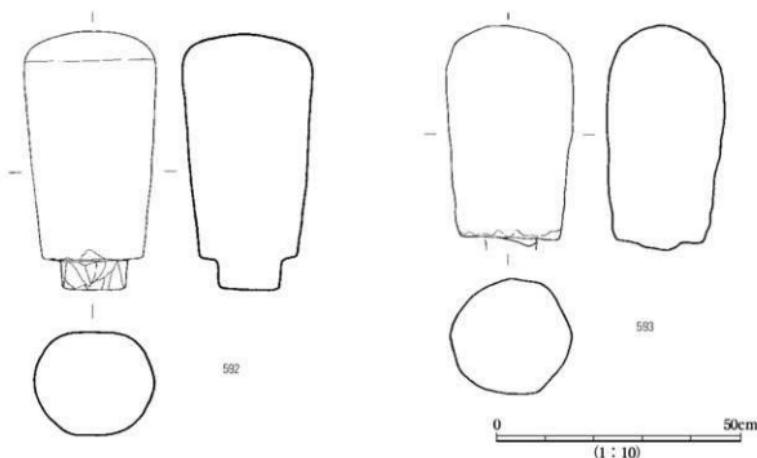
591(第114図)は、板碑型の墓碑であると考えられる。高さ約75cm、幅23cm前後、厚さ18cm前後である。前面のみに二条線が陰刻され、側面には及ばない。額部と碑身部は陰刻線により区分され、額部には「卍」が陰刻されている。碑身にも文字の陰刻が確認できるが、表面の風化が激しく判然としない。



第114図 D区出土遺物②【板碑】(S=1/12)

【② 無縫塔塔身部[第115図-592～593]】

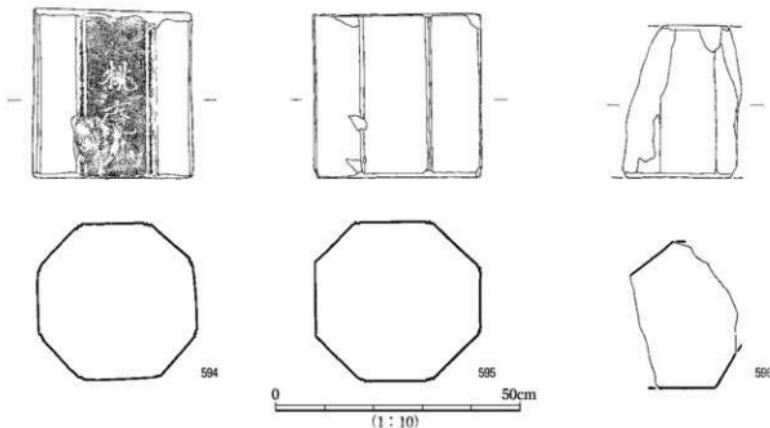
無縫塔の塔身が2個体確認された。592は塔身部の高さ47cm、脇部の長さ6cmで、593は塔身部42cm、脇部を欠損している。両個体とも銘などの線刻はなく墨書も確認できなかった。



第115図 D区出土遺物③【無縫塔】(S=1/10)

【③ 石塔竿部[第116図-594～596]】

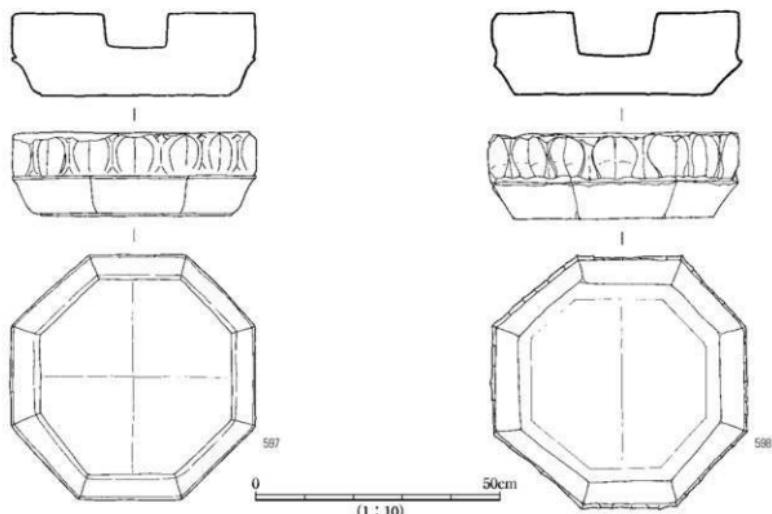
無縫塔の竿部と考えられるものが3個体検出された。3固体中2個体（第116図-594・595）の法量はほぼ同一で、高さ31～34cm、幅30～33cmで一辺12～15.5cmの8角柱に整形されている。2固体のうち1個体（第116図-594）には「桃庵」の陰刻がある。また、破損が激しく法量が明確でないもの（第116図-596）が1個体あるが、残存部から他の2個体とはほぼ同一規格に復原できる。



第116図 D区出土遺物④【石塔竿部】(S=1/10)

【④ 中台部[第117図—597~598]】

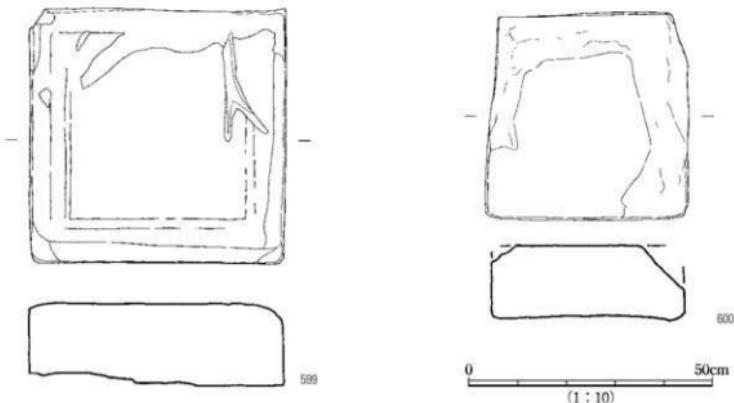
無縫塔の中台部と考えられるものが2個体（第117図597・598）出土した。両個体とも、平面形は一辺20cm程度の八角形をなし、側面上部に蓮弁が陽刻されている。上面中央には、直径約15cm前後の晴穴が穿たれている。598は下面に八角形の区画が細線で陰刻されている。



第117図 D区出土遺物⑤〔石塔中台部〕(S=1/10)

【⑤ 地輪部[第118図—599~600]】

五輪塔の地輪部と考えられる個体が2個体（第118図—599・600）出土している。599は平面形一辺約52cmの方形、厚さ12.5cmである。600は風化が激しいが、平面形一辺約42cmの方形に復原できる。厚さは約15cmである。



第118図 D区出土遺物⑥〔五輪塔片〕(S=1/10)

#### 【⑥ 水輪部[第119図-601]】

五輪塔の水輪部と考えられる個体が1個体出土した。板碑の基礎部と考えられる個体（第119図601）の下に基礎の水平を保つように据えられていた。半月状に欠損しており、径約38cmに復原できる。厚さ約8～10cmと非常に扁平である。形状から無縫塔の丸形竿であった可能性もある。

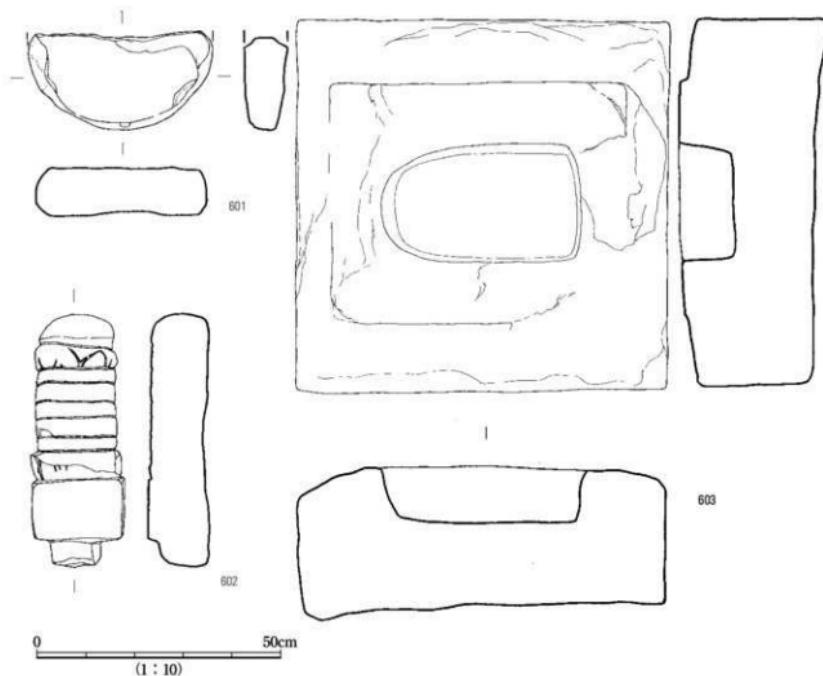
#### 【⑦ 相輪部[第119図-602]】

宝塔の相輪部と考えられる個体が1個体出土している。全長は約52cmで、約17cmの細線により五重に区画された宝輪部の上下に、蓮弁を細線で表現した詣花が配置され、その上部に宝珠、下部に露盤が表現される。露盤の下部には約6cmの勝が造られている。断面は約11cm～12cmと非常に扁平で、また、各部の造作も荒く全体に退化した印象である。

#### 【⑧ 基礎部[第119図-603]】

検出状況から板碑の基礎部と考えられる個体が1個体出土している（第119図-603）。検出時は、中台（第117図-597）が上部におかれ、その上に無縫塔の塔身（第115図-592）が立てられていた。

平面形一辺約77cmの正方形で、厚さは25cm前後である。中央に長さ約41cm、幅約14cm、深さ約11cmの隅丸長方形の勝穴が穿たれている。



第119図 D区出土遺物⑦【石塔片】(S=1/10)

### 【⑨ 墓碑[第120図-604]】

自然石を利用した墓碑が1個体検出されている。墓碑は高さ約98cm、幅約40~42cm、厚さ20~24cm、正面中央部に「鶴市丸」の文字が陰刻されており、文字の周囲は研磨され平坦な面を形成している。

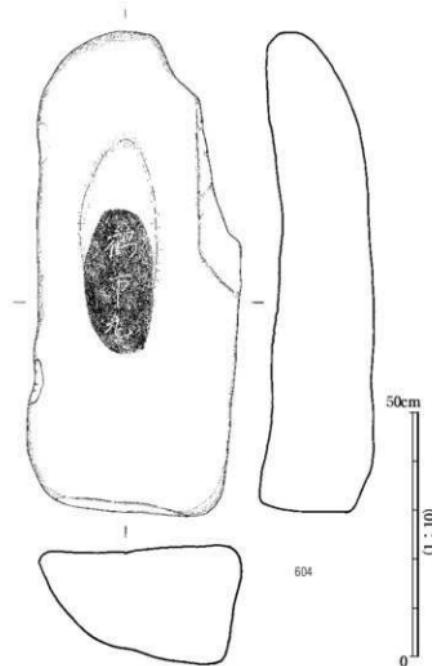
### 【⑩ 経石[第122図～第124図-605～684]】

板碑(590)の周辺に集中して円環が253個出土した。このうち、81個に墨書きが確認でき、そのうち文字が判別できたものは52個である。

環は、主に径5cm前後の砂岩で、確認できた文字は40種である。

最も多く確認できた文字は「阿」で、「帝」がこれに次ぐ(第6表)。

文字の組成や、墨書きの一つが「那多夜」と確認できる(第122図-612)ことなどから、経石に記された經典は「妙法蓮華經陀羅尼品第二十六」である可能性が高いと考えられる。出土した経石が「陀羅尼品」の一部であった場合、全文字数約1200字が書かれた環のうち4/5が失われた計算になる。



第120図 D区出土遺物⑧〔墓碑〕(S=1/10)

### 第3節 小結

『日向地誌』(平部崎南:文献①)の記載や、第一次調査で地蔵後背部に「瑞雲」の銘があったことなどから、曾井第2遺跡が瑞雲寺跡であることはほぼ間違いない。地元住民によると、D区周辺にはかつて多数の石塔が存在し、ミカン畑や住宅地の造成時にその多くが失われたようである。今回の調査範囲については、寺院の後背斜面に建てられた供養塔が、ミカン畑開墾時に移動されたものと考えられる。

石塔群形成の時期であるが、D区に限っていえば、板碑の1つ(589)に慶安3(1650)年の銘があること、他の板碑(590)も他地域の形態と比較すると17世紀代に比定できる(原田昭一:文献②)こと、環石經が盛行する時期が江戸時代である(坂詰秀一編:文献③)ことなどを含めると、17世紀中葉前後と考えられる。

また、確認された環石經に記された經典が「妙法蓮華經陀羅尼品第二十六」だとすれば、近世初期には「瑞雲寺」が法華宗系の寺院に変容していた可能性も考えられる。

### 参考文献

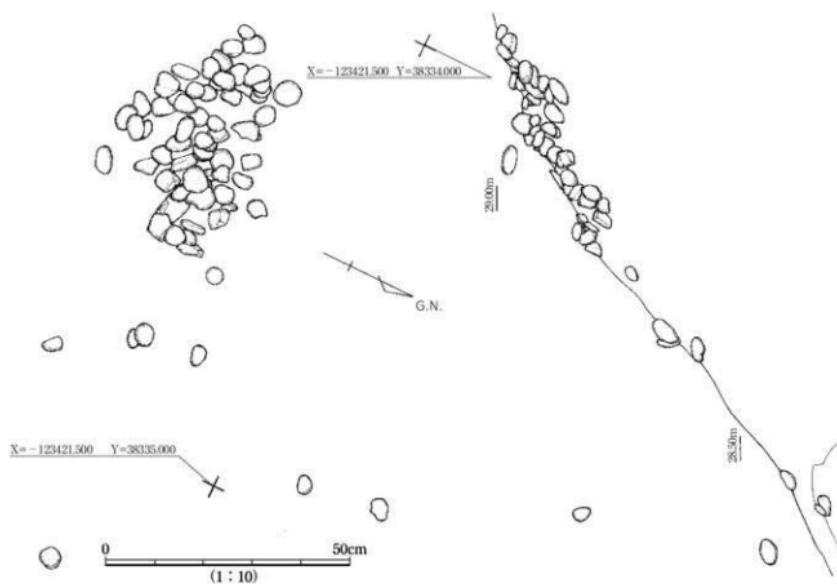
文献①: 平部崎南1884『日向地誌』(1976『日向地誌(復刻版)』青潮社)

『日向地誌』は、平部佈南により明治17(1884)年に記されたものを、1976年に青潮社が復刻したものである。

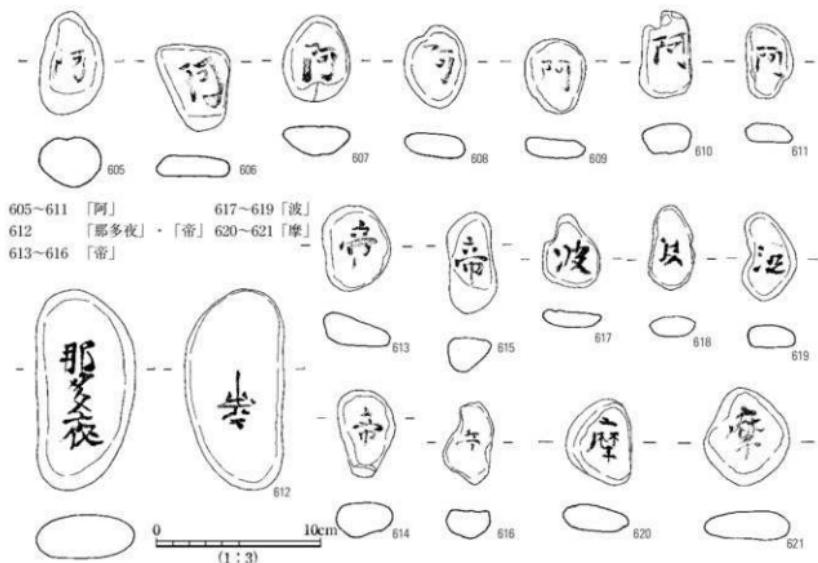
文献②: 原田昭一2004『板碑変遷史-農前・農後における紀年銘板碑を通して-』『古文化談叢』第51集

文献③: 坂詰秀一編2003『仏教考古学事典』

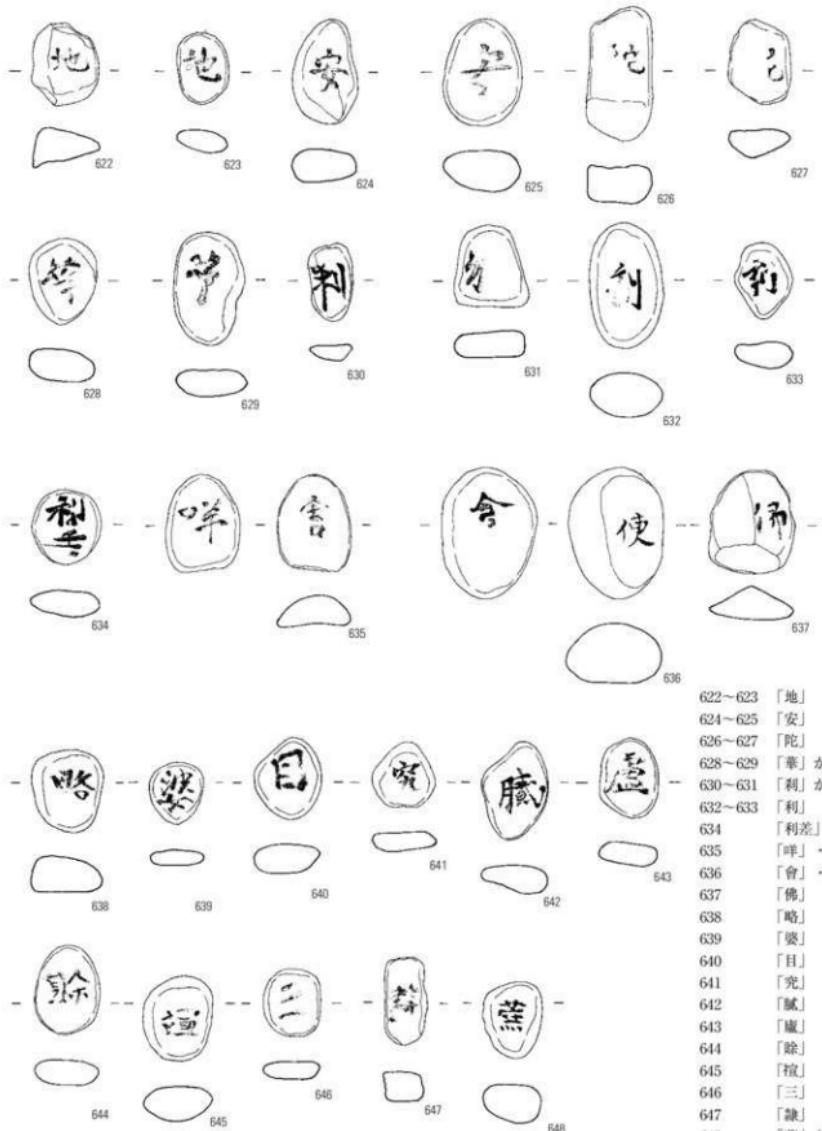
文献④: 佐藤進・濱口富士雄編2006『全訳 洪武海』第二版



第121図 経石出土状況実測図(S=1/10)

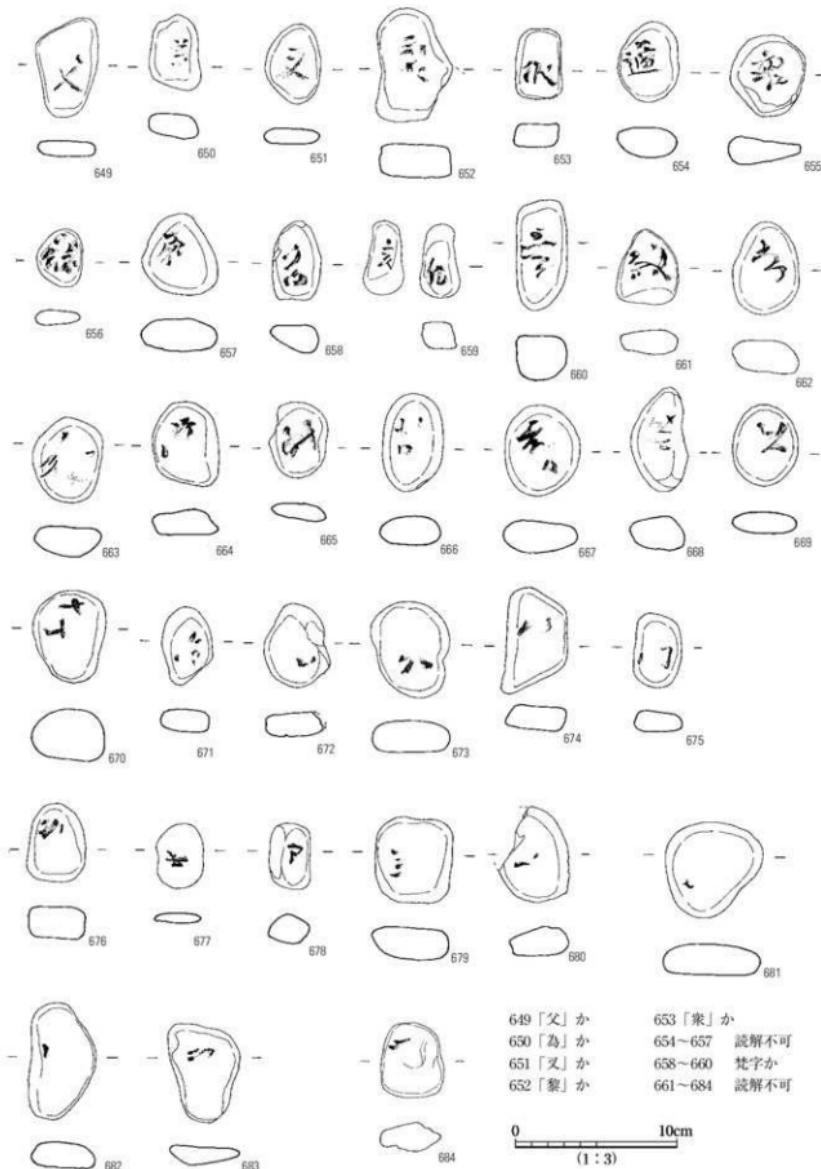


第122図 D区出土遺物9【経石】(S=1/3)



0  
10cm  
(1:3)

第123図 D区出土遺物⑩ [経石] (S=1/3)



第124図 D区出土遺物①【経石】(S=1/3)

文字	図番号	数量	石材	出土数に占める割合(%)	墨書確認数に占める割合(%)	「陀羅尼品」における文字数
阿	605～611	7	砂岩	2.77%	8.33%	18
帝	612～616	5	砂岩	1.98%	5.95%	5
那多夜	612	1	砂岩	0.40%	1.19%	1
波	617～619	3	砂岩	1.19%	3.57%	3
摩	620～621	2	砂岩	0.79%	2.38%	9
地	622～623	2	砂岩	0.79%	2.38%	2
安	624～625	2	砂岩	0.79%	2.38%	2
陀	626～627	2	砂岩	0.79%	2.38%	16
華?	628～629	2	砂岩	0.79%	2.38%	12
刹?	630～631	2	砂岩	0.79%	2.38%	6
利	632～633	2	砂岩	0.79%	2.38%	7
利差?	634	1	砂岩	0.40%	1.19%	1
畔	635	1	砂岩	0.40%	1.19%	1
舍	635	1	砂岩	0.40%	1.19%	3
會	636	1	砂岩	0.40%	1.19%	1
便	636	1	砂岩	0.40%	1.19%	3
佛	637	1	砂岩	0.40%	1.19%	25
略	638	1	砂岩	0.40%	1.19%	1
婆	639	1	砂岩	0.40%	1.19%	11
目	640	1	砂岩	0.40%	1.19%	3
究	641	1	砂岩	0.40%	1.19%	2
膩	642	1	砂岩	0.40%	1.19%	2
盧	643	1	砂岩	0.40%	1.19%	3
賛	644	1	砂岩	0.40%	1.19%	3
擅(惣)	645	1	砂岩	0.40%	1.19%	7
三	646	1	砂岩	0.40%	1.19%	4
隸	647	1	砂岩	0.40%	1.19%	12
鹿?	648	1	砂岩	0.40%	1.19%	5
父?	649	1	砂岩	0.40%	1.19%	1
為(爲)?	650	1	砂岩	0.40%	1.19%	6
叉?	651	1	砂岩	0.40%	1.19%	9
黎?	652	1	砂岩	0.40%	1.19%	2
衆?	653	1	砂岩	0.40%	1.19%	5
梵字?	658～660	4	砂岩	1.58%	4.76%	—
讀解不可	654～657	4	砂岩	1.58%	4.76%	—
讀解不能	661～684	24	砂岩	9.49%	28.57%	—

第6表 D区出土経石一覧表

番号	出土場所	記注	測量番号	種類	器種	部位	文様・調整の特徴	色調		胎土の特徴	積存量	法量
								外面	内面			
32	SF3	SF5-1	3	土器部	高台付	底部	内外面風化しがいが回転ナデ	褐(GYR7-8)	褐(SYR7-8)	1mm以下の褐色石粒を含む	1/6	
33	SF5	SF5	88	磁器	青磁	瓶	口縁部- 内外面施釉。内面に2~4条の横線花弁文。	褐調(オーラー ブ/010Y6-2)	土:灰白 (GYR7-1)	粗良	3/4	推定口径18.2cm・底径9.2cm・高さ2.7cm
34	SE3	SE3-3+ SE3-8+ SE3-9+ SE3-12+ SE3-14	70	磁器	青磁	瓶	口縁部- 底部 内外面施釉。底部は全面施釉後、輪状に接着取っている。	褐調(オーラー ブ/010Y6-2)	土:灰白 (GYR7-1)	粗良	1/3	推定口径15.2cm・底径8.6cm・高さ6.6cm
35	SE3	SE3-1+ SE3-11+ SE3-12+ SE3-14	91	磁器	青磁	环	口縁部- 底部 内外面施釉。高台内部と内面見込み部は無釉。内面見込みに草本文の印跡あり。	褐調(オーラー ブ/010Y6-2)	土:灰白 (GYR7-1)	粗良	2/5	推定口径12.5cm・底径6.8cm・高さ3.2cm
36	SE3	SE3-1	98	磁器	青磁	环	口縁部- 体部 内外面施釉	褐調(鉛灰 G5V6-2)	土:灰白 (GYR7-1)	粗良	1/20	推定口径11.8cm
37	SE3	SE3-16	99	磁器	青磁	环	口縁部- 体部 内外面施釉	褐調(オーラー ブ/010Y6-2)	土:灰白 (GYR7-1)	粗良	1/20	推定口径11.8cm
38	SE1	SE1	78	磁器	青磁	环	口縁部- 内外面施釉。外面上に開窓の無い施縫文あり。	褐調(オーラー ブ/010Y6-2)	土:灰白 (GYR7-1)	粗良	1/20	
39	SE1	SE1-2	59	須恵器	环	蓋部	内面ともに回転ナデ	褐(N5)	褐(N5)	1mm程の灰白色土粒を含む	1/10	
40	SE8	SE8-1	89	磁器	青磁	瓶	口縁部- 内外面施釉。内面に2条の横線花弁文。内面見込み部に草本文らしき文様あり。	褐調(リーフ G5V6-2)	土:灰白 (GYR7-1)	粗良	9/10	推定口径16.0cm・底径5.0cm・高さ3.1cm
41	SE9	SE9	399	丸賀陶器		不明	内面は回転ナデ	褐(N5)	褐(N5)	1mm以下の光沢點と黒褐色土粒を多く含む。	1/6	推定口径17.0cm・底径12.0cm・高さ3.7cm
42	SE9	SE9	309	磁器	肥前系 染付	小杯	口縁部- 内外面施釉。外面上に松本の文様。内面側面に四方文。	褐調(明青 G10BG7-1)	土:灰白 (N8)	粗良	1/10	-
43	石河 A区	石レフ A西	132	磁器	青磁 染付	瓶	外側腹部に草本文。高台外側に2本線。内面見込み部に草本文と花文。高台付合部では瓶は傾かっていない。	褐調(明青 G5G7-1)	土:灰白 (N8)	粗良	1/8	推定口径6.8cm
44	石河 A区	石レフ A西	171	陶器	織江 美濃系	耳皿系碗	口縁部- 体部 内外面施釉 (乳鉢)。	褐(G5V 4-3)	土:灰黄 (2.5YR 4-3)	1mm程の暗褐色石粒をわずかに含む	1/10	推定口径12.4cm
45	石河 A区	石レフ A西	177	磁器	肥前系 染付	碗	内外面施釉。内面見込み部に波のような文様が確認できるが、細網のため不明。高台付合部では斜付着している。	褐調(明青 G5G7-1)	土:灰白 (N8)	粗良	1/8	推定口径6.6cm
46	石河 A区	石レフ A西	345	磁器	肥前系 染付	不明	体部 内外面施釉。外面上に奇の文字。	褐調(明青 G5G7-1)	土:灰白 (2.5YR 3-1)	粗良	1/8	-
53	SF1	SF1	396	磁器	青磁 不規	碗	体部- 成形部 内外面施釉 (貰入)。無文。体部下半から乳突状に吹き付着。	褐土:灰白 (5Y7-2)	土:灰白 (5Y7-2)	1mm程の暗褐色石粒を含む	1/6	推定口径5.6cm
54	SF1	SF1	283	磁器	肥前系 染付	碗(付合碗)	内外面施釉。外面上おぞらく藤の草花文。内面見込み部に吹き付着。	褐調(明青 G5G7-1)	土:灰白 (5Y7-2)	粗良	2/3	推定口径5.4cm
55	SF1	SF1	307	磁器	肥前系 染付	碗(付合碗)	口縁部- 内外面施釉。外面上に波の跡がある。	褐調(明青 G5G7-1)	土:灰白 (5Y7-2)	粗良	4/5	口径15.7cm・底径7.4cm・器高3.5cm
56	SF1	SF1	338	磁器	肥前系 染付	盖付杯	底部付合部は無釉。外面上は文様があるが確認不能。	褐調(明青 G5G7-1)	土:灰白 (N8)	粗良	1/8	推定口径7.4cm
57	SF1	SF1	274	磁器	肥前系 染付	碗(角舟)	口縁部付合部の8字脚。内外面施釉。外面上は草本文。内面見込み部に乳突状に吹き付着。	褐土:明青 (5Y7-2)	土:灰白 (N8)	粗良	2/5	推定口径11.5cm・底径9.5cm・器高4.5cm
58	SF1	SF1	328	磁器	肥前系 染付	小杯	口縁部- 内外面施釉。口縁部に紅口。外面上無文。内面見込み部に吹き付着。	褐調(明青 G5G7-1)	土:灰白 (10Y8-1)	粗良	1/2	推定口径5.7cm・底径4.5cm・器高3.8cm
59	SF1	SF1	38	土器部	円盤形製品	一	底部を強化したものと考えられる。内面に掌印。表裏面には焼成のためのツル足としている。	土色	褐(G5 G7R8-1)	-	1/10	肩幅2.3cm・底径4.2cm・厚さ0.5cm
60	SF1	SF1	379	陶器	安地 灰陶	口縁部- 成形部付合部は無釉。底部に耳状耳。内面は吹き付着。	褐調(明青 G5G7-1)	土:灰白 (5Y8-2)	含有物はほとんど無	9/10	口径9.0cm・底径5.9cm・器高4.5cm	
61	SF1	SF1	394	磁器	肥前系 染付	瓶(他利)	口縁部- 外壁は鋸歯状。内壁は滑らかで厚めである。内面は吹き付着。	褐調(明青 G5G7-1)	土:灰白 (N8)	粗良	1/1	口径9.6cm・底径8.7cm・器高3.5cm
64	SF3'	SF3'+SF4	259	磁器	肥前系 染付	瓶(大形瓶)	口縁部- 内外面施釉。外面上は折衷式と口縁部に開窓。内面は口縁部に開窓。	褐調(明青 G5G7-1)	土:灰白 (N8)	粗良	1/6	推定口径22.4cm
66	SF4	SF4	129	陶器	備前系 葉	口縁部- 内外面に回転ナデ。内面脇部付合部は近方削り。内面のナデ。	褐土:灰 (2.5YR 4-2)	内面:灰 (10Y8-11)	10mm程の灰白色を少量、3mm以下の中透明光沢石粒を含む	-	推定口径38.8cm	
67	SF4+	SF4# 笠置系	207	陶器	吉兆系	大型	口縁部- 内外面に施釉。白化加工の刷毛目がわざわざある。	褐調(明青 G5G7-1)	土:灰白 (N8)	粗良	1/8	推定口径51.4cm
68	SF4	SF4#	208	磁器	肥前系 染付	碗(花瓶)	口縁部- 内外面に施釉。内面に柔軟文。紀ノ日貝形高台。	褐調(明青 G5G7-1)	土:灰白 (2.5YR 3-1)	粗良	1/8	推定口径44.7cm・底径39cm・器高44.2cm
69	SF4+	SF4# 笠置系	184	磁器	青磁	体部	内面に施釉。口縁部内面には桔子文。見込み部は水立し草本文。	外面:オーラー ブ/10Y7-5	内面:緑 GYG5-6	きのこやかで含有物はほとんど無い。	1/6	
70	SF4	SF4#	361	陶器	奈良系 不規	碗	体部- 成形部 内外面施釉(貰入)-無文。脇部付合部。	褐調(浅黄 GY5-7)	土:灰白 (2.5Y7-1)	きのこやかで含有物はほとんど無い。	2/3	推定口径38.8cm
71	SF4	SF4#	363	陶器	奈良系 不規	碗	体部- 成形部 白土刷毛目盛り。	褐調(浅黄 GY5-7)	土:灰白 (10Y7-2)	きのこやかで含有物はほとんど無い。	1/6	推定口径4.5cm
72	SF4+	SF4# 笠置系	279	磁器	肥前系 染付	瓶(付合付)	蓋部 内面は草花文。外側はくび付舟形。内面は口縁部に付合。	褐調(明青 G10BG7-1)	土:灰白 (2.5Y7-1)	粗良	1/4	推定口径8.6cm
76	SZ1	SZ1	267	磁器	肥前系 染付	瓶(小丸瓶)	口縁部- 内外面に施釉。外面上は圓窓文。内面は口縁部と付合部に開窓。見込み部に記号。	褐調(明青 G5G7-1)	土:灰白 (N8)	粗良	1/1	口径10.2cm・底径9.9cm・器高4.5cm
77	SZ1	SZ1	241	磁器	肥前系 染付	瓶	口縁部- 内外面に施釉。口縁部内面には桔子文。見込み部は水立し草本文。	褐調(白 GY8-2)	土:灰白 (10Y7-1)	粗良	2/5	推定口径8.6cm・底径3.8cm・器高4.5cm
78	SZ1	SZ1	240	磁器	肥前系 染付	碗	口縁部- 内外面施釉。内面は口縁部と付合部に開窓。内面は口縁部と付合部に開窓。	褐調(白 GY8-2)	土:灰白 (N8)	粗良	5/6	推定口径10.8cm・底径4.0cm・器高6.0cm
79	SZ1	SZ1	229	磁器	肥前系 染付	碗	口縁部- 内外面に施釉。外面上は文様があるが、内面不規(山文の可能性)。内面は無。	褐調(白 GY8-2)	土:灰白 (10Y7-1)	粗良	1/10	推定口径10.0cm・底径9.0cm
80	SZ1	SZ1	257	磁器	肥前系 染付	碗(原形 瓶)	口縁部- 内外面に施釉。外面上は文様があるが、内面不規(山文の可能性)。内面は無。	褐調(白 GY8-2)	土:灰白 (10Y7-1)	粗良	1/8	推定口径11.8cm・底径9.6cm・器高7.0cm

第7表 出土遺物観察表①

番号	出土場所	注記	実測器番号	種類	器種	部位	文様・調整の特徴	色調		胎土の特徴	積存量	法量
								外側	内面			
81 SZ1 SZ1 236 磁器 肥前系 豆付	碗	口縁部~底部	内外面施釉。全面に草花文。内面は口縁部に青花文。見込み部に縦状の擦り書き模様。	輪調(9:白)(7.5YR7/1)	胎土:灰白(7.5YR8/1)	精良	1/2	测定口径12.5cm、底径5.0cm、器高5.0cm				
82 SZ1+ SF1+ D付近付	レフB-D	225 磁器 肥前系 豆付	碗	口縁部付近~底部	内外面施釉。外面には草花文。骨部には無地で柿垂着。見込み部に松の目調子模様。	輪調(明黄)(7.5YV7/1)	胎土:灰白(N8/1)	精良	2/5	测定底径4.1cm		
83 SZ1 SZ1 243 磁器 肥前系 豆付	碗	口縁部~底部	内外面施釉。口縁部は格子目(幾何学)文。骨部には白地に黒葉文。	輪調(16:白)(10Y8/1)	胎土:灰白(N7/1)	精良	1/10	测定口径7.8cm				
84 SZ1 SZ1 261 磁器 肥前系 豆付	碗(小丸碗)	口縁部~底部	内外面施釉。内面に宝文(巻物の変形)文。口縁部に丁口紅。	輪調(16:白)(7.5YV8/1)	胎土:灰白(N8/1)	精良	9/10	口径8.3cm、底径2.85cm、器高3.9cm				
85 SZ1 + SF1 SF1 272 磁器 肥前系 豆付	碗(小丸碗)	口縁部~底部	内外面施釉。内面には宝文(巻物の変形)文。口縁部に丁口紅。	輪調(16:白)(7.5YV8/1)	胎土:灰白(N8/1)	精良	1/1	口径8.3cm、底径3.4cm、器高4.4cm				
86 SZ1 SZ1 249 磁器 肥前系 豆付	碗(東横)	口縁部~底部	内外面施釉。底部には半磨花唐草文と團扇文。	輪調(16:白)(7.5YV8/1)	胎土:灰白(N8/1)	精良	1/16	测定口径6.8cm				
87 SZ1 SZ1 357 陶器 席地不明	碗	底部	内外面施釉。底部には「貢人多し」。無文。休部下半から底部にかけて無釉。	輪調(灰青)(7.5YV6/2)	胎土:灰白(7.5Y7/1)	2/3	口径8.5cm、底径3.2cm、器高4.5cm					
88 SZ1 SZ1 358 陶器 席地不明	碗	底部	内外面施釉。休部下半から底部にかけて無釉。外面上に鉛文。	輪調(19:白)(7.5V7/1)	胎土:灰白(N8/1)	2/3	口径10.05cm、底径3.8cm、器高5.5cm					
89 SZ1+ SZ1+DII 221 磁器 肥前系 豆付	碗	口縁部~底部	内外面施釉。休部には「貢人多し」。骨部には無釉。見込み部には自らの目詠書き。	輪調(16:白)(7.5V7/1)	胎土:灰白(N8/1)	精良	4/5	测定口径11.9cm、底径5.0cm、器高5.0cm				
90 SZ1+ 盆置上 371 陶器 高朝朝信窯 濃化瓶(小碗)	碗	口縁部~底部	内外面に墨調の墨瓶。高台には無釉。壁厚が2mm程度。	輪調(明黄)(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/1)	精良	4/5	口径8.0cm、底径3.5cm、器高4.15cm				
91 SZ1 SZ1 352 陶器 唐津系 瓢	瓶	休部~底部	内外面施釉。底部には「貢人多し」。無文。休部下半から底部にかけて無釉。胎土積み重ね。	輪調(灰青)(7.5Y7/2)	胎土:灰白(7.5Y7/1)	2/2	口径6.5cm、底径3.2cm、器高4.5cm					
92 SZ1 SZ1 252 磁器 肥前系 豆付	碗	休部~底部	休部に内面青磁釉。内面には見込み部に團扇文と五瓣花。	輪調(明黄)(10GV7/1)	胎土:灰白(N8/1)	精良	1/10	不明				
93 SZ1 SZ1 250 磁器 肥前系 豆付	碗(東横)	休部~底部	休部には破損があり墨調の墨瓶。内面には底部に团扇文。	輪調(16:白)(7.5YV8/1)	胎土:灰白(N8/1)	精良	1/4	底径5.4cm				
94 SZ1 SZ1 281 磁器 肥前系 豆付(蓋付)	蓋	休部~底部	内外面施釉。底部には草花文(おうらく紅葉文)。骨部には本色。	輪調(16:白)(7.5BG7/1)	胎土:灰白(7.5V8/1)	精良	3/4	つまみ付7.0cm、口縁部68.7cm、底径45.5cm				
95 SZ1 SZ1 297 磁器 肥前系 豆付	底部付造	底部	底部には破損があり墨調の墨瓶。内面には草花文(おうらく紅葉文)。骨部には本色。	輪調(明黄)(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/1)	精良	1/5	测定底径8.8cm				
96 SZ1 SZ1 296 磁器 肥前系 豆付	底部付造	底部付造	底部には墨瓶。内面には草花文(おうらく紅葉文)。骨部には本色。	輪調(明黄)(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/1)	精良	1/5	测定底径9.0cm				
97 SZ1 SZ1 293 磁器 肥前系 豆付(輪花瓶)	瓶	口縁部~底部	内外面施釉。口縁部には「口」。外面は無文。内面には草文と輪花文。	輪調(16:白)(5GV8/1)	胎土:灰白(5YV8/1)	精良	9/10	口径10.2cm、底径6.0cm、器高2.25cm				
98 SZ1 SZ1 292 磁器 肥前系 豆付(輪花瓶)	瓶	口縁部~底部	内外面施釉。口縁部には「口」。外面は無文。内面には草花風景图。	輪調(16:白)(5YV8/1)	胎土:灰白(5YV8/1)	精良	4/5	测定口径10.1cm、底径5.0cm、器高2.15cm				
99 SZ1 SZ1 291 磁器 肥前系 豆付(輪花瓶)	瓶	口縁部~底部	内外面施釉。口縁部には「口」。外面は無文。内面には山水風景图。	輪調(明黄)(7.5YV8/1)	胎土:灰白(7.5YV8/1)	精良	9/10	口径10.5cm、底径5.25cm、器高2.15cm				
100 SZ1 SZ1 290 磁器 肥前系 豆付(輪花瓶)	瓶	口縁部~底部	内外面施釉。口縁部には「口」。外面は無文。内面には草花風景图。	輪調(明黄)(7.5YV8/1)	胎土:灰白(7.5YV8/1)	精良	1/2	测定口径13.5cm、底径6.5cm、器高2.15cm				
101 SZ1 SZ1+SZ3 -2 299 磁器 肥前系 豆付(輪花瓶)	瓶	口縁部~底部	内外面施釉。口縁部には「口」。内面には山水風景图。	輪調(明黄)(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/1)	精良	9/10	口径14.0cm、底径5.5cm、器高4.45cm				
102 SZ1 SZ1 306 磁器 肥前系 豆付(輪花瓶)	瓶	口縁部~底部	内外面施釉。底部には四彫高台。内面見込み部に足は足のマダラ根跡模様。	輪調(16:白)(7.5YV7/1)	胎土:灰黄(2.5V7/2)	精良	1/1	口径13.35cm、底径7.4cm、器高5.6cm				
103 SZ1 SZ1 294 磁器 肥前系 豆付(輪花瓶)	瓶	口縁部~底部	内外面施釉。外壁は唐草文。内面は全周、蛇口四彫高台。	輪調(16:白)(10Y8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	4/5	口径12.7cm、底径2.7cm、器高3.05cm				
104 SZ1 SZ1 367 陶器 席地不明	小瓶	口縁部~底部	内外面に青磁色施釉。見込みに3小字の船形豆付と茎葉文と花文などの印刷模様。	輪調(明黄)(2.5Y7/1)	胎土:灰白(2.5Y8/1)	2/2	口径3.0cm、底径2.0cm、器高2.0cm					
105 SZ1 SZ1 368 磁器 席地不明	小瓶	口縁部~底部	内外面に青磁色施釉。見込みに3小字の船形豆付と茎葉文、舟形の波高窓。	輪調(明黄)(2.5Y7/1)	胎土:灰白(2.5Y8/1)	精良	1/3	测定口径7.0cm、底径4.5cm、器高1.7cm				
106 SZ1 SZ1 372 陶器 席地不明	小瓶(湯呑み合付)	口縁部~底部	内外面に青磁色施釉。底部には無釉。内面には青磁色の土研(土研)と水波模様。瓶全体が無釉である。	輪調(明黄)(2.5Y7/1)	胎土:灰白(2.5Y8/1)	精良	2/3	口径11.5cm、底径5.5cm、器高3.5cm				
107 SZ1 SZ1 316 磁器 肥前系 豆付(湯呑み合付)	瓶	口縁部~底部	内外面に青磁色施釉。外壁は模様の唐草文と墨書き文。内面には無文。	輪調(16:白)(5YV8/1)	胎土:灰白(5YV8/1)	精良	9/10	测定口径6.3cm、底径4.0cm、器高4.0cm				
108 SZ1 SZ1 318 磁器 肥前系 小瓶(湯呑み合付)	瓶	口縁部~底部	内外面施釉。外壁は灰引銀文。内面には無文。	輪調(明黄)(10BG7/1)	胎土:灰白(10BG7/1)	精良	1/2	测定口径6.0cm、底径4.5cm、器高4.5cm				
109 SZ1 SZ1 322 磁器 肥前系 豆付	盖	口縁部~底部	内外面施釉。外壁は荷物と千鶴らしき風景文。内面には無文。	輪調(16:白)(2.5GV8/1)	胎土:灰白(2.5GV8/1)	精良	1/2	测定口径6.1cm、底径4.5cm、器高4.75cm				
110 SZ1 SZ1 324 磁器 肥前系 豆付	小杯	口縁部~底部	内外面施釉。外壁は青文。内面には無文。	輪調(16:白)(10Y8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	2/5	测定口径6.8cm、底径4.8cm、器高3.95cm				
111 SZ1 SZ1 278 磁器 肥前系 豆付(蓋付)	蓋	口縁部~底部	内外面施釉。外壁は草花文。内面には無文。	輪調(明黄)(5BG7/1)	胎土:灰白(5YV8/1)	精良	1/10	测定口径9.4cm				
112 SZ1 SZ1 373 陶器 席地不明	鉢	口縁部~底部	内外面に青磁色施釉。口縁部には4足の底付。外壁には白色化粧と其瓶の草花文。一部剥落の裏付に青花文と花文がある。	輪調(16:白)(7.5YB6/2)	胎土:灰白(10Y7/2)	2/2	-	-				
113 SZ1 SZ1 311 磁器 肥前系 豆付(粗)	小瓶(粗)	口縁部~底部	内外面施釉。外壁は粗版の型押し。	輪調(16:白)(2.5GV8/1)	胎土:灰白(2.5YV8/1)	精良	1/2	测定口径6.2cm、底径4.2cm、器高19.0cm				
114 SZ1 SZ1 331 磁器 肥前系 伝瓶	小瓶(粗)	口縁部~底部	内外面施釉。脚部が一部無釉。瓶底には4足の底付。	輪調(16:白)(2.5GV8/1)	胎土:灰白(2.5YV8/1)	精良	1/2	底径3.5cm				
115 SZ1 SZ1 395 陶器 厚摩系 伝瓶	小瓶(粗)	口縁部~底部	内外面施釉。外壁には4足の底付。内面には白色化粧と其瓶の草花文。	輪調(16:白)(7.5YV2/1)	胎土:灰白(7.5YV2/1)	含有物は殆どなし。	9/10	底径5.5cm				
116 SZ1 SZ1 335 磁器 肥前系 豆付(施利)	碗	口縁部~底部	内外面施釉。外壁には4足の底付。内面には黑色化粧。底部には黒色変色。底部に移付者。336と同一個体。	輪調(16:白)(2.5GV7/1)	胎土:灰白(2.5GV7/1)	精良	1/4	底径7.6cm				
117 SZ1 SZ1 400 陶器 席地不明	人形	頭部	外顎ナデ	浅青瓷	胎土:灰白(10YR8/3)	1mm以下の褐色土粒を多く含む	-	-				

第8表 出土遺物観察表②

番号	出土場所	注記	測量番号	種類		器種	部位	文様・調整の特徴		色調	胎土の特徴	積存量	法量
				外	内			外	内				
118	SZ1	SZ1	375	陶器	床面不 明	火入	体部—底 部	内面は無釉。外表面は籠でなじむ化粧土に上 げられ、前面には状の入りがあり、底部に 脚部3小頭。底部に脚部より墨は不平面 〔二重〕と判定できる。	輪調:黒 (10Y2/1) 粒上:灰白 (10YR8-1)	1mm以下の乳白色 土粒を多く含む	2/5	推定径深10.7cm	
119	SZ1	SZ1	388	陶器	麻布系	土瓶	体部	内外面施釉。口部部あり。外面の腹部か ら頸部上半にかけて複数の沈文。389 と同一個体とする。	輪調:白 (5Y7-2) 粒上:灰 (7.5YR3-2)	1mm以下の乳白色 土粒を多く含む	1/8		
120	SZ1	SZ1	390	陶器	麻布系	土瓶	体部	内外面施釉。口部部あり。外面の腹部付 近に10条以上の沈文。	輪調:白 (5Y7-2) 粒上:灰 (7.5YR3-2)	1mm以下の灰白色 土粒を多く含む	1/8		
121	SZ1	SZ1	387	陶器	麻布系	土瓶	蓋部	外表面無釉。外表面回転ナデ。 蓋部に捺印あり。	輪調:灰 (7.5YR3-2)	1~2mm程度の黑色 土粒を多く含む	1/3	推定基盤6.6cm	
122	SZ1	SZ1	389	陶器	麻布系	土瓶	体部	内外面施釉。外表面の腹部から頸部上半に かけて複数の沈文。388 と同一個体。	輪調:白 (5Y7-2) 粒上:灰 (7.5YR3-2)	1mm以下の乳白色 土粒を多く含む	1/5	推定口径9.3cm	
123	SZ1	SZ1	152	陶器	罐詰	底部	内面は外に回転ナデによる凹溝。内面 には7条以上の單位とする横筋が段状に 施されている。	内面:赤 (10R5-3) 外面:赤褐色 (10R5-3)	2mm以下の灰白色 土粒を多く含む	8/8	推定径深13.3cm		
124	SZ1+ 混合層 Ⅱ	SZ1+D9 Ⅲ	158	陶器	罐詰	底部	内外面は外に回転ナデによる凹溝。内面 には9条を单位とする放射状の横筋。 底部は工具によらずナデなしの直線。	内面:灰 (5Y5-2) 外面:灰 (5Y5-2) 粒上:灰 (4R 4-4)	3mm以下の乳白色 土粒を含む	推定径深17.1cm			
125	SZ1	SZ1	391	陶器	麻布系	土瓶	底部	内面施釉。外表面は無釉。回転ナデの痕 跡が残り、死殻。	輪調:白 (5Y7-2) 粒上:灰 (7.5YR3-2)	1mm以下の灰白色。从 来色。黑色土粒を 多く含む	1/6	推定径深6.65cm	
126	SZ1+ S25+ 混合層 Ⅲ	144	陶器	陶唐 アジア 底	四耳甕	腹部—胴部	腹部付近は灰、頭部には1~3条の凹 溝。全面に輪が付いている。内面は 頭部に捺印が施されている。	頭部:灰 (10YR3-2) 腹部:灰 (5Y7-2)	1~3mm以下の灰色。 0.5mm以下の黑色 土粒を含む	-			
127	SZ1	SZ1	402	瓦質陶 器	砵	胴部—底 部	内面は回転ナデ。外表面リキキによる文様。 頭部中央部に脚部による無字をもつ。 401と同一個体。	内面:灰 (5Y6-2)	1mm程度の灰褐色土 粒を多く含む	1/4	底径12.2cm		
128	SZ1	SZ1	381	瓦質陶 器	火鉢	頭部—体 部	外表面は瓦状と殆然の指文。内面は回 転ナデ。	輪調:灰 (10YR4-1)	1mm以下の黒褐色。 灰白色土粒。光沢狀 を含む	1/20			
144	S22	S22	182	陶器	（吉野 （内野山 ））	碗	口縁部付 及—底部	口縁部付 及—底部	内面:灰 (5Y4-2)	内面:灰 (5Y5-2)	粗良	4/5	推定径6.2cm
145	S23	S23	313	陶器	肥前 筑紫 （高倉 音義 発行）	鼎脚（高 倉）	口縁部付 及—底部付 近	内外面施釉。外表面青磁釉。内面は口縫部 に四方博文。腹部に2本の圓闌。	輪調:外 (9.5YR7-1b) 内面:白 (10Y7-1b) 頭部:白 (9.5Y7-1)	1mm以下の灰白色。 0.5mm以下の黑色 土粒を含む	1/16	推定口径7.8cm	
146	S23+ S24	S23+S24	404	土質質 上器	壺	口縁部— 腹部	内外面は回転ナデ	（5.5Y7-2) （5.5Y7-2)	2~3mmの灰褐色。 灰褐色。黑色土粒 を含む	1~3mmの灰褐色。 灰褐色。黑色土粒 を含む	粗良	1/16	推定口径32.8cm
147	S24	S24	245	磁器	肥前系 対付	瓶	口縁部— 腹部	内外面施釉。外表面は水波の草の文様に見 える。腹部に捺印。内面は口縫部と腹部 に圓闌。	輪調:白 (5Y8-3)	1mm以下の灰白色 土粒を含む	粗良	1/3	-
148	S24	S24	326	磁器	肥前系 対付	小杯	口縁部— 腹部	口縁部。外表面は水波と乳状の文様。 腹部無釉。	輪調:明灰 (7.5Y8-1)	1mm以下の灰白色 土粒を含む	粗良	3/5	推定口径6.6cm。底径 2.6cm。器高3cm
149	S25	S25	128	磁器	肥前系 見付	瓶	内外面施釉。底部は蛇の目高台タイプ。 頭部見付部に瓦状があり。	輪調:白 (5Y8-1)	1mm以下の灰白色 土粒を含む	粗良	1/5	推定底径11.0cm	
150	S25	S25	68	陶器	常滑?	甕	底部	おもく瓦状と瓦状。外表面は回転ナデ。内面 は導工紋による模様。腹部は平行文の 丁寧なナデ。	輪調:白 (10Y3-2) 内面:灰 (5Y7-2)	1mm以下の灰白色 土粒を含む	1/20		
151	S25	-	142	陶器	陶唐?	甕	底部	内面は主に橫方向のナデ。外表面は比較的 丁寧なナデ。	外表面:灰 (5YR3-4)	1mm以下の白灰色。 1mm以下の灰色 土粒を多く含む。	-	推定底径30.2cm	
152	S26	S26+F8 上	219	磁器	肥前系 対付	瓶	口縁部— 腹部	内外面施釉。外表面には草花文。背面部無釉。 底付部に捺印。	輪調:モリ (5.5Y7-2)	1mm以下の白灰色 土粒を含む	粗良	1/2	推定口径9.6cm。推定 底径9.2cm。器高5.0cm
153	S26	S26	220	磁器	肥前系 対付	瓶	口縁部— 腹部	内外面施釉。外表面にはコニャック印押に よる繩文（文字不明）。背面部は無釉。底 部付近に捺印。	輪調:白 (5Y7-2)	1mm以下の白灰色 土粒を含む	粗良	1/2	推定口径10.5cm。推定 底径4.5cm。器高8.8cm
154	S26	S26	228	磁器	肥前系 対付	瓶	体部—底 部	内外面施釉。内面には口縫部数々。	輪調:白 (5.5Y7-2)	1mm以下の白灰色 土粒を含む	粗良	1/3	
155	S26	S26	359	陶器	床面不 明	瓶	口縁部— 底部	内外面施釉。内面にはコニャック印押に よる繩文（文字不明）。背面部は無釉。底 部付近に捺印。	輪調:灰 (5Y5-2)	1mm以下の灰白色 土粒を含む	粗良	1/3	推定口径12.3cm。推定 底径9.3cm。器高3.0cm
156	S26	S26	349	磁器	床面不 明	蓋付瓶	蓋部	内面には（網の縞）の無。蓋部は 「無」。	輪調:白 (10Y1-2)	1mm以下の白灰色 土粒を含む	粗良	2/8	推定口径3.0cm。底径8.6 cm。器高3.2cm
157	S26	S26	201	陶器	吉津系	瓶	体部—底 部	底付部は瓦状。吉津系内面は兜形。見込み部には瓦状の文様。	輪調:灰 (7.5Y7-2)	1mm以下の白灰色 土粒を含む	粗良	4/5	底径14.8cm
158	S26+ S26+石 レフD中 付	S26+石 レフD中 付	191	陶器	吉津京 燒風	瓶	口縁部— 底部	内外面施釉。底付部は瓦状。高台に 「」の墨書き。見込み部には木と草花の文様。	輪調:灰 (5Y8-1)	1mm以下の白灰色 土粒を含む	粗良	1/8	口径12.0cm。底径4.6cm· 器高5.2cm
159	S26	S26	364	陶器	床面不 明	瓶	体部—底 部	内外面施釉。白底墨毛筆垂り（内面墨絵）。	輪調:白 (5.5Y7-2)	1mm以下の白灰色 土粒を含む	粗良	1/4	推定底径4.0cm
160	S26+ 混合層 Ⅱ	S26+F8 上	203	陶器	吉津系	体	口縁部— 底部	内外面口縁部瓦状の墨絵施釉。口縫部 と口縁部外壁は工具による調整。	輪調:白 (SGS-1-6) オリーブ (5Y7-2) オリーブ (GY7-6)	1mm以下の白灰色 土粒を含む	粗良	1/10	推定口径33.6cm
161	S26	S26	206	陶器	吉津系	水差	口縁部— 底部	外表面と内面は墨絵施釉。内面はオ リーブ色施釉。外表面に白化粧と緑釉 の刷毛目文様。	輪調:緑 (SGS-1-6) オリーブ (5Y7-2) オリーブ (GY7-6)	1mm以下の白灰色 土粒を含む	粗良	1/10	推定口径20.6cm
164	S27	S27	218	磁器	肥前系 対付	瓶	口縁部— 底部	内外面施釉。外表面には草花文。底付部に記 号が書かれている。底付部と移行部に記 号がある。	輪調:白 (5Y7-2)	1mm以下の白灰色 土粒を含む	粗良	1/2	推定口径10.1cm。推定 底径4.1cm。器高4.95cm
165	S27	S27	376	陶器	唐津 （陶胎 染付）	火入	口縁部— 底部	内面は施釉。底部付近は瓦状に内面に染 付の草花文。	輪調:明灰 (10YR7-4)	1mm以下の白灰色 土粒を含む	粗良	1/2	推定口径10.7cm。底径 5.9cm。器高7.4cm
166	S27	S27	155	陶器	单系?	罐詰	口縁部— 底部	内面は外に回転ナデと横の凹溝の文様。 内面には3条を単位とする筋が付する。	輪調:白 (10R 4-3)	3mm以下の白色。 2mm以下の黑色土粒を含む	粗良	1/10	推定口径35.0cm

第9表 出土遺物観察表③

番号	出土場所	注記	測定器番号	種類		器種	部位	文様・調整の特徴	色調		胎土の特徴	積存量	法量
				外	内				外	内			
168	SZ8	SZ8	263	磁器	肥前系 柴付	碗(小丸碗)	体部-底 部	内外面施釉。内外面とも施釉による衝撃 有る。	黒調(96E) (55Y-1)	白(96E) (55Y-1)	精良	1/3	底径3.2cm
169	SZ8	SZ8	351	陶器	吉津系	小丸碗	体部-底 部	内外面は無釉。高台内部は無釉。外肩 部に赤褐色の模様が確認できる。	黒調(96E) (55Y-1)	白(96E) (55Y-1)	きめ細やかで含有物 はほとんど無い。	1/6	底径3.2cm
170	SZ8	SZ8	248	磁器	肥前系 柴付	碗(広東碗)	体部-底 部	内外面は底付の大きさ・脚の み確認。内面に見込み部に記号又は見文? と記載。	黒調(96E) (55Y-1)	白(96E) (55Y-1)	精良	1/4	底径1.0径6.0cm
171	SZ8	SZ8	353	陶器	吉津系	碗	口縁部-底 部	内外面施釉(貰入多し)・無文。	黒調(浅灰) (57Y-2)	白(96E) (55Y-1)	きめ細やかで含有物 はほとんど無い。	1/8	底径1.0径9.5cm
172	SZ8	SZ8	256	磁器	肥前系 高安付 (吉津 柴付)	碗	口縁部-底 部	内外面施釉。外面青釉地。	黒調(明オリ ン)(SGV7-1)	白(96E) (55Y-1)	精良	1/8	底径1.0径11.6cm
173	SZ8	SZ 8	186	陶器	肥前系?	瓶	口縁部-底 部	内外面に施釉。高台内部は無釉で化粧 している。	外表面:黒(96Y-1) 内表面:明オリ (SGV7-1) 高台内:青釉 (SGV7-1)	内面:灰白(96E) (55Y-1)	精良	1/2	底径1.0径11.8cm-普 通底4.5cm-器高7cm
174	SZ8* 益々上	344	磁器	肥前系 柴付	香炉?・火 舟?	口縁部-底 部	内外面施釉で無文。釉色は内面が灰白色 で外部が明灰色。	黒調(96E) (55Y-1)	白(96E) (55Y-1)	精良	1/6	底径1.0径8.4cm	
175	SZ8	SZ8	366	陶器	肥前系 不明?	碗?	体部-底 部	内外面は底付の無釉で黒墨色である。 外縁に施釉タリが残る。高台内も同様に タリが残る。	黒調(96E) (55Y-1)	白(96E) (55Y-1)	きめ細やかで含有物 はほとんど無い。	1/4	底径2.0cm
176	SZ8	SZ8	325	磁器	肥前系 柴付	小杯	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は山水風景文。内面無文。	黒調(96E) (55Y-1)	白(96E) (55Y-1)	精良	1/3	底径1.0径6.0cm-普 通底4.0cm-器高4.6cm
177	SZ8	SZ8	157	陶器	等系?	瓶	口縁部-底 部	内外面には口縁部と斜方の口縁部によ る施釉。内面には横目が施釉状に施され る様子が施される。口縁部外側には2本の 凹窓。	外表面:黒(96Y-1) 内面:灰白 (10R 4-0)	内面:灰白 (10R 4-0)	3 mm以下 の灰白色。 0.5 mm以下の透明光 沢紋を含む	1/10	底径1.0径21.5cm
178	SZ8	SZ8	154	陶器	等系?	瓶	口縁部-底 部	内外面には口縁部と斜方の口縁部によ る施釉。内面には横目が施釉状に施され る様子が施される。口縁部外側には2本の 凹窓。	外表面:黒(96Y-1) 内面:灰白 (10R 4-0)	内面:灰白 (10R 4-0)	3 mm以下 の灰白色。 2 mm以下の黑色を 含む	1/8	底径1.0径27.8cm
179	SZ8	SZ8	161	陶器	吉津系	瓶鉢	口縁部-底 部	内外面は口縁部の後に施釉。内面には 3条程度の眉眼が施される。口縁部に注 目。	外表面:灰白(96Y-1) 内面:灰白 (10R 4-0)	白(96E) (55Y-1)	1 mm以下の灰白色 を含む	1/6	底径1.0径30.6cm
180	SL1	SL1-3	4	土師器	高台付焼	底部	内外面風化着しい口回転ナデ	黒(2.5YR 7-8)	黒(2.5YR 7-6)	1 mm以下の黒色砂 粒を含む	1/16	底径1.0径10.0cm	
181	SL1	SL1-4	7	土師器	高台付焼	底部	内外面風化着しい口回転ナデ。内面内里 部には口回転ナデ。	赤褐 (10YR 6-6) 底屈赤土被 (2.5YR 7-3)	黑	2 mmの黒色砂 粒を含む	1/4	底径7.5cm	
182	SE4	SEA-2	1	土師器	瓶	底部	底部赤切り底。内外面回転ナデ	橙(2.5YR 7-8)	灰(2.5YR 7-6)	2 mmの黒色砂 粒、1 mmの黑色粉 を含む	1/2	底径1.0径10.0cm	
183	SE4	SEA-11	37	土師器	不明	底部	内外面風化着しいがナデは確認でき る。内面は粗面で粗い刷毛で擦り跡。	灰(2.5YR 6-6)	灰(2.5YR 6-6)	不明	-	底径7.5cm	
184	SE4	SEA-13	57	須志器	环	蓋	内外面ともに回転ナデ	灰(N5.5)	灰(N5.5)	2 mm以下の灰白色 を含む	1/4	底径5.5cm	
185	SE4	SEA-12	173	陶器	唐川- 美濃系	天日柄杓	口縁部-底 部	内外面施釉(乳化)。	黒調(96E) (7.5YR 5-2)	白(96E) (7.5YR 5-1)	含有物はほとんど無 い。	1/10	底径1.0径10.0cm
186	SE4	SEA-5	75	磁器	青磁	碗	口縁部	口縁部はゆるやかに内凹する。内外面施 釉。外縁に織目文の道文あり。	黒調(深) (55Y-2)	灰(2.5YR 6-3)	精良	1/16	底径1.0径10.0cm
187	SE4	SEA-14	129	磁器	青花染 柴付	碗	口縁部	外縁口沿部は2本の脚と柔らかく仕様。 内面の口沿部には2本の脚。	黒(2.5YR 6-6)	白(2.5YR 6-6)	1 mm以下の赤白色 を含む	1/20	底径1.0径12.3cm
188	SE4	SEA-67	200	陶器	吉津系	瓶	口縁部-底 部	内外面に施釉。底部付帯は無釉。高台 内部は中空。	黒調(96E) (7.5YR 5-2)	白(96E) (7.5YR 5-1)	精良	2/5	底径3.8cm-普 通底3.7cm
189	SE4	SEA-348	199	陶器	吉津系	碗	口縁部-底 部	内外面に施釉。底部付帯は無釉。足込 み部には側の脚と高台内部に沙汰が 有る。	黒(2.5YR 7-8)	白(96E) (7.5Y-1)	含有物はほとんど無 い。	1/2	底径1.0径13.3cm-底径 4.6cm-器高4.4cm
252	益々上	-	36	青生 土器	高环	脚部	脚部	風化者しが、外縁は丁寧なナデ(ミガ ニ)の可憐なものあり。内面はおそらく工具 による擦り傷が施されている。下方に刻 しを施してある。	黒(2.5YR 7-8)	白(96E) (7.5Y-1)	3 mm程の白色砂 粒、1 mm程の黒・白 色砂粒を含む	1/4	-
253	益々上	280	53	縦輪 瓶	罐	口縁部	内外面回転ナデの後に施釉	オリーブ (SGV6-2)	オリーブ (SGV6-2)	精良	1/10	底径1.0径15.4cm	
254	益々上	262	58	須志器	环	蓋	口縁部	はざなナデ。口縁部の内外面には 回転ナデ。肩部に外側がナデの後の筋 紋のタリ。	黒(2.5YR 7-8)	白(2.5YR 7-6)	1 mm以下の黒褐色 を含む	1/5	底径1.0径18.0cm
255	益々上	SF1	54	須志器	壳	蓋	内外面ともに回転ナデ	灰(N5.5)	灰(N5.5)	1~2 mmの黒褐色 を含む	1/10	底径1.0径18.0cm	
256	益々上	379	62	須志器	壳	脚部	外縁は筋状タキナ。内面は同心円文の 当て具筋が残る。	黒(6N7.7)	白(96Y-1)	0.5 mm以下の橙色 を含む	1/20	-	
257	益々上	171	64	須志器	壳	脚部-側 部	外縁は平打タキナ。内面は同心円文の 当て具筋が残る。	黒(2.5YR 7-8)	灰(2.5YR 7-6)	0.2 mm以下の灰白色 を含む。	1/10	底径1.0径10.0cm	
258	益々上	352	61	須志器	壳	脚部	外縁は平打タキナ。内面は同心円文の 当て具筋が残る。	黒(2.5Y-1)	灰(2.5Y-1)	1 mm以下の灰白色 を含む	1/20	-	
259	益々上	169	65	須志器	壳	脚部	外縁は平打タキナ。内面は同心円文の 当て具筋が残る。	黒(2.5Y-1)	灰(2.5Y-2)	1 mm以下の灰白色 を含む	1/20	-	
260	益々上	193	66	須志器	壳	脚部	外縁は筋状タキナ。内面は同心円文の 当て具筋をナメ付している。	灰(2.5YR 5-1)	灰(2.5Y-1)	0.5 mm以下の灰白色 を含む	1/10	-	
261	益々上	264	60	須志器	壳	脚部	外縁は筋状タキナ。内面は同心円文の 当て具筋が残る。	黒(2.5Y-1)	灰(2.5Y-1)	含有物はほとんど無 い。	1/10	-	
262	益々上	-	63	須志器	壳	脚部	外縁は筋状タキナ。内面は同心円文の 当て具筋が残る。	灰(2.5Y-1)	灰(2.5Y-1)	1 mm以下の灰白色 を含む	1/20	-	
263	益々上	-	67	須志器	壳	脚部-底 部	外縁は筋状タキナ。底部に疵斑が数 箇所で残って有している。内面は平行文の 当て具筋が残る。	灰(2.5Y-2)	灰(2.5Y-1)	3 mm以下の灰白色・光 沢灰黑色。0.2 mm以下の 白色を含む	1/20	-	

第10表 出土遺物観察表④

番号	出土場所	記注	測量番号	種類	器種	部位	文様・調整の特徴	色調		胎土の特徴	積存量	法量
								外面	内面			
264	笠置層	416	56	埴志部	並	口縁部	外面は回転ナデの後に一象の複合工具による泥文。内面は回転ナデ。	底灰 (2.5YR6/1)	灰(10YR5/2)	0.1mm以下の黒色上粉、1mm以下の褐色砂粒を含む	1/20	
265	笠置層	245	55	埴志部	井	口縁部付近	内面は回転ナデ。外面に耳状の把手が付着	灰(10Y4/1)	灰(10Y5/1)	2mm以下の灰白色土粒を含む	1/20	
266	笠置層	108+120+128+129+130+131+132+133+134+135	16	土師器	坏	口縁部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。内部の一部に黒斑部分がある。	褐(5YR6/8)	浅褐 (3YR8/4)	2mm以下の褐色砂粒、1mm以下の褐色砂粒を含む	2/3	推定口径16.6cm-底径8.8cm-高27.5cm
267	笠置層	265	30	土師器	高台付焼	底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底灰は高台をもつ。	明灰褐 (2.5YR5/8)	明灰褐 (2.5YR5/8)	1mm以下の褐色砂粒を含む	1/3	底径7.4cm
268	笠置層	SF1	2	土師器	高台付焼	底部	内外面風化著しいが回転ナデ	褐(5YR7/8)	褐(5YR7/8)	1~6mm程度の褐色砂粒、1mm以下の黒色砂粒を含む	1/6	
269	笠置層	392	26	土師器	高台付焼	口縁部付近-底部	内外面風化著しく調整不整。内部にわざに黒斑の内のナデが確認できる。底部確認不明であるが、ヘラ打と考る。	明灰褐 (2.5YR5/8)	明灰褐 (2.5YR5/8)	1mm以下の褐色砂粒を含む	1/2	推定口径9.0cm
270	笠置層	405	32	土師器	高台付焼	底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底灰は底台をもつ。	明灰褐 (2.5YR5/8)	明灰褐 (2.5YR5/8)	1mm以下の褐色砂粒を含む	1/6	推定口径7.2cm
271	笠置層	S21	5	土師器	高台付焼	体部	内外面風化著しいが回転ナデ。内部内側-底盤あり。	浅黄褐 (7.5YR8/4)	黑(2.5Y2/1)	1mm以上の灰褐色砂粒を含む	1/8	
272	笠置層	137+138+161	29	土師器	坏	口縁部	内外面回転ナデ。底部内部は回転ナデの後にナデで施している。底灰はヘラ打。	褐(7.5YR7.6-6)	褐(5YR6/6-4)	2.5mm以下の褐色砂粒、1mm以下の暗褐色砂粒、2mm程度の光沢砂粒を含む	2/3	推定口径13.4cm-底径8.6cm-高25.8cm
273	笠置層	155	21	土師器	坏	口縁部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底灰は、低門蓋度で、風化著しいがおそらくヘラ打である。	褐(5YR6/8)	褐(5YR7/8)	2mm以下の褐色砂粒を含む	3/4	推定口径11.0cm-底径7.0cm-底高さ39cm
274	笠置層	117+118	31	土師器	坏	底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できるが、底部に凹凸があり可能性がある。	明灰褐 (2.5YR8/8)	棕(5YR8/8)	2mmの乳白色、黒褐色砂粒を含む	1/4	底径6.8cm
275	笠置層	124+125+126+127+141	11	土師器	坏	口縁部-底部	内外面は回転ナデ。底灰は回転ナデへ切り替えてある。	浅灰褐-一段 (7.5YR8/4-7.6)	浅灰褐-一段 (7.5YR8/4-7.6)	1mm以下の灰-褐色砂粒を含む	3/4	口径12.6cm-底径8.8cm-高3.4cm
276	SH-笠置層	SH-1基	18	土師器	坏	口縁部	内外面は回転ナデ。内部は回転ナデ。	水滴形 (2.5YR7/4)	水滴形 (2.5YR8/6)	1mm以下の褐色砂粒を含む	1/3	推定口径13.0cm-底定高8.6cm-高5.4cm
277	笠置層	231+232+234+235	32	土師器	坏	口縁部	内外面は風化著しく調整不整であるが、内部は回転ナデ。底部内側は回転ナデのような圧痕が確認できる。内部の横方向に多くの部分により丁寧な横力向のナデを施している。	浅黄褐 (7.5YR6/8)	褐(7.5YR7/6)	2mm以下の赤褐色砂粒、1mm以下の褐色砂粒を含む	3/4	口径11.8cm-底径6.4cm-高5.50cm
278	笠置層	321	19	土師器	坏	口縁部	内外面風化著しいが回転ナデの後に磁力ナデが施している。底灰は風化著しいが、おそらくヘラ打である。	褐(5YR7/8)	褐(5YR7/8)	2mm以下の褐色砂粒、1mm以下の褐色砂粒を含む	2/3	推定口径12.5cm-底定高8.45cm
279	笠置層	237	25	土師器	坏	口縁部	内外面風化著しいが回転ナデは確認不能。外縁はナデで施してあるが、底灰は確認不能。	浅灰褐 (7.5YR7/6)	浅灰褐 (7.5YR8/3)	2mm-3mm程度の褐色砂粒、1mm以下の褐色砂粒を含む	1/3	推定口径4.6cm
280	笠置層	170	17	土師器	坏	口縁部	内外面は風化著しいが、底灰はヘラ打で切り替えてある。一部にワラしらしき压痕が確認できる。	褐(5YR7/4)	褐(5YR8/4)	2mm以下の灰-褐色砂粒、1mm以下の褐色砂粒を含む	2/3	推定口径12.5cm-底径7.3cm-高5.39cm
281	笠置層	C10 F	9	土師器	坏	口縁部	内外面風化著しいがナデは確認できる。底灰は風化著しいが、おそらくヘラ打。	灰(10YR7/4-8)	灰(10YR7/3)	2mm以下の黒-褐色砂粒、1mm以下の褐色砂粒を含む	1/2	
282	笠置層	286	20	土師器	坏	口縁部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底灰は風化著しいが、おそらくヘラ打。	褐(5YR6/8)	褐(5YR7/6)	2.5mm-3mm程度の褐色砂粒、1mm以下の褐色砂粒を含む	2/3	推定口径10.0cm-底径6.6cm-高3.3cm
283	笠置層	291	34	土師器	高台付焼	口縁部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。口沿部は摩耗強く、口沿部のどうか判別が難しく、底灰部は高台向外れたようない形跡が残る。	褐(5YR7/8)	明灰褐 (2.5YR5/8)	2mm以上の褐色砂粒を含む	4/5	推定口径10.2cm-底径6.6cm
284	笠置層	201	33	土師器	坏	口縁部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底灰は風化著しいが、底灰はヘラ打で切り替えてある。	褐(5YR7/8)	褐(7.5YR7/6)	3mm程の褐色砂粒を含む	1/3	推定口径11.7cm-底径8.2cm-底定高さ3.1cm
285	笠置層	V	10	土師器	坏	体部-底部	内外面は回転ナデ。底灰調整は不明。	灰(7.5YR6/4)	灰(7.5YR6/4)	0.5mm以下の黑褐色砂粒を含む	1/4	推定底径5.8cm
286	SH-笠置層	SH+113	14	土師器	坏	底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底部調整不整であるが、赤く染らしき痕跡もある。	褐(2.5YR6/8)	褐(2.5YR7/8)	1mm以下の褐色砂粒を含む	1/3	推定底径5.6cm
287	笠置層	390	35	土師器	坏	口縁部付近-底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底灰は風化著しく調整不整。	褐(2.5YR5/8)	褐(2.5YR6/8-7)	1mm以上の赤褐色砂粒を含む	1/2	推定底径3.7cm
288	笠置層	-	28	土師器	坏	口縁部	内外面回転ナデ。底部は風化著しく調整不整であるが、赤く染り底と考えられる。	黑褐 (2.5Y3/3)	黑褐 (2.5YR5/8-9)	2mm以下の褐色砂粒、1mm以下の褐色砂粒を含む	1/2	推定口径11.0cm-底定高4.6cm-推定底径3.3cm
289	笠置層	136	42	土師器	布帆上部	口縁部-体部	風化著しいが、外縁はナデと指揮され、内面は布帆が確認できる。	褐(5YR6/6)	褐(5YR6/6)	2mm以下の褐色砂粒、1mm以下の褐色砂粒を含む	1/4	推定口径12.1cm
290	笠置層	146	43	土師器	布帆上部	口縁部	風化著しいが、外縁はナデと指揮され、内面は布帆が確認できる。	褐(5YR6/6)	褐(5YR6/6)	2mm以下の褐色砂粒、0.5mm以下の褐色砂粒を含む	1/4	推定口径13.1cm
291	笠置層	F8上	39	土師器	布帆上部	口縁部	風化著しいが、外縁はナデと指揮され、内面は布帆が確認できる。	褐(5YR7/6)	褐(5YR7/6)	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	1/8	推定口径12.8cm

第11表 出土遺物観察表⑤

番号	出土場所	記注	実測番号	種類	器種	部位	文様・調整の特徴	色調		胎土の特徴	積存量	法量	
								外面	内面				
292	混合層	166	48	土師器	布直土器	口縁部 体部	風化著しくが、外面はナデと指揮され、 内面は布目が確認できる。	橙(2,5YR7/4)	橙(7,5YR7/4)	1~5mmの灰褐色土粒を含む	1/6	推定口径9.7cm	
293	混合層	145+152	44	土師器	布直土器	口縁部 体部	風化著しくが、外面はナデと指揮され、 内面は布目が確認できる。	明赤褐 (SYR5-5)	明赤褐 (SYR5-6)	3mm以下の橙・暗赤褐色土粒を含む	1/3	推定口径10.5cm	
294	混合層	116+146	45	土師器	布直土器	口縁部 体部	風化著しくが、外面はナデと指揮され、 内面は布目が確認できる。	橙(5YR6-6)	橙(2,5YR6-6)	1~5mmの灰褐色土粒を含む	1/3	推定口径12cm	
295	混合層	139	41	土師器	布直土器	口縁部 体部	風化著しくが、外面はナデと指揮され、 内面は調節不明瞭だが、布目と考えられ る。	橙(5YR6-6) ~9W白 (7,5YR6-6)	橙(7,5YR6-6)	4mm以下の石いし 橙・灰褐色土粒を含む	1/6	推定口径10.2cm	
296	混合層	379	49	土師器	布直土器	口縁部 体部	風化著しくが、外面はナデと指揮され、 内面は布目が確認できる。	橙(2,5YR6-6)	橙(2,5YR6-6)	1~5mmの灰褐色土粒を含む	1/6	推定口径8.6cm	
297	混合層	149	46	土師器	布直土器	口縁部 体部	風化著しくが、外面はナデと指揮され、 内面は布目が確認できる。	橙(5YR6-6)	橙(5YR6-6)	1~5mmの砂色土粒を含む	1/8		
298	混合層	160	47	土師器	布直土器	口縁部 体部	風化著しくが、外面はナデと指揮され、 内面は布目が確認できる。	橙(5YR7-6)	橙(5YR7-6)	1~3mmの灰褐色土粒、 1~1.5mmの暗褐色土粒を含む	1/8		
299	混合層	296	50	土師器	布直土器	口縁部 体部	風化著しく、内外面の調節不明。外面上に はナデと指揮されが確認できる。	橙(5YR7-6)	橙(5YR7-6)	1~5mmの灰褐色土粒、 1~2.5mmの灰白色土粒を含む	9/10		
300	混合層 C10F	40	40	土師器	布直土器	体部	風化著しくが、外面はナデと指揮され、 内面は布目が確認される。	橙(5YR6-6) ~9W白 (SYR7-6)	明赤褐 (2,5YR5-5) ~9W白 (SYR7-6)	4mm以下の灰褐色土 粒、1~2.5mmの暗褐色土 粒、2mm以下の細小 灰褐色土粒を含む	1/8		
301	混合層	372	51	土師器	布直土器	底部付近	風化著しく、内外面の調節不明。底面に はわずかがら平垣面が存在する。	橙(5YR7-6)	橙(5YR7-6)	1~5mmの灰褐色土 粒、1~3mmの灰白色 土粒を含む	1/10		
302	混合層 S26	69	磁器	青磁	碗	口縁部 底部	内外面施釉。底面は撥付で最高点 まである。外表面は細網状文。内面見 込みに「加」の字。	施調:青緑色	施上:灰白 (5YR7-6)	精良	1/2	推定口径12.8cm・底径 4.95cm・推定高3.69cm	
303	混合層	330	71	磁器	青磁	碗	口縁部 底部	内外面施釉。内面部分にわざに個人部 分がある。	施調:青緑色	施上:灰白 (5YR7-6)	精良	1/5	推定口径15.3cm
304	混合層	S21	73	磁器	青磁	碗	口縁部 底部	口縁部は中身をやせに外反。内外面施釉。	施調:青緑色	施上:灰白 (5YR7-6)	精良	1/20	
305	混合層	364	74	磁器	青磁	碗	口縁部	口縁部は中身をやせに外反。内外面施釉。	施調:青緑色	施上:灰白 (5YR7-6)	精良	1/20	
306	混合層	337	79	磁器	青磁	碗	口縁部 体部	口縁部は中身をやせに外反。内外面施釉。 外表面に片割れによる草木 文があり。	施調:青緑色	施上:灰白 (5YR7-6)	精良	1/30	
307	混合層	363	72	磁器	青磁	碗	口縁部 体部	口縁部は中身をやせに外反。内外面施釉。 外表面に片割れによる草木 文があり。	施調:青緑色	施上:灰白 (5YR7-6)	精良	1/16	
308	混合層	III	77	磁器	青磁	碗	口縁部 体部	口縁部は直腹。内外面施釉。外面上に追 加焼成されており。	施調:青緑色	施上:灰白 (5YR7-6)	精良	1/20	
309	混合層	FII	99	磁器	青磁	碗	口縁部 体部	内外面施釉。外面上に追加焼成されて おり。	施調:浅黄 (2,5Y7/4)	施上:浅黄 (2,5Y7/3)	精良	1/20	
310	混合層 S26+円盤 上	80	磁器	青磁	碗	口縁部 体部	内外面施釉。外面上に丸堀りによる追加焼 成文があり。	施調:浅黄 (2,5Y7/4)	施上:灰白 (5Y7/2)	精良	1/20		
311	混合層	III	86	磁器	青磁	碗	部(底部 付近)	内外面施釉。外面上に墨文の可塑性がある が多少不均一。内面はも不透明であるが 本文の可塑性がある。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/10	
312	混合層	SX1	87	磁器	青磁	碗	底部	内外面施釉。外面上は小字で詳細不明で あるが無文。内面は丸堀の墨文。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/10	
313	混合層	248	81	磁器	青磁	碗	底部	内外面施釉。施釉は高台内側まで。内面 見込み部分に墨文。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/4	
314	混合層	石レフB -8	95	磁器	青磁	碗	底部	内外面施釉。施釉は高台内側まで。外 面は凹凸の激しい。内面見込みに墨文。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/4	
315	混合層	344	82	磁器	青磁	碗	底部	内外面施釉。施釉は外底から底面まで無 限に張り付けてある。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/3	
316	混合層	D8B	83	磁器	青磁	碗	底部	内外面施釉。施釉は外底から底面まで無 限に張り付けてある。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/20	
317	混合層	FII	84	磁器	青磁	碗	底部	内外面施釉。施釉は底面部分だけ剥き取 っている。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/2)	精良	1/10	
318	混合層	FII直面 上	106	磁器	青磁	碗	口縁部 底部	内外面施釉。施釉は高台内面まで。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/8	推定口径6.5cm
319	混合層	III	97	磁器	青磁	环	口縁部 体部	内外面施釉。外面上に蓮瓣文。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/20	推定口径10.5cm
320	混合層	340	92	磁器	青磁	瓶	口縁部 体部	内外面施釉。外面上に蓮瓣文。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/10	
321	混合層	D11F	101	磁器	青磁	环	口縁部 体部	内外面施釉。外面上に蓮瓣文。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/20	推定口径12.0cm
322	混合層	63B	100	磁器	青磁	瓶	口縁部 体部	内外面施釉。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/20	推定口径12.5cm
323	混合層	FII上	90	磁器	青磁	瓶	口縁部 底部	内外面施釉。口縁部に輪花。高台内部と 内面見込み部は無施。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/2)	精良	2/3	推定口径11.5cm・底径4.75 cm・高さ2.6cm
324	混合層	341	94	磁器	青磁	瓶	口縁部 体部	内外面施釉。外面上に蓮瓣文。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/6	推定口径9.3cm
325	混合層	—	95	磁器	青磁	瓶	口縁部 体部	内外面施釉。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/20	推定口径7.1cm
326	混合層	358	93	磁器	青磁	瓶	口縁部 体部	内外面施釉。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/1)	精良	1/12	
327	混合層	G11上	108	磁器	青磁	环	底部	内外面施釉。施釉は高台内面まで。	施調:青緑色 (5Y7/2)	施上:灰白 (5Y7/2)	精良	1/8	
328	混合層	II	104	磁器	青磁	环	底部	内外面施釉。内面見込み部は円形に 分割部分あり。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/2)	精良	1/4	底径4.7cm
329	混合層	SZ1	107	磁器	青磁	环	底部	内外面施釉。施釉は高台内面及び底面の 一部まで。内面見込み部に円形の無施部 分あり。	施調:青緑色	施上:灰白 (5Y7/4)	精良	1/8	推定底径6.5cm

第12表 出土遺物観察表⑥

番号	出土場所	記注	測量番号	種類	器種	部位	文様・調整の特徴	色調		胎土の特徴	積存量	法量
								外面	内面			
330	笠合層	SX1	102	磁器	青磁	环	底部 内外面施釉。内面見込みに團花 1本。高台内にはねじを繋いでいる。	輪潤: 青緑色 (5Y7/2)	白土: 黄白 (5Y7/2)	粗良	1/4	底径5.7cm
331	笠合層	23II	103	磁器	青磁	瓶	底部 内外面施釉。内面見込みに草花文。	輪潤: 用モリーブ(5GY7/1)	白土: 黄白 (5Y7/2)	粗良	1/4	底径5.9cm
332	笠合層	ハイ土	105	磁器	青磁	瓶	底部 内外面施釉。内面見込み部分に草花文。内面に複数(單足や脚)と外面上に2条の範囲の花文。	輪潤: オリーブ (5Y7/1)	白土: 黄白 (5Y7/1)	粗良	1/4	底径5.7cm
333	笠合層	23II	113	磁器	青磁	瓶	口縁部 内外面施釉。口縁内面部に文様あり。	輪潤: オリーブ (5Y7/2)	白土: 黄白 (5Y7/2)	粗良	1/20	推定口径29cm
334	笠合層	18	112	磁器	青磁	瓶	底部 内外面施釉。内面見込み部に草花文。全体に網状の貫入が認められる。	輪潤: オリーブ (5Y7/1)	白土: 黄白 (5Y7/2)	粗良	1/8	推定口径12.3cm
335	笠合層	E9II	114	磁器	青磁	瓶	底部 内外面施釉。	輪潤: オリーブ (5Y7/2)	白土: 黄白 (5Y7/2)	粗良	1/20	
336	笠合層	32S	115	磁器	青磁	瓶	底部 内外面施釉。高台外壁に草花文あり。内面に1脚の足の着いた輪組よりなり。	輪潤: 青緑色 (5Y7/2)	白土: 黄白 (5Y7/2)	粗良	1/20	推定口径8.4cm
337	笠合層	II	111	磁器	青磁	高足杯	環部 内外面施釉。	輪潤: オリーブ (5Y7/2)	白土: 黄白 (5Y7/2)	粗良	1/4	推定口径7.9cm
338	笠合層	S26	109	磁器	青磁	香炉	口縁部 内外面施釉。内面底部付近に一部無釉部付分あり。	輪潤: 黄緑 (7.5GY6/1)	白土: 黄白 (5Y8/1)	粗良	1/6	推定口径13.0cm
339	笠合層	D8II	110	磁器	青磁	香炉	脚部 外面施釉。内面無釉。	輪潤: 黄緑 (7.5GY6/1)	白土: 黄白 (5Y8/2)	粗良	1/20	
340	笠合層	-	440	磁器	白磁	瓶	口縁部 内外面施釉。内面見込みに團花 1本。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/2)	粗良	1/6	推定口径15.8cm
341	笠合層	S28	117	磁器	白磁	瓶	口縁部 内外面施釉。口縁部に一条の凹面あり。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/2)	粗良	1/20	
342	笠合層	F8I	118	磁器	白磁	瓶	口縁部 内外面施釉。内面見込み部と外底部付近に円形の輪組の引き取りあり。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/20	推定口径11.6cm
343	笠合層	-	119	磁器	白磁	瓶	口縁部 内外面施釉。内面見込み部と外底部付近に円形の輪組の引き取りあり。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/20	推定口径10.8cm
344	笠合層	E1II	116	磁器	白磁	瓶	口縁部 内外面施釉。高台内面脇部のみ焼が無い。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/4	推定口径11.4cm-底径6.3cm-推定高さ29cm
345	笠合層	SX1	124	磁器	白磁	瓶	底部 内面見込み部が焼がれ取られている。底部付近は無釉。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/8	底径5.0cm
346	笠合層	石引B -1位	125	磁器	白磁	瓶	底部 内外面施釉。外底部付近無釉。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/8	底径4.6cm
347	笠合層	D9II	121	磁器	白磁	瓶	底部 内外面施釉。見込み部が焼がれ取られている。底部付近は無釉。	輪潤: 用モリーブ (5GY7/1)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/4	底径5.7cm
348	笠合層	346	123	磁器	白磁	瓶	底部 内外面施釉。見込み部に蛇の目焼跡。外底部付近は無釉。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/6	底径3.4cm
349	笠合層	S21	120	磁器	白磁	瓶	底部 内外面施釉。外底部付近無釉。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/2)	粗良	1/5	底径3.5cm
350	笠合層	25II	121	磁器	白磁	瓶	底部 内外面施釉。底部付近无釉。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/8	底径3.1cm
351	笠合層	F8I	131	磁器	青花染付	碗	口縁部～外底部周辺は1本の虎頭文。底部には色斑文。内面口縁部には1本の単足。	輪潤: 明青 (5BG7/1)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/10	推定口径13.8cm
352	笠合層	31II	511	磁器	青花染付	碗	体部 内外面施釉。外底部に単足。	輪潤: 明青 (5BG7/1)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/20	
353	笠合層	F8I	130	磁器	青花染付	碗	口縁部 口縁部に2本の虎頭文と文字らしさをもつ人物文。片面の脚部には1本の単足と腰子文。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 白	粗良	1/20	推定口径12.1cm
354	笠合層	G11II	134	磁器	青花染付	瓶	底部 内面見込み部に「丁」字の文字。底部付近と高台内には無釉。瓷片が削り取ってある。	輪潤: 青(5Y6/1)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/4	推定底径22cm
355	笠合層	S23	127	磁器	青花染付	瓶	口縁部～底部 内外面施釉。外底部付近無釉。筒形瓶。底部付近に「丁」字の文字。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/3	推定底径4.0cm
356	笠合層	S28	135	磁器	青花染付	瓶	底部 内外面施釉。外底部付近無釉。筒形瓶。底部付近に「丁」字の文字。底部付近に「丁」字の文字。底部付近に「丁」字の文字。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/6	推定底径6.5cm
357	笠合層	S2II	126	磁器	青花染付	瓶	底部 内外面施釉。外底部付近無釉。筒形瓶。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/2)	粗良	1/3	底径4.6cm
358	笠合層	-	133	磁器	青花染付	瓶	体部～底部 内外面施釉。外底部付近無釉。筒形瓶。底部付近に「丁」字の文字。底部付近に「丁」字の文字。	輪潤: オリーブ (5GY7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/2)	粗良	1/6	推定底径5.2cm
359	笠合層	II	164	磁器	青花染付	瓶	底部 内外面施釉。外底部付近無釉。筒形瓶。底部付近に「丁」字の文字。底部付近に「丁」字の文字。	輪潤: 青(5B7/1)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/4	推定底径7.7cm
360	笠合層	FGII	175	磁器	青花染付	瓶	底部 内外面施釉。外底部付近無釉。筒形瓶。底部付近に「丁」字の文字。底部付近に「丁」字の文字。	輪潤: 白(5Y7/2)	白土: 黄白 (7.5Y8/2)	粗良	1/6	推定底径5.15cm
361	笠合層	II	167	磁器	青花染付	瓶	底部 内外面施釉。外底部付近無釉。筒形瓶。底部付近に「丁」字の文字。底部付近に「丁」字の文字。	輪潤: 青(5B7/1)	白土: 黄白 (7.5Y8/2)	粗良	1/10	推定底径7.7cm
362	笠合層	E9II	512	磁器	青花染付	瓶	底部 内外面施釉。底部付近に「丁」字の文字。底部付近に「丁」字の文字。	輪潤: 青(5B7/1)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/20	推定底径8.3cm
363	笠合層	-	165	磁器	青花染付	瓶	底部 内外面施釉。外底部付近無釉。筒形瓶。底部付近に「丁」字の文字。	輪潤: 用モリーブ (5GY7/1)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/20	
364	笠合層	F8I	166	磁器	青花染付	瓶	底部 内外面施釉。外底部付近無釉。筒形瓶。底部付近に「丁」字の文字。	輪潤: 明青 (5BG7/1)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/6	推定底径7.5cm
365	笠合層	F8I	169	磁器	青花染付	瓶	底部 内外面施釉。外底部付近無釉。筒形瓶。底部付近に「丁」字の文字。	輪潤: 明青 (5BG7/1)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/6	
366	笠合層	C1II	168	磁器	青花染付	瓶	底部 内外面施釉。外底部付近無釉。筒形瓶。底部付近に「丁」字の文字。	輪潤: 明青 (5BG7/1)	白土: 黄白 (7.5Y8/1)	粗良	1/10	推定底径8.1cm

第13表 出土遺物観察表⑦

番号	出土場所	注記	実測標号	種類	器種	部位	文様・調整の特徴	色調		胎土の特徴	積存量	法量	
								外側	内面				
367	混合層	PGH +33B	170	磁器	青花斐 丹彩	瓶	口縁部 全体	外縁部、内面部に文化あり。 底部脇付部には物が付着している。	黒 輪郭、甕口 1.36cm (25YR7-1)	輪口:1.36cm (25YR7-1)	精良	2/5	测定口径8.8cm・测定 底径9.7cm・器高3.0cm
368	混合層	SH	23	土器		环	口縁部 全体	内外面ともに回転ナデ。内面は外側より丁寧な斜方角のナデを施している。	黒 輪郭、甕口 1.37cm (25YR7-1)	輪口:1.37cm (25YR7-6)	0.5mm以下の黒色、 明赤褐色砂粒を含む	1/6	测定口径5.7cm・测定 底径5.7cm・器高3.1cm
369	混合層	—	27	土器		环	口縁部 全体	内外面回転ナデ。底部内面は回転ナデの後にナデを施している。底部は切り底。	黒 輪郭、甕口 1.37cm (25YR7-1)	輪口:1.37cm (25YR7-8)	1mm以下の黒色砂粒 を含む	8/9	口径9.7cm・底径5.6cm・ 高さ3.0cm
370	混合層	D9H +33B	13	土器		环	口縁部 全体	内面は回転ナデ。外側は回転ナデとナデ。 輪口:2.5cm	黒 輪郭、甕口 1.37cm (25YR7-6)	輪口:1.37cm (25YR7-6)	0.5mm以下の黒色砂 粒を含む	1/3	测定口径8.4cm・测定 底径8.2cm・器高3.2cm
371	混合層	SH	12	土器		环	口縁部 全体	内外面は回転ナデ。底面は希切り底。	黒 輪郭、甕口 1.37cm (25YR7-6)	輪口:1.37cm (25YR7-6)	0.5mm以下の黒褐色 砂粒を含む	1/3	测定口径10.0cm・测定 底径9.6cm・器高3.6cm
372	混合層	SH	15	土器		环	底部	内面は青花(?)と黒墨(?)不明。(おそらく回転ナデ)。外側は斜方ナデ。表面は輪郭明瞭であるが、希切り底から直底。底面に長さ3~4cm・幅1mm程の溝状部が本確定できる。	浅灰褐 輪郭 1.37cm (25YR8-6)	浅灰褐 輪郭 1.37cm (25YR8-6)	2mm程の黒色砂粒を 含む	1/3	底径7.0cm
373	混合層	S25	8	土器		瓶	口縁部 全体	内外面風化するしいか回転ナデ。底部は希切り底。	浅灰褐 輪郭 1.37cm (25YR8-6)	浅灰褐 輪郭 1.37cm (25YR8-6)	1mm以下の黒・0.5 mm以下の明赤褐色砂 粒を含む	3/5	
374	混合層	—	52	土器		瓶	口縁部 全体	内外面ともに回転ナデ。底部は希切り底。	黒 輪郭、甕口 1.37cm (25YR7-8)	輪口:1.37cm (25YR7-8)	1mm程の黑色砂粒を 含む	1/4	测定底径6.6cm
375	混合層	119	24	土器		瓶	口縁部 全体	内外面は青花(?)と黒墨(?)不明。底部調査不明であるが、ヘラ切りと考えられる。	黒 輪郭、甕口 1.37cm (25YR7-4)	輪口:1.37cm (25YR8-6)	0.5mm以下の黒色砂 粒を含む	1/4	测定口径7.4cm・测定底 径9.5cm・器高3.10cm
376	混合層	D9H	136	陶器	青磁系	类	口縁部	内外面に回転ナデ。内面脇部付近は斜方 角のナデ。	黑 輪郭、底赤 1.37cm (25YR3-1)	底赤:1.37cm (10R5-6)	1mm以下の白・灰色 砂、2mm以下の黑色 砂をわずかに含む	—	
377	混合層	—	138	陶器	青磁系	类	口縁部	内外面に回転ナデ。	外削:1.37cm 内削:1.37cm 輪郭 1.37cm (25YR4-1)	外削:1.37cm 内削:1.37cm 輪郭 1.37cm (25YR4-2)	わずかに1mm以下の 白色砂を含む	—	
378	石レフZ 南D9H +G11上	140	陶器	青磁系	类	口縁部 全体	外削には全体的に輪郭(自然輪)がかかるが、 内削には輪郭ナデであるが、 斜方角のナデもある。	外削:浅黄 内削:底赤 1.37cm (25YR4-3)	外削:浅黄 内削:底赤 1.37cm (25YR4-2)	3mmの灰白色を少 量、1mm以下の白砂 粒を含む	—	测定口径28.0cm	
379	混合層	—	137	陶器	青磁系	类	肩部	内外面に回転ナデ。	外削:灰赤 内削:底赤 1.0R4-2	外削:灰赤 内削:底赤 1.0R4-2	1mm以下の灰白砂 粒、3mm程の白粒を 含む	—	
380	混合層	D11H	141	陶器	青磁系	类	底部	底部脇部部分は回転ナデ。内面脇部付近 は不定方位の工具があり。外削は比較的 丁寧なナデ。	外削:1.37cm 内削:1.37cm 輪郭 1.37cm (25YR4-4)	外削:1.37cm 内削:1.37cm 輪郭 1.37cm (25YR4-2)	5mm以下の白色土 粒、1mm以下の白砂 粒、1mm以下の黑色 砂を含む	—	测定底径33.9cm
381	混合層 石レフC	143	陶器	青磁系	类	底部	内外面は上窄下ナデ。	外削:灰黄 内削:底赤 1.37cm (25YR3-2)	外削:灰黄 内削:底赤 1.37cm (25YR3-2)	3mm以下の灰白色を少 量、1mm以下の赤 色砂、2mm以下の赤 色砂を含む	—	测定底径41.2cm	
382	混合層	SX1	146	陶器	青磁系	细钵	口縁部	内外面は主に回転ナデによる調整。内削 体部には7条を単位とする横目。	外削:灰 内削:底赤 1.37cm (25YR4-3)	外削:灰 内削:底赤 1.37cm (25YR4-3)	4mm以下の大底孔、3 mm以下の黑色粒を含 む	1/8	测定口径12.2cm
383	混合層	S26	172	陶器	蘭口+ 美濃系	天日茶碗	口縁部 底部付近	内外面施釉(灰釉)。底部付近無釉。 底部付近無釉。	施釉:深 1.37cm (25YR3-1)	施釉:深 1.37cm (25YR3-1)	1mm以下の暗褐色・白 色砂をわずかに含む	1/6	测定口径12.0cm・测定 底径6.1cm・器高5.5cm
384	混合層	324	145	陶器	蘭口+ 美濃系	深鉢	口縁部 全体	内外面口縁部付近に施釉。注口部あり。 體内部に縱目と横目刻目。	施釉:ナ ー 1.37cm (25YR6-2)	施釉:ナ ー 1.37cm (25YR7-1)	1mm以下の白砂 粒、2mm以下の赤 色砂を含む	1/16	测定口径16.6cm
385	混合層	29H	174	磁器	初期伊 万里	瓶	口縁部 全体	内外面施釉。底面付近は無釉。底面は平滑。 高台脇付部は物が付着している。	施釉:明灰 1.37cm (25YR8-1)	施釉:明灰 1.37cm (25YR8-2)	精良	1/6	测定口径12.7cm・测定 底径6.1cm・器高3.15cm
386	混合層	PGH	176	磁器	初期伊 万里	瓶	口縁部 全体	花苞形、數本(?)の葉筋(?)で構成される葉筋の 模様。葉筋には斜方角のナデがある。 葉筋付近は妙手で施釉している。	施釉:灰 1.37cm (25YR1-1)	施釉:灰 1.37cm (25YR1-1)	精良	1/2	测定底径5.6cm
387	混合層	—	178	磁器	初期伊 万里	小环	口縁部 全体	青花草文。内外面施釉。外削に輪郭色 の草文。底部付近及び底部内面無釉。	施釉:灰 1.37cm (25YR1-1)	施釉:灰 1.37cm (25YR1-1)	精良	3/5	测定口径5.5cm・底径2.6 cm・器高3.7cm
388	混合層	186	190	陶器	吉津京 燒風	碗	口縁部 全体	内外面施釉。底部付近に黑色の火照跡。 底部内面は無釉。見込み部に竹文。	施釉:深 1.37cm (25YR7-6)	施釉:深 1.37cm (25YR7-3)	精良	9/10	口径13.3cm・底径5.5cm・ 器高4.8cm
389	混合層	F9H上	193	陶器	吉津京 燒風	碗	口縁部 全体	内外面施釉。底面付近は無釉。底面は平滑。 見込み部に山水文。	施釉:深 1.37cm (25YR8-1)	施釉:深 1.37cm (25YR8-2)	精良	1/3	测定口径12.0cm・测定 底径5.0cm・器高4.2cm
390	混合層	F10H上	195	陶器	吉津京 燒風	碗	体部-底 全体	内外面施釉。底面付近は無釉。底面は平滑。 見込み部に山水文。	施釉:深 1.37cm (25YR8-1)	施釉:深 1.37cm (25YR8-3)	精良	1/2	底径4.7cm
391	混合層	石レフB- D12	192	陶器	吉津京 燒風	碗	口縁部 全体	内外面施釉。底面付近は無釉。底面は平滑。 見込み部に山水文。	施釉:深 1.37cm (25YR7-1)	施釉:深 1.37cm (25YR7-1)	精良	1/2	测定口径9.4cm・测定 底径6.0cm・器高4.8cm
392	混合層	Ⅲ	198	陶器	吉津京 燒風	碗	体部-底 全体	内外面施釉。底面付近は無釉。底面は平滑。 見込み部に山水文。	施釉:深 1.37cm (25YR7-1)	施釉:深 1.37cm (25YR7-1)	精良	1/3	底径4.3cm
393	混合層	F9H上	196	陶器	吉津京 燒風	碗	体部-底 全体	内外面施釉。底面付近は無釉。底面は平滑。 高台は欠損。見込み部に山水文。	施釉:深 1.37cm (25YR7-1)	施釉:深 1.37cm (25YR7-1)	精良	1/4	底径6.9cm
394	混合層	石レフB- D12+石 レフD底	194	陶器	吉津京 燒風	碗	口縁部 全体	内外面施釉。底面付近は無釉。底面は平滑。 見込み部に山水文。	施釉:深 1.37cm (25YR7-1)	施釉:深 1.37cm (25YR7-1)	精良	1/2	
395	混合層	Ⅲ	181	陶器	唐津 (内山 系?)	碗	口縁部 全体	内外面施釉。外削下1/3は無釉。	外削:ナ ー 1.37cm (25YR6-2)	外削:ナ ー 1.37cm (25YR6-2)	精良	1/3	测定口径10.5cm・测定 底径5.8cm・器高4.4cm
396	混合層	Ⅲ	183	陶器	唐津 (内山 系?)	碗	口縁部 全体	内面青緑色 外削:青緑 内削:青 1.37cm (25YR6-2)	外削:青緑 内削:青 1.37cm (25YR6-2)	精良	3/5	底径4.4cm	
397	混合層	Ⅲ	197	陶器	唐津 (内山 系?)	碗	体部-底 全体	内外面施釉。底面付近は無釉。底面は 吹っぽげている。高台内、見込み部に山水文。	施釉:深 1.37cm (25YR7-1)	施釉:深 1.37cm (25YR7-1)	精良	1/4	底径5.1cm
398	混合層	421	204	陶器	唐津系	碗	口縁部 全体	内外面施釉。外削下1/3は無釉。 底面は2通りある。	施釉:深 1.37cm (25YR7-1)	施釉:深 1.37cm (25YR7-3)	精良	4/5	测定口径11.6cm・测定 底径6.2cm・器高3.4cm

第14表 出土遺物観察表⑧

番号	出土場所	記注	測量番号	種類	器種	部位	文様・調整の特徴	色調		胎土の特徴	積存量	法量	
								外側	内面				
399	笠置塚	石レフB-D付	202	陶器	吉津系	体	口縁部	内外面は灰色に白化施釉の網目毛を施す。高台内は兔毫巾。口縁部は輪花紋の形状。	輪調:96(7.5YR8-3)	胎土:灰(7.5Y5-3)	粗良	1/10	推定口径13.5cm
400	笠置塚	B	205	陶器	吉津系	体	口縁部～全体部	内外面褐色施釉。白化帯なし。網目毛あり。	輪調:褐(2.5YR2-1)	胎土:褐(2.5Y8-4)	粗良	1/6	推定口径22.6cm
401	笠置塚	B	208	陶器	吉津系	脚	体部～底付近	内外面褐色施釉。外面部付近は無釉。	輪調:褐(2.5YR4-1)	胎土:灰(10YR7-1)	粗良	1/5	推定径27cm
402	笠置塚	B	209	陶器	吉津系(高麗内)	土鍋	口縁部～全体部	内外面褐色施釉。外面部下部は無釉。	輪調:褐(2.5YR5-1)	胎土:灰(7.5YR5-1)	粗良	1/6	推定口径19.6cm
403	笠置塚	E9H	210	陶器	吉津系	瓶	腹部	内外面褐色施釉。瓶部にS字状の把手あり。	輪調:褐(10YR3/0)	胎土:灰(10YR3/1)	粗良	1/20	
404	笠置塚	16	212	陶器	吉津系	瓶	口縁部～瓶部	内外面褐色施釉(鉢輪)。	輪調:灰(5YR8-2)	胎土:灰(5YR5-2)	粗良	1/4	推定口径5.6cm
405	笠置塚	石レフD中付	211	陶器	吉津系	瓶	瓶部～胴部	内外面褐色施釉。外面部にオリーブ青色の網目毛様。下手は無釉。	輪調:褐(10YR2-3)	胎土:灰(10YR2-3)	粗良	1/3	
406	笠置塚	DIIH	179	陶器	志野	鉢(輪花鉢)	口縁部～底部	口縁部内面には幾何文、見込み部には竹林らし文様。底部には3ヶ所の脚台がある。	輪調:96(5Y8-1)	胎土:灰(10YR7-3)	粗良	1/2	推定口径16.2cm、底径16cm、器高5.6cm
407	笠置塚	石レフB-D付	180	陶器	志野?	鉢(輪花鉢)	口縁部	内外面施釉。	輪調:96(5Y8-1)	胎土:灰(10YR7-3)	粗良	1/10	
408	笠置塚	FB上+尾	213	磁器	肥前系	碗(くわらんぐ碗)	口縁部	内外面施釉。外面部にはコニャキ印押による草花文。底付部に網目。	輪調:96(10YR)	胎土:灰(10YR)	粗良	1/2	推定口径9.8cm、底径4.1cm、器高5.5cm
409	笠置塚	DIIH	217	磁器	肥前系	碗(くわらんぐ碗)	口縁部	内外面施釉。外面部には草花文。底付部に網目。	輪調:明暦96(2.5YR8-1)	胎土:灰(10YR)	粗良	1/2	
410	笠置塚	石レフB-D+曲	214	磁器	肥前系	碗(くわらんぐ碗)	口縁部	内外面施釉。外面部には草花文。底付部に網目。	輪調:96(10YR)	胎土:灰(7.5YR8-1)	粗良	2/3	推定口径12.2cm、底径8.0cm、器高5.0cm
411	笠置塚	B	215	磁器	肥前系	碗(くわらんぐ碗)	口縁部	内外面施釉。外面部には竹文。文様に書かれていて、その墨跡が残る。	輪調:明モリヤ(2.5YR7-1)	胎土:灰(7.5Y7-1)	粗良	1/2	推定口径10.8cm、底径4.0cm、器高5.5cm
412	笠置塚	FB上	216	磁器	肥前系	碗(くわらんぐ碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面部には草花文。底付部に網目が付いている。底部付近に墨跡がある。	輪調:96(5Y7-1)	胎土:灰(5Y7-1)	粗良	1/2	推定口径10.2cm、底径8.0cm、器高5.0cm
413	笠置塚	FB上+尾	222	磁器	肥前系	碗	口縁部	内外面施釉。外面部には草花文。底付部に網目が付いている。底部付近に墨跡がある。	輪調:96(10YR)	胎土:灰(10YR)	粗良	4/5	口徑12.0cm、底徑4.6cm、器高10.5cm
414	笠置塚	-	226	磁器	肥前系	碗	口縁部	内外面施釉。外面部には草花文。底付部に網目。	輪調:96(2.5YR7-1)	胎土:灰(2.5YR7-1)	粗良	3/8	推定口径11.6cm、底径4.5cm、器高5.1cm
415	笠置塚	SX1	223	磁器	肥前系	碗	口縁部～底部	内外面施釉。外面部には丸文。底付部は無釉。見込み部には火照り。	輪調:96(10YR)	胎土:灰(10YR)	粗良	2/3	底径9.15cm
416	笠置塚	F上	223	磁器	肥前系	碗	口縁部～底部	内外面施釉。外面部には火照り。底付部は無釉。見込み部には火照り。	輪調:明暦96(2.5YR7-1)	胎土:灰(2.5YR7-1)	粗良	2/3	底径4.85cm
417	笠置塚	E9H+石レフD西	224	磁器	肥前系	碗	口縁部	内外面施釉。外面部には丸文。底付部は無釉。見込み部には火照り。	輪調:96(10YR)	胎土:灰(10YR)	粗良	2/3	推定口径11.3cm、底径4.5cm、器高4.8cm
418	笠置塚	FB上+尾	227	磁器	肥前系	碗	口縁部	内外面施釉。外面部には火照り。底付部は無釉。見込み部には火照り。	輪調:96(2.5YR7-1)	胎土:灰(2.5YR7-1)	粗良	1/3	推定口径11.2cm、底径4.3cm、器高4.9cm
419	笠置塚	石レフC+モリヤD東	228	磁器	肥前系	碗	口縁部	内外面施釉。外面部には草花文。底付部は無釉。見込み部には火照り。	輪調:96(10YR)	胎土:灰(10YR)	粗良	1/2	推定口径11.6cm、底径4.2cm、器高4.9cm
420	笠置塚	FB上	230	磁器	肥前系	碗	口縁部～全体部	内外面施釉。口縁部に口白。外面部は二重組目文。	輪調:96(5Y7-1)	胎土:灰(5Y7-1)	粗良	1/10	推定口径8cm
421	笠置塚	FII	231	磁器	肥前系	碗	体部～底付	内外面施釉。外面部は丸文。底付部には網目。	輪調:96(3.5Y8-1)	胎土:灰(3.5Y8-1)	粗良	1/8	推定底径5.1cm
422	笠置塚	E9H+SX1	233	磁器	肥前系	碗	底付	内外面施釉。外面部には草花文。底付部には網目。	輪調:96(2.5YR7-1)	胎土:灰(2.5YR7-1)	粗良	1/5	底径4.1cm
423	笠置塚	SX1	232	磁器	肥前系	碗	体部	内外面施釉。外面部には山と樹籬。内面には網目。	輪調:96(10YR)	胎土:灰(10YR)	粗良	1/20	推定底径5.2cm
424	笠置塚	-	234	磁器	肥前系	碗	底付	内外面施釉。外面部には口白なし。	輪調:96(2.5YR7-1)	胎土:灰(2.5YR7-1)	粗良	1/4	底径3.55cm
425	笠置塚	-	235	磁器	肥前系	碗	底付	内外面施釉。外面部には網目。	輪調:96(2.5Y8-1)	胎土:灰(2.5Y8-1)	粗良	1/5	底径4.75cm
426	笠置塚	FB上	237	磁器	肥前系	碗	口縁部～全体部	内外面施釉。全面に花唐草文と丸文の組み合わせ。	輪調:96(2.5YR7-1)	胎土:灰(2.5YR7-1)	粗良	1/3	推定口径9.9cm
427	笠置塚	FB上	244	磁器	肥前系	碗	口縁部～全体部	内外面施釉。外面部にはよろけ編文。體部に體部網目。	輪調:96(10YR)	胎土:灰(10YR)	粗良	1/10	推定口径10.3cm
428	笠置塚	FGII	239	磁器	肥前系	碗	体部～底付	内外面施釉。外面部には網目で内面に凹凸があるが、花文と考えられる。	輪調:96(10YR)	胎土:灰(10YR)	粗良	1/3	底径4.8cm
429	笠置塚	FII	242	磁器	肥前系	碗	口縁部～全体部	内外面施釉。外面部には草花文。底付部に網目。	輪調:96(5Y8-1)	胎土:灰(5Y8-1)	粗良	1/4	推定口径12.0cm、推定底径5.0cm、器高4.6cm
430	笠置塚	II	251	磁器	肥前系	碗(底付碗)	体部～底付	内外面施釉。外面部には網目。	輪調:96(10YR)	胎土:灰(10YR)	粗良	1/8	底径5.2cm

第15表 出土遺物観察表⑨

番号	出土所	注記	測量番号	種類	器種	部位	文様・調整の特徴	色調		胎土の特徴	積存量	法量	
								外面	内面				
431	笠置層	SX1-+	246	磁器	肥前系 染付	碗(広東碗)	体部-底 部	内外面施釉。外面は半身唐草文と蘭葉文。 内面は足見部に草文と拂繩。	輪潤:96白 (7.5YR 5/1)	胎土:96白 (7.5YR 1/1)	精良	1/3	底径5.75cm
432	笠置層	-	247	磁器	肥前系 染付	碗(広東碗)	蓋	内外面施釉。外面は花押文と拂繩。	輪潤:95白 (7.5YR 1/1)	胎土:95白 (7.5YR 1/1)	精良	1/2	盤口径9.45cm
433	笠置層	-	258	磁器	肥前系 染付	碗(朝顔形 碗)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は画面の蘭葉文と蘭葉文。 高台内に豆化算字の款記。内面は無文。	輪潤:96白 (7.5YR 1/1)	胎土:96白 (7.5YR 1/1)	精良	1/3	盤口径10.2cm、底定 底径3.6cm、器高6.45cm
434	笠置層	DII-II	260	磁器	肥前系 染付	碗(大撇口 碗)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は底部付近に拂繩。 内面は梅文。	輪潤:96白 (10BG7/1)	胎土:96白 (N8/1)	精良	1/2	盤口径15.5cm、底定 底径4.4cm、器高5.5cm
435	笠置層	III	268	磁器	肥前系 染付	碗(撇付碗)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は区画された宝文。 内面は無文。	輪潤:96白 (5B7/1)	胎土:96白 (10YR 8/1)	精良	3/5	盤定口径9.3cm
436	笠置層 石レゾン 底	262	磁器	碗(小丸碗)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面に宝文(巻物の変形 文)と豆化算字。内面に拂繩。	輪潤:96白 (SGYV 1/1)	胎土:96白 (SGYV 1/1)	精良	1/3	盤定口径10.6cm		
437	笠置層	F8上	270	磁器	肥前系 染付	碗(小丸碗)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面にコシニエク印押によ る花押文。底部に豆化算字。内面は無文。	輪潤:洪黃 (5YR 8/1)	胎土:96白 (7.5YR 1/1)	精良	2/5	盤口径15.2cm、底定底 底径5.2cm、器高10.9cm
438	笠置層	III	264	磁器	肥前系 染付	碗(小丸碗)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は長枝竹。高台内に豆 名(豆)の款記。内面は無地だが、足 部に部分多量の着色。	輪潤:96白 (2.5GV 1/1)	胎土:96白 (7.5YR 1/1)	精良	1/2	盤口径9.9cm、底定底 底径5.1cm、器高4.4cm
439	笠置層	III	265	磁器	肥前系 染付	碗(小丸碗)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は庭園風の風景文。 内面は無文。	輪潤:96白 (N8/1)	胎土:96白 (10YR 8/1)	精良	1/3	盤口径10.2cm、底定 底径2.3cm、器高4.95cm
440	笠置層	F8上	266	磁器	肥前系 染付	碗(小丸碗)	体部-底 部	内外面施釉。外面は草文(篆文?)。内 面は無文。	輪潤:96白 (10BG7/1)	胎土:96白 (N8/1)	精良	1/3	底径3.9cm
441	笠置層	DII	269	磁器	肥前系 染付	碗(小丸碗)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は口縁部に変形蘭葉文。 内面見込部に蘭葉文と蘭葉文。	輪潤:96白 (10YR 8/1)	胎土:96白 (10YR 8/1)	精良	3/5	口9.9cm、底径7.7cm、 器高5.1cm
442	笠置層	SX1+S28	271	磁器	肥前系 染付	碗(小丸碗)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は幾何形の菱形と圓形。 内面見込部に蘭葉文と蘭葉文。	輪潤:96白 (SGYV 1/1)	胎土:96白 (10YR 8/1)	精良	1/2	盤口径10.0cm、底定底 底径5.1cm、器高4.3cm
443	笠置層	SX1+F8 上	277	磁器	肥前系 染付	豆點形(藤 跡)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は草文。底部付近に 拂繩。内面は無文。	輪潤:明灰 (10BG7/1)	胎土:96白 (N8/1)	精良	1/4	盤口径10.6cm、底定 底径5.5cm、器高4.4cm
444	笠置層	F8+P8E 上	312	磁器	肥前系 染付	筒形碗(漆 舟)	口縁部-底 部	内外面施釉。底部付近に松葉文。	輪潤:96白 (10BG7/1)	胎土:96白 (N8/1)	精良	1/1	口10.7cm、底径3.05cm、 器高6.0cm
445	笠置層	+F8E	314	磁器	肥前系 染付	筒形碗(漆 舟)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は青磁輪。内面は口縁部 と底部に拂繩。外面は口縁部に花文。	輪潤:96白 (7.5YR 1/1)	胎土:96白 (3/7/1)	精良	1/6	盤定口径8.85cm
446	笠置層	石レゾン 下	315	磁器	肥前系 染付	筒形碗(漆 舟)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は熱子地花文。内面は 底部に拂繩。	輪潤:96白 (2.5GV 1/1)	胎土:96白 (7.5YR 1/1)	精良	1/3	盤定口径7.4cm
447	笠置層	C9上	284	磁器	肥前系 染付	豆皿	口縁部-底 部	つまみが造りである。内外面施釉。外 面の口縁部は草文と拂繩で、内面は色絵によ る口文と拂繩。	輪潤:明灰 (7.5YR 1/1)	胎土:96白 (10YR 8/1)	精良	1/3	底部径8.8cm
448	笠置層	SZ1 + SX1	280	磁器	肥前系 染付	鉢(蓋付 鉢)	内外面施釉。見込部に口縁部と蓋。	輪潤:明灰 (SGYV 1/1)	胎土:96白 (SGYV 1/1)	精良	9/10	口径10.1cm、底径3.7cm、 器高2.7cm	
449	笠置層	F8上	287	磁器	肥前系 染付	鉢(蓋付鉢)	蓋部	内外面施釉。外面は庭園文。内面は無文。	輪潤:96白 (SGYV 1/1)	胎土:96白 (7.5YR 1/1)	精良	1/1	つまみ径3.3cm、底部径 12.6cm、器高5.5cm
450	笠置層	DII	282	磁器	肥前系 染付	鉢(蓋付鉢)	蓋部	内外面施釉。外面は松木文。内面見込部に 刷毛目地の進文。内面見込部に詳細不明 (横手文?)の支文あり。	輪潤:明灰 (SGYV 1/1)	胎土:96白 (N8/1)	精良	1/3	盤定つまみ径4.2cm、基 部径9.4cm、器高6cm
451	笠置層	里+石レ ゾンC4H	288	磁器	肥前系 染付	鉢(蓋付鉢)	蓋部	内外面施釉。外面は草花文。高台内に壁 絞り回しらき。蓋部は口縁部に刷毛目地。 見込部に刷毛目地と蓋。	輪潤:明灰 (7.5YR 1/1)	胎土:96白 (7.5YR 1/1)	精良	2/3	盤定つまみ径5.5cm、基 部径10.0cm、器高 2.8cm
452	笠置層	F10H Ⅱ	285	磁器	肥前系 染付	碗(蓋付碗)	蓋部	内外面施釉。外面は文字のようなものが 刷毛目地で、刷毛目地が斜め。内面は無文。	輪潤:明灰 (N8/1)	胎土:96白 (N8/1)	精良	1/5	盤口径4.0cm
453	笠置層	F8上+ G4E	320	磁器	肥前系 染付	小杯(猪口 杯)	口縁部-底 部	内外面無文。内面は白磁のうなぎを 模す。	輪潤:96白 (2.5GV 1/1)	胎土:96白 (7.5YR 1/1)	精良	1/2	盤口径14.7cm、底定底 底径4.3cm、器高6.0cm
454	笠置層	F8上	321	磁器	肥前系 染付	小杯(猪口 杯)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は口縁部に刷毛目地の うなぎ。内面無文。	輪潤:96白 (2.5YR 2/1)	胎土:96白 (7.5YR 1/1)	精良	2/5	盤口径14.5cm、底定底 底径4.0cm、器高4.3cm
455	笠置層	F10W上	323	磁器	肥前系 染付	小杯(猪口 杯)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は口縁部付近からし き文様。内面無文。蓋部に砂押付。	輪潤:96白 (7.5YR 1/1)	胎土:96白 (7.5YR 1/1)	精良	2/5	盤口径17.0cm、底定底 底径6.2cm、器高11.5cm
456	笠置層	DII	327	磁器	肥前系 染付	小杯(猪口 杯)	口縁部-底 部	内外面施釉。内面無文。白磁のうなぎを 模す。	輪潤:96白 (10YR 1/1)	胎土:96白 (10YR 1/1)	精良	3/5	盤口径15.0cm、底定底 底径6.15cm、器高3.2cm
457	笠置層	石レゾン 東	317	磁器	肥前系 染付	小杯(漏斗 碗)	底部付近	内外面施釉。内面は口縁部と漏斗部に 刷毛目地。	輪潤:96白 (5B7/1)	胎土:96白 (5YR 1/1)	精良	1/8	盤定口径7.6cm
458	笠置層	SZ1-1	319	磁器	肥前系 染付	小杯(漏斗 碗)	底部付近	内面は口縁部に草文。底部に刷毛目地。 見込部に透かし竹文。	輪潤:明灰青 (10BG7/1)	胎土:96白 (N8/1)	精良	1/4	口径10.6cm、底径4.8cm、 器高4.3cm
459	笠置層	III	289	磁器	肥前系 染付	瓶(五寸瓶) 底	口縁部-底 部	口縁部-底 部	輪潤:明灰青 (10BG7/1)	胎土:96白 (N8/1)	精良	1/2	口径12.0cm、底径7.5cm、 器高4.75cm
460	笠置層	III	302	磁器	肥前系 染付	瓶(五寸瓶)	口縁部-底 部	内外面施釉。内面には刷毛目地の口縁部 と下1から口縁部に草文。	輪潤:明灰青 (SGYV 1/1)	胎土:96白 (SGYV 1/1)	精良	3/5	盤口径14.4cm、底定底 底径8.0cm、器高9.9cm
461	笠置層	III	295	磁器	肥前系 染付	瓶(五寸瓶)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は草文。内面は草木文。 刷毛目地の口縁部。	輪潤:明灰青 (10BG7/1)	胎土:96白 (N8/1)	精良	1/5	盤口径14.0cm、底定底 底径8.3cm、器高4.15cm
462	笠置層	III	305	磁器	肥前系 染付	瓶(八角瓶)	口縁部-底 部	内外面施釉。外面は立植による円形容文。 口縁部には口縁部。外側側面には幾何文さ れた透かし文。高台内底部に刷毛目地。	輪潤:明灰青 (7.5YR 1/1)	胎土:96白 (N8/1)	精良	1/3	盤定底径6.4cm、底定底 底径6.4cm、器高2.95cm
463	笠置層	石レゾン 中+石レ ゾンC4H 2nd	300	磁器	肥前系 染付	瓶(花瓶)	口縁部-底 部	内外面施釉。内面には纏状の松竹梅文。 外側側面には幾何文。内面には成化款の乳丁 と下1から口縁部に草文。	輪潤:明灰青 (7.5YR 1/1)	胎土:96白 (N8/1)	精良	4/5	口径10.6cm、底定底 底径6.1cm、器高2.8cm
464	笠置層	III	304	磁器	肥前系 染付	瓶	口縁部-底 部	内外面施釉。内面見込部に纏状と植物らし き文様。	輪潤:96白 (SGYV 1/1)	胎土:96白 (SGYV 1/1)	精良	1/20	-
465	笠置層	S2	303	磁器	肥前系 染付	瓶	口縁部-底 部	内外面施釉。内面見込部に繁枝文。同じ文 様が瓶2つで出土。	輪潤:96白 (2.5GV 1/1)	胎土:96白 (10YR 8/1)	精良	1/6	盤定底径6.1cm
466	笠置層	F11南上	306	磁器	肥前系 染付	小瓶	口縁部-底 部	内外面施釉。外面に幾何学的な草文。	輪潤:洪黃 (7.5YR 3/0)	胎土:96白 (N8/1)	精良	1/8	盤定口径9.0cm、底定底 底径4.3cm、器高2.75cm
467	笠置層	-	310	磁器	肥前系 染付	小瓶(紅瓶)	底部付近	内面に紅色に虹がかかるに透かしている。	輪潤:96白 (N8/1)	胎土:96白 (N8/1)	精良	1/3	底径2.55cm

第16表 出土遺物観察表⑩

番号	出土場所	記注	測量番号	種類	器種	部位	文様・調整の特徴	色調		胎土の特徴	積存量	法量	
								外側	内面				
468	笠置層	D9II	339	磁器	肥前系 兔付	口縁部 外側(口付)	内外面施釉。内面の口縁部分には無施釉。 外側(口付)文字。	輪調:96白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/20	-	
469	笠置層	I9I	273	磁器	肥前系 兔付	躰(内部)	口縁部 内外面施釉。外側には無施釉文。内面には無施釉。 内部には無施釉。	輪調:96白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	2/5	推定口径15.0cm、推定 底径7.6cm、高さ6.1cm	
470	笠置層	II	275	磁器	肥前系 兔付	口縁部 全体	4ヶ所完全な口縁部。 内外面施釉。外側には幾何学文の区画割りに文花。内面無文。	輪調:96白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/6	推定口径14.2cm	
471	笠置層	-	276	磁器	肥前系 兔付	躰(内部)	口縁部延びるV字角部。 内外面施釉。外側には七文字と草花文。内面は口縁部に白文花の区割り草文。	輪調:96白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/8	-	
472	笠置層	F8上+III	329	磁器	肥前系 兔付	私鉢	口縁部延びるV字角部が一部無施釉。外側には無施釉。内面にはV字角部が一部無施釉があるが、欠損しており認 別不能。	輪調:明灰白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	3/5	推定口径8.7cm、底径4.2 cm、高さ5.7cm	
473	笠置層	SX1	330	磁器	肥前系 兔付	私鉢	口縁部延びるV字角部。内面には無施釉部があるが、欠損しており認 別不能。	輪調:96白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	3/4	推定口径8.6cm、底径3.5 cm、高さ5.7cm	
474	笠置層	SX1+S2	332	磁器	肥前系 兔付	私鉢	口縁部延びるV字角部。 内外面施釉。外側には口縁部側に横草文。 内部には無施釉。	輪調:明灰白 (10BY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/5	推定口径9.6cm	
475	笠置層	III	333	磁器	肥前系 兔付	私鉢	环一部 全体	内外面施釉。外側には口縁部側に赤・青・ 緑の色斑。内面文。	輪調:明青白 (587-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/2	推定底径3.7cm
476	笠置層	-	341	磁器	肥前系 兔付	躰?	体部-底付付近 全体	内外面施釉。外側には植物文。底部付近に 無施釉。	輪調:96白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/8	-
477	笠置層	SX1	342	磁器	肥前系 兔付	瓶?	体部-底付付近 全体	内外面施釉。外側には丸文に横のような花 の文様。	輪調:明灰白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/8	-
478	笠置層	FG8	340	磁器	肥前系 兔付	瓶	瓶一部 全体	内外面施釉。外側には無施釉。外側には植物文。 内部には無施釉。	輪調:明灰白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/3	推定口径5.1cm
479	笠置層	V	346	磁器	肥前系 兔付	等高	口縁部 全体	内外面施釉。外側には口縁部に赤文。内面には無施 釉。	輪調:明灰白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/6	推定口径6.6cm
480	笠置層	E10 II	343	磁器	肥前系 兔付	萩原付	内外面明灰色地で無施。高台部には無施 釉。	輪調:明灰白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/10	推定底径5.25cm	
481	笠置層	SX1+SU2	326	磁器	肥前系 兔付	瓶(他)	口縁部 全体	内外面施釉。外側には無施釉。内面には口縁部の基盤。3.5と同様。	輪調:明灰白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/5	口径6.8cm
482	笠置層	19+C9 III	327	磁器	肥前系 兔付	甕	口縁部 全体	外側表面のような花文を施す。内面には無施 釉。	輪調:明灰白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/8	口径13cm
483	笠置層	22	255	磁器	肥前系 兔付	瓶	口縁部 全体	内外面施釉。外側には無施釉。内面には口縁部 に斜行文。	輪調:明灰白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/8	推定口径9.9cm
484	笠置層	II	254	磁器	肥前系 兔付	瓶	口縁部 全体	内外面施釉。外側には無施釉。内面には見足部 にはやけた開窓。	輪調:明オリ アブー (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/8	推定口径8.4cm
485	笠置層	石レフC 付	253	磁器	肥前系 青白染 付	瓶	体部-底 全体	内外面施釉。外側には青白染。内面には見足部 に無施釉とコニャック印押の五角形。	輪調:明灰白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/5	推定底径4.2cm
486	笠置層	II	286	磁器	肥前系 青白染 付	瓶(直付碗)	蓋部	内外面施釉。外側には無施釉。高台部には此 後文。	輪調:明灰白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/2	推定つまみ付4.1cm、基 部厚9.6cm、高さ35cm
487	笠置層	石レフD 付中付	195	磁器	肥前系 青白染 付	瓶	体部	内外面に施釉。見足部には青白染。成 形部付部には無施釉で修復してある。	輪調:オリエ ンタル (25GY8-1)	内面:96白 (N8W-1)	粗良	1/10	推定底径6.6cm
488	笠置層	E9III	187	陶器	肥前系 青白染 付	高台付瓶	底部付部	青白染釉。内外面に施釉。高台部には内 部に斜行文。	輪調:オリエ ンタル (10BY6-2)	肚上:96白 (N8W-1)	粗良	1/2	推定底径12.4cm
489	笠置層	F10西上	392	陶器	麻塗系	瓶	底部	内外面施釉。内面に見足部は瓶の目皿調 整で付着する。高台付部は内外面無施。	輪調:明灰白 (25GY8-1)	肚上:96白 (N8W-2)	粗良	1/4	底径42cm
490	笠置層	-	366	陶器	麻塗系	土瓶	底部	内外面施釉。内面内外面無施。内外面内 外回転ナデ。	輪調:明灰白 (25GY8-2)	肚上:96白 (N8W-2)	粗良	2/5	-
491	笠置層	石レフ 1付	304	陶器	麻塗系	瓶(灯明 付)	底部	内外面に無施釉。内面には回転ナデの痕 跡が残る。	輪調:明灰白 (25GY8-2)	肚上:96白 (N8W-2)	粗良	1/8	推定底径5.6cm
492	笠置層	E9II	303	陶器	麻塗系	瓶	底部	内外面には回転ナデの後に施釉。内面 の粗面は成化後。	輪調:暗 (10YR4-4)	肚上:96白 (N8W-2)	粗良	1/8	底径5.9cm
493	笠置層	E9II	385	陶器	麻塗系	ヒラコ	体部-底 全体	内外面無施。底部の心部に注4mmの穿孔。	-	肚上:96白 (N8W-2)	含有物はほとんど無 い。	1/2	底径22cm
494	笠置層	石レフB D付	307	陶器	麻塗系	瓶	底部付部	内外面には回転ナデの後に施釉。	輪調:明灰白 (10YR3-2)	肚上:96白 (N8W-1)	2mm以下の乳白色 灰褐色。表面を多く含む	1/6	推定底径10.9cm
495	笠置層	F11南上	366	陶器	麻塗系	瓶	底部付部	内外面には回転ナデの後に施釉。	輪調:法灰 (5YR4-3)	肚上:96白 (N8W-1)	1mm以下の乳白色 灰褐色。表面を多く含む	1/8	推定底径22.5cm
496	笠置層	345+D9 II	149	陶器	星地不 明	罐詰	口縁部	内外面には回転ナデによる調整。内面 には9条文を単位とする縫目。口縁部には 4条文の四瓣。	輪調:明灰白 (25YR5-6)	内面:96白 (N8W-1)	含有物は多く含む。	-	推定口径35.2cm
497	笠置層	D9II	160	陶器	唐津 系?	罐詰	口縁部 全体	内外面には回転ナデの後に施釉。内面には 横目が施す。瓶部に口印あり。	輪調:明灰白 (25YR5-6)	内面:96白 (N8W-1)	4mm以下の乳白色 2mm以下の黑色。	1/10	推定口径32.4cm
498	笠置層	F8上	156	陶器	唐津 系?	罐詰	口縁部 全体	内外面には回転ナデによる調整。内面 には9条文を単位とする縫目。	輪調:明灰白 (25YR5-6)	内面:96白 (N8W-1)	4mm以下の乳白色 0.5mm以下の透明光 沢紋を含む	1/10	推定口径27.6cm
499	笠置層	F8上	150	陶器	星地不 明	罐詰	口縁部 全体	内外面には回転ナデによる調整。内面 には7条文を単位とする縫目。注口は内側 に入り込んでいる。	輪調:暗 (25YR6-6)	内面:96白 (N8W-1)	1mm以下の黒色 4mm以下の乳白色	-	推定口径23.7cm
500	笠置層	石レフC 付	148	陶器	星地不 明	罐詰	口縁部 全体	内外面には回転ナデによる調整。内面 には10条文を単位とする縫目。口縁部には 2条文の四瓣。	輪調:赤褐 (10YR4-3)	内面:赤褐 (N8W-1)	3mm以下の赤 色。2mm以下の黑色 光沢紋を含む	1/16	-
501	笠置層	石レフD 付中付	151	陶器	星地不 明	罐詰	口縁部 全体	内外面には回転ナデによる調整。内面 には10条文を単位とする縫目。口縁部には 2条文の四瓣。	輪調:赤褐 (10YR4-3)	内面:赤褐 (N8W-1)	3mm以下の赤 色。2mm以下の黑色 光沢紋を含む	-	-

第17表 出土遺物観察表⑪

番号	出土場所	注記	測定番号	種類	器種	部位	文様・調整の特徴	色調		胎土の特徴	積存量	法量		
								外面	内面					
502	笠置層	F8上	147	陶器	両面不 明	縦跡	口縁部一 体部	内外面には主に回転ナデによる調整。内面 は10度を採用する様子。	外面:に赤い 茶褐色(2SYR 5/4)	内面:に赤い 茶褐色(2SYR 5/4)	1.5mm以下のに赤い 茶褐色。黑色光沢釉を含む。	1/10		
503	笠置層	石レフC D9付 +F10西 上	163	陶器	両面不 明	縦跡 系?	縦跡	底部	内外面には輪軸ナデ。外面下部には工具によ るナデ。内面には放射状の擦り痕が確認さ れる。底面はあり底。	外面:に赤い 茶褐色(2SYR 5/4)	内面:に赤い 茶褐色(2SYR 5/4)	2mm以下の灰白色 釉。2段階の茶色光 沢釉を含む。	1/3	推定底径9.9cm
504	笠置層	石レフC	153	陶器	店津 系?	縦跡	底部	内外面には輪軸ナデ。内面には一部工具によ るナデ。外面上には一部工具による擦り痕が確認 される。底面はなし。	輪軸:オリ エー (2SYR 4/3)	胎土:に赤 い茶褐色(3SYR 4/3)	2mm以下の灰白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	1/6	推定底径12.8cm	
505	笠置層	—	162	陶器	両面不 明	縦跡 系?	縦跡	底部	内外面には輪軸ナデ。内面には10度以上の傾斜が見 られる。底面はあり底。	外面:に赤 い茶褐色(2SYR 6/4)	内面:に赤 い茶褐色(2SYR 6/4)	2mm以下の灰白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	1/2	推定底径10.8cm
506	笠置層	F8上	159	陶器	両面不 明	縦跡	底部	内外面には回転ナデによる調整。内面 には12度を採用する放射状の擦り痕。 底部はナデ調整。	外面:赤褐色 (10R 4/3)	内面:赤褐色 (10R 4/3)	5mm以下の乳白色釉 を含む。		推定底径16.1cm	
507	笠置層	F8上	348	陶器	両面不 明	蓋付碗	蓋部	内外面には白磁調の施釉。無文。	輪調:96%白 (2SYR 8/1)	胎土:灰白 (10YR 8/1)	精良	7/8	輪調3.9cm、基部厚9.2 cm、器高29.0cm、器底6.1cm	
508	笠置層	F8上	347	磁器	両面不 明	碗	口縁部一 体部	内外面には白磁調の施釉。無文。高台内面 では輪軸。蓋付部のみ無釉。	輪調:96%白 (2SYR 8/1)	胎土:灰白 (10YR 8/1)	精良	1/3	推定口径10.6cm、推定 底径4.0cm、器高6.1cm	
509	笠置層	石レフD 東	350	陶器	店津系	碗	体部一成 形	外面には白磁調の施釉。外面上に一部擦 り痕がある。	輪調:96%白 (2SYR 8/1)	胎土:灰白 (10YR 8/1)	5mm以下の乳白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	1/3	底径4.6cm	
510	笠置層	D9付+EB II	354	陶器	店津系	碗	体部一成 形	外面は輪軸(直し)・無文。体部下半 から底部にかけて無釉。	輪調:96%白 (2SYR 7/2)	胎土:灰白 (10YR 8/1)	5mm以下の乳白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	1/5	推定底径3.6cm	
511	笠置層	E2II	355	陶器	両面不 明	碗	口縁部一 体部	内外面には白磁調(貢入多し)・無文。	輪調:96%白 (2SYR 7/2)	胎土:灰白 (10YR 8/1)	5mm以下の乳白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	1/8	推定口径11.5cm	
512	笠置層	F8II	360	陶器	両面不 明	碗	口縁部一 体部	内外面には白磁調(貢入多し)・無文。	輪調:96%白 (2SYR 6/4)	胎土:灰白 (10YR 8/1)	5mm以下の乳白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	1/10	推定口径11.9cm	
513	笠置層	39付石レ フD東	365	陶器	両面不 明	碗?水差?	口縁部一 体部	外面上に灰褐色施釉。回転ナデ跡が残 る。	輪調:96%白 (2SYR 6/3)	胎土:灰白 (10YR 8/1)	5mm以下の乳白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	1/10	推定口径10.6cm	
514	笠置層	39 II	365	陶器	両面不 明	碗?水差?	底部付近	外面上に灰褐色施釉。付近と高台内面 には回転ナデ跡が残る。	輪調:96%白 (2SYR 6/3)	胎土:灰白 (10YR 8/1)	5mm以下の乳白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	1/10	推定底径5.6cm	
515	笠置層	40E	362	陶器	両面不 明	碗	口縁部一成 形成形部	内外面には白磁調の施釉(貢入多し)・無文。	輪調:96%白 (2SYR 6/1)	胎土:灰白 (10YR 8/1)	5mm以下の乳白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	2/3	推定口径11.7cm、推定 底径5.0cm	
516	笠置層	石レフD II	370	陶器	京・伊 賀系?	碗	体部一成 形	外面上には白磁調施釉。蓋付部のみ無釉。 見込みは他の口縁部と同様。	輪調:96%白 (2SYR 5/2)	胎土:灰白 (10YR 8/1)	含有物はほとんど無 い。	1/4	推定底径4.6cm	
517	笠置層	SX1	369	陶器	両面不 明	鉢	口縁部一 体部	内外面には白磁調施釉。蓋付部のみ無釉。 見込みは他の口縁部と同様。	輪調:96%白 (2SYR 5/6)	胎土:灰白 (10YR 8/1)	含有物はほとんど無 い。	9/10	口径16.0cm、器高7.7cm、 器底5.5cm	
518	笠置層	E6II	189	陶器	両面不 明(輪 跡有)	香炉	口縁部	輪跡青釉。内外面には輪跡。内面の下手 は無釉。18度同一側傾か。	輪調:96%白 +A1K (10YR 6/2)	胎土:浅黄褐 (10YR 6/2)	精良	1/5	推定口径11.5cm	
519	笠置層	—	188	陶器	両面不 明(輪 跡有)	香炉	体部一成 形	輪跡青釉。内外面には輪跡。内面の下手 は無釉。18度同一側傾か。	輪調:96%白 +A1K (10YR 6/2)	胎土:浅黄褐 (10YR 6/2)	5mm以下の乳白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	1/3	底径4.4cm	
520	笠置層	SX1	384	陶器	両面不 明	鉢?	底部付近	内外面には灰褐色施釉。内面見込みにカクア付帯。	輪調:96%白 (10YR 6/3)	胎土:灰白 (10YR 6/3)	5mm以下の乳白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	1/10	推定底径8.0cm	
521	笠置層	SX1	374	陶器	両面不 明(輪 跡有)	木柄	体部一成 形	内外面には輪跡(貢入多い)だが、底部付近 は無釉。背面には回転ナデにより擦り痕が残 す。	輪調:オリー ン (2SYR 5/1)	胎土:灰白 (10YR 7/1)	5mm以下の乳白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	1/2	推定底径10.4cm	
522	笠置層	—	378	陶器	両面不 明(輪 跡有)	火入	口縁部一 体部	外面には施釉。底部付近は無釉。内面は口縁 部付近のみ施釉。外側に発見付。	輪調:オリー ン (2SYR 5/1)	胎土:灰白 (10YR 7/1)	5mm以下の乳白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	1/4	推定底径4.8cm	
523	笠置層	石レフC 西	377	陶器	両面不 明(輪 跡有)	火入	口縁部一 体部	外面には施釉。底部付近は無釉。内面は口縁 部付近のみ施釉。見込みは発見付を差し置いて 字體で書かれていた。	輪調:96%白 (10YR 7/1)	胎土:灰白 (10YR 7/1)	5mm以下の乳白色 釉。1段階の茶色光 沢釉を含む。	1/4	推定底径4.8cm	
524	笠置層	SX1	380	陶器	両面不 明	私化軌	底部一成 形	内外面施釉。付近は無釉。底部に口皿記 手が2つ。	輪調:オリー ン (2SYR 5/3/D)	胎土:灰白 (10YR 6/1)	含有物はほとんど無 いが、微細な黒色土 粒を含む。	4/5	口径9.6cm	
525	笠置層	SX1	382	磁器	両面不 明	木手(第 2流?)	体部	外面施釉。内面には無釉。	輪調:96%白 (10YR 6/1)	胎土:灰白 (10YR 6/1)	精良	1/3		
526	笠置層	F8上	383	陶器	京・西	手取	口縁部	内面施釉。外面は灰土の刷毛目。外面上 に3段の凹凸施釉。	輪調:96%白 +A1K (10YR 6/3)	胎土:灰白 (10YR 6/2)	1~3mm程の灰白 色、暗赤褐色土粒を わずかに含む。	1/20	-	
527	笠置層	SII	401	瓦質陶 器	鉢	口縁部	内面には回転ナデ。外面上にタキによる文様。 402と同一側付。	輪調:96%白 (10YR 6/1)	胎土:灰白 (10YR 6/1)	1mm程の暗赤褐色土 粒を多く含む。	1/20			
528	笠置層	SD	298	瓦質陶 器	鉢(六角鉢)	体部一成 形	内外面無釉。内面は回転ナデの後に工具 によるナデ。外面上に判読不能の印字。	輪調:96%白 (10YR 6/2)	胎土:灰白 (10YR 6/2)	2mm以下の褐色。1 mm程の黒褐色・灰 褐色(N5/5)。	2/5			
529	笠置層	II	403	土加賀 土器	焰焰	口縁部一 体部	内外面には回転ナデ	に赤い 色(5YR 6/4)	胎土:灰白 (10YR 6/6)	1~3mm程の褐色。1 mm程の黒褐色・灰 褐色(N5/5)。	1/10	推定口径33.0cm 幅、全高5cmを含む。		

第17表 出土遺物観察表⑫

## (1)石器

番号	実測番号	出土場所	注記	種類	器種	石材	法 量			
							最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
65	451	SF3	SF3 北	石器	砥石	頁岩	3.75	4.3	0.6	12.5
74	454	SF4	SF4 南	石器	敲石	砂岩	10.8	4.0	3.2	231.4
75	456	SF4	SF4 南	石器	敲石	砂岩	15.6	4.3	3.2	310.8
129	441	SZ1	SZ1	石器	砥石	リソイド岩(陶石)	5.9	5.1	1.6	86.8
162	447	SZ6	SZ6	石器	砥石	砂岩	8.1	2.9	2.0	70.1
163	459	SZ6	SZ6	石器	敲石	砂岩	9.7	14.6	3.6	738.6
167	460	SZ7	SZ7	石器	敲石	砂岩	8.8	16.1	5.0	1026.7
547	470	包含層	F8 上	石器	火打石	乳白色玉髓	1.4	1.2	1.0	2.3
548	445	包含層	F8 上	石器	硯	頁岩?	5.7	3.2	0.8	16.0
549	457	包含層	S12	石器	石臼	凝灰岩	11.6	2.2	1.1	173.7
550	458	包含層	186	石器	石臼	凝灰岩	21.6	10.3	5.8	1750.0
551	462	包含層	-	石器	石臼上	凝灰岩	20.0	10.5	12.4	3868.0
552	463	包含層	-	石器	石臼	凝灰岩	30.5	21.4	11.5	7200.0
575	467	包含層	E11 V	石器	石鑿	チャート	2.5	2.0	0.35	1.0
576	461	包含層	F11南上	石器	石鍤	砂岩	3.8	7.1	1.3	63.2
577	453	包含層	石レフD東上	石器	砥石	リソイド岩(陶石)	6.25	2.2	0.85	19.1
578	450	包含層	SC44	石器	砥石	凝灰岩	5.5	4.0	1.0	27.9
579	449	包含層	石レフB-1付	石器	砥石	頁岩	11.3	4.7	2.0	115.0
580	444	包含層	石レフD中付	石器	砥石	砂岩	12.0	3.2	2.4	181.2
581	446	包含層	D9 III	石器	敲石	砂岩	6.7	3.6	1.4	60.0
582	448	包含層	250	石器	砥石	凝灰岩	7.8	3.3	1.7	68.8
583	442	包含層	FG III	石器	砥石	リソイド岩(陶石)	8.9	7.0	4.5	288.1
584	443	包含層	SX1	石器	砥石	砂岩	7.5	4.5	2.5	163.1
585	455	包含層	E9 III	石器	敲石	砂岩	11.7	3.7	1.9	134.0
586	452	包含層	E9 III	石器	砥石	砂岩	15.0	4.8	3.0	390.0

## (2)その他

番号	実測番号	出土場所	注記	種類	部位	特徴	法 量			
							最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
62	406	SF1	SF1	錢貨	-	寛永通宝	2.3	2.3	0.1	2.3
553	407	包含層	F10 西	錢貨	-	寛永通宝	2.2	2.2	0.1	2.0
554	405	耕土中	ハイ土	彈管	吸口	複位の刻痕あり	4.9	0.9	0.1	6.3

## (3)瓦

番号	実測番号	出土場所	注記	種類	器種	文様・鉢など	法 量			
							最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
63	408	SF1	SF1	瓦	陶瓦(鬼瓦?)	渦巻き状の刻文	6.5	6.2	2.4	94
73	510	SF4	SF4 下	瓦	陶瓦(鬼瓦?)	渦巻き状の刻文	7.8	14.4	5.4	369
130	421	SZ1	SZ1	瓦	軒瓦	陰刻の菊花文	8.6	8.6	2.5	150
131	420	SZ1	SZ1	瓦	軒瓦	陽刻の菊花文	11.1	3.3	3.4	242
132	423	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	印刻あり判読不能	5.3	7.1	1.7	58
133	425	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	鉢「…次」	7.7	7.8	1.9	139
134	426	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	鉢「…小平次」	8.3	10.2	1.7	141
135	429	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	鉢「城・崎小平次」	12.5	13.7	1.6	305
136	428	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	鉢「…小平次」	7.1	9.2	1.7	136
137	424	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	鉢「…小平次」	9.6	7.2	1.9	140
138	430	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	印刻あり判読不能	20.7	15.6	1.9	851
139	427	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	鉢「…次」	7.7	6.6	1.9	96
140	431	SZ1	SZ1	瓦	平瓦(角部?)	なし	10.1	12.3	1.8	257
141	432	SZ1	SZ1	瓦	袖瓦	なし	25.5	16.9	1.7	998
142	433	SZ1	SZ1	瓦	丸瓦	なし	22.2	13.0	1.5	816
143	422	SZ1	SZ1	瓦	陶瓦(鬼瓦?)	渦巻き状の刻文	8.7	9.3	5.3	275
530	414	包含層	SH1	瓦	軒瓦	菊文と唐草文	8.9	16.4	2.5	868
531	410	包含層	SH1	瓦	軒枝瓦	菊文と唐草文	8.3	12.8	2.1	338
532	412	包含層	SH1	瓦	軒丸瓦	巴文と珠文	12.2	9.1	1.8	78
533	411	包含層	SH1	瓦	軒丸瓦	巴文と珠文	8.8	8.5	1.9	85
534	409	包含層	SH1	瓦	軒丸瓦	巴文と珠文	6.8	12.4	2.4	226
535	413	包含層	SH1	瓦	軒丸瓦	巴文と珠文	8.7	8.7	2.1	151
536	416	包含層	SH1	瓦	軒枝瓦	唐草文	19.9	20.4	2.0	930
537	417	包含層	SH1	瓦	軒枝瓦	唐草文	22.7	18.7	1.8	770
538	428	包含層	-	瓦	平瓦	鉢「…小平次」	4.7	9.1	1.6	66
539	419	包含層	SH2	瓦	平瓦	なし	7.6	9.6	1.8	157
540	415	包含層	SH2	瓦	軒枝瓦	唐草文	14.5	19.5	1.8	382
541	437	包含層	-	瓦	平瓦	綾割り	9.7	13.2	1.7	168
542	436	包含層	石レフD西	瓦	平瓦	鉢「久島…」	15.2	16.6	1.8	453
543	439	包含層	-	瓦	平瓦	鉢「城・崎小平次」	13.2	13.8	1.8	314
544	435	包含層	SX1	瓦	丸瓦	なし	20.2	12.6	1.6	805
545	418	包含層	SH2	瓦	丸瓦	なし	13.9	12.5	2.9	440
546	438	包含層	SX1	瓦	筋瓦	宝珠文	18.9	15.7	4.9	799

第19表 出土遺物計測表

## 第IV章 自然科学分析

曾井第2遺跡の発掘調査では、井戸跡や池跡と考えられる遺構が出土した。これらの遺構の性格や用途および当時の周囲の植生・環境を把握する目的で、花粉分析、寄生虫卵分析、珪藻分析、植物珪酸体分析、樹種同定、フローテーションによる微細自然遺物の検出及び分析作業を行った。分析作業は、花粉分析（第1節）・寄生虫卵分析（第2節）・珪藻分析（第3節）・植物珪酸体分析（第4節）・SH1出土木製品の樹種同定（第5節）を株式会社古環境研究所が<sup>a</sup>、SF1・5出土木製品の樹種同定（第6節）を株式会社吉田生物研究所が<sup>b</sup>、フローテーション作業による微細自然遺物の分析作業（第7節）を埋蔵文化財センターで行った。

### 第1節 花粉分析

株式会社 古環境研究所

#### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

#### 2. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

#### 3. 結果

##### （1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉29、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉28、シダ植物胞子2形態の計64である。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属單維管束亜属、スギ、イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科、ヤマモモ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属-マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、モチノキ属、カエデ属、ムクロジ属、ブドウ属、グミ属、カキ属、モクセイ科、ツツジ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属  
〔草本花粉〕ガマ属-ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、ハス、キンポウゲ属、アブラナ科、ワレモコウ属、ノササゲ、フウロソウ属、アカバナ科、アリノトウゲサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、キツネノマゴ、オオバコ属、ヘクソカズラ属、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕单条溝胞子、三条溝胞子

## (2) 花粉群集の特徴

- 1) 池状遺構 (SZ1, 池跡?) 南地点の底面 (試料3) では、花粉がほとんど検出されなかった。埋土下部 (試料2) では、樹木花粉ではスギが優勢であり、マツ属複維管束亜属、シイ属-マテバシイ属、クリ、コナラ属アカガシ亜属、カエデ属、ブドウ属、ツツジ科などが伴われる。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が優勢であり、カヤツリグサ科、セリ亜科、アブラナ科、イボクサ、ミズアオイ属などが伴われる。埋土上部 (試料1) では、シダ植物胞子の占める割合が高くなり、カヤツリグサ科、アブラナ科が増加している。  
北地点の埋土下部 (試料2) と埋土上部 (試料1) でも、おおむね同様の結果であるが、樹木花粉のブドウ属が特徴的に検出され、グミ属、カキ属なども出現している。また、草本花粉ではハス、ソバ属も認められた。アブラナ科やソバ属は虫媒花であり、風媒花と比較して現地性が高く花粉の生産量も少ないことから、他の分類群と比較して過大に評価する必要がある。
- 2) 1号井戸跡 (SF1) 埋土 (試料1) では、樹木花粉ではスギが優勢であり、マツ属複維管束亜属、クリ、シイ属-マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属などが伴われる。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が優勢であり、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アブラナ科、ソバ属などが低率に伴われる。
- 3) 2号井戸跡 (SF2) 地山層 (試料4) および埋土底部 (試料3) では、花粉がほとんど検出されなかった。埋土下部 (試料2) では花粉密度が低いが、草本花粉ではイネ属型を含むイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科が優勢であり、タンボボ亜科、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、セリ亜科、ソバ属などが伴われる。樹木花粉ではシイ属-マテバシイ属、クリ、マツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属などが認められる。埋土上部 (試料1) では樹木花粉の占める割合が高く、スギ、マツ属複維管束亜属、シイ属-マテバシイ属が優勢であり、クリなどが伴われる。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が優勢であり、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科、アブラナ科、ソバ属などが伴われる。
- 4) 3号井戸跡 (SF3) 埋土 (試料1) では、樹木花粉の占める割合が高く、スギ、マキ属が優勢であり、クリ、シイ属-マテバシイ属などが低率に伴われる。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が優勢であり、ヨモギ属、アブラナ科などが低率に伴われる。
- 5) 5号井戸跡 (SF5) 埋土 (試料1, 2) および井戸外 (試料3) とも、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が優勢であり、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アブラナ科などが伴われる。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属が比較的多く、クリ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属

ーマテバシイ属などが伴われる。

6) 6号井戸跡 (SF6) 埋土 (試料1) では、花粉が検出されなかった。

#### 4. 花粉分析から推定される植生と環境

(1) 池状遺構 (SZ1, 池跡?) 遺構埋土の堆積当時は、遺構内もしくはその近辺にイネ科、カヤツリグサ科、セリ亞科、イボクサ、ミズアオイ属、ハスなどの水生植物が生育していたと考えられ、池状の水域の存在が示唆される。また、周辺では水田稲作をはじめソバやアブラナ科などの畑作が行われていたと推定される。アブラナ科には、アブラナ (ナタネ)、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多くの栽培植物が含まれている。

森林植生としては、周辺にスギを主体としてマツ類、シイ類、カシ類、クリなども見られる森林が分布していたと推定される。スギは植栽や造林、マツ類は植栽や二次林が想定される。また、遺構の近隣にはブドウ属が生育していたと考えられ、カエデ属、ツツジ科、グミ属、カキ属などの存在も認められた。

(2) 井戸跡 (SF1, SF2, SF3, SF5, SF6) 1号井戸跡 (SF1) と2号井戸跡 (SF2) の埋土の堆積当時は、周辺で水田稲作をはじめソバやアブラナ科などの畑作が行われていたと考えられ、遺跡周辺にはスギを主体としてマツ類、シイ類、カシ類、クリなども見られる森林が分布していたと推定される。3号井戸跡 (SF3) でも、おむね同様の状況であったと考えられるが、マキ属が特徴的に認められ、近隣に生育していた可能性が考えられる。

5号井戸跡 (SF5) の埋土の堆積当時は、イネ科、アザケ科-ヒユ科、ヨモギ属などの草本類が優勢な日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺にはマツ類、シイ類、カシ類、クリなどが分布していたと推定される。また、その他の地点で優勢なスギがあまり見られないことから、他の遺構とは時期や性格が異なる可能性が考えられる。

6号井戸跡 (SF6) では、花粉が検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

#### 文献

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262.

鳥倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p.

中村純 (1973) 花粉分析、古今書院、p.82-110.

中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究、13,p.187-193.

中村純 (1977) 稲作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p.21-30.

中村純 (1980) 日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.

表1 曾井第2遺跡における珪藻分析結果

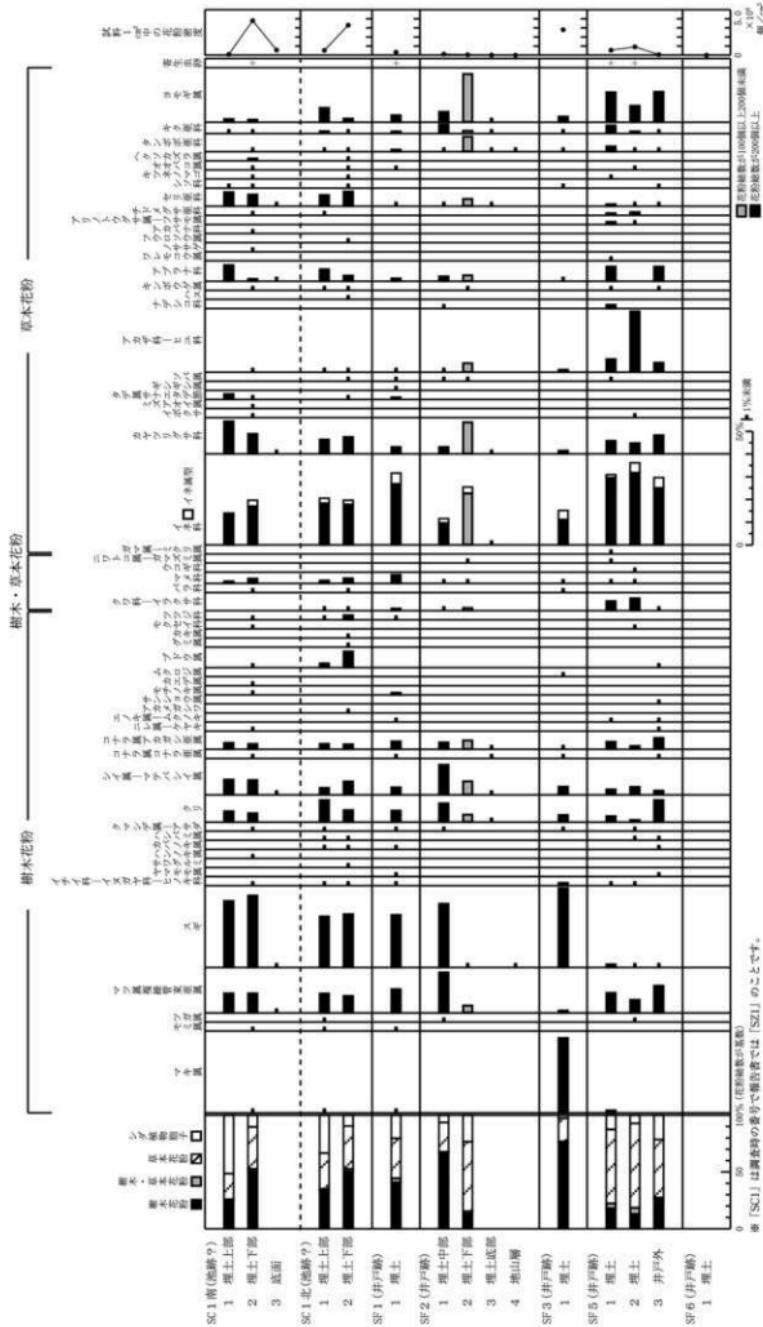
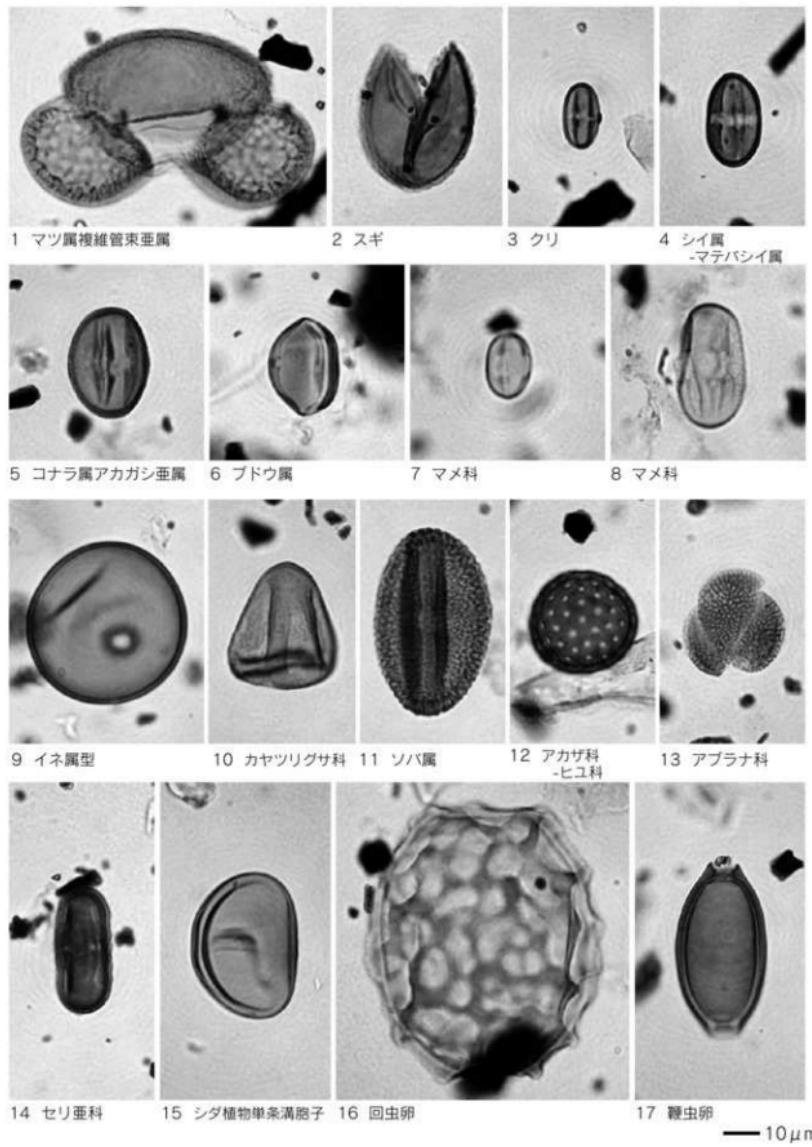


図1 曽井第2遺跡における花粉ダイアグラム

曾井第2遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵



## 第2節 寄生虫卵分析

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いて、トイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり、寄生虫卵の種類から、摂取された食物の種類や、そこに生息していた動物種を推定することも可能である。

### 2. 方法

寄生虫卵の分離抽出は、微化石分析法を基本にして、以下の手順で行った。

- 1) サンプルを採量
- 2) 脱イオン水を加えて搅拌
- 3) 篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去
- 4) 25% フッ化水素酸を加えて30分静置（2～3度混和）
- 5) 遠心分離（1500rpm、2分間）による水洗の後にサンプルを2分割
- 6) 片方にアセトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 檢鏡・計数

### 3. 結果および考察

分析の結果、池状遺構（SZ1、池跡？）南地点の埋土下部（試料2）からカビラリアとマンソン裂頭条虫卵、SF1（井戸跡）の埋土（試料1）からカビラリア、SF5（井戸跡）の埋土（試料1,2）から回虫卵と鞭虫卵が検出された。いずれも少量であり、明らかな消化残査も認められないことから、集落周辺における通常の生活汚染程度とみなされ、トイレ遺構との関連性は低いと考えられる。

回虫と鞭虫はヒトの寄生虫であり、カビラリアとマンソン裂頭条虫卵は主に鳥およびヒト以外の哺乳類の寄生虫である。回虫と鞭虫は、どちらも中間宿主を必要としない種類であり、虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。寄生虫に起因する回虫症や鞭虫症は、腹痛を主とする消化器病症がおこり、多数寄生の場合は症状が重い。

### 文献

- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.
- 金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物・医動物学、新版臨床検査講座、8、医歯薬出版、p.9-55.
- 金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫、藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－、奈良国立文化財研究所、p.14-15.
- 金原正明（1999）寄生虫、考古学と動物学、考古学と自然科学、2、同成社、p.151-158.

表1 曽井第2遺跡における寄生虫卵分析結果

学名	和名	SZ1南			SZ1北			SF1			SF2			SF3			SF5			SF6			
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	1	
Helminth eggs	寄生虫卵																						
Acarina(lumbrosidae)	回虫卵																			1	3		
Trichuris(trichuris)	鞭虫卵																						1
Capillaria sp.	カビラリア			1																			
Dipylidobothrium massoni	マンソン裂頭条虫卵			1																			
Total	計	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	
Helminth egg frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の寄生虫卵密度	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	2.8	0.0	0.0	0.0	0.0	
					×10												×10	×10					
Digestion remains	明らかな消化残査	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	

### 第3節 珪藻分析

株式会社 古環境研究所

#### 1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する单細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壤、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

#### 2. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1 cm<sup>3</sup>を秤量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晚放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗（5～6回）
- 4) 残渣をマイクロビペットでカバーグラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 檢鏡・計数

検鏡は、生物顯微鏡によって600～1500倍行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

#### 3. 結果

##### (1) 分類群

試料から出現した珪藻は、中-真塩性種（汽-海水生種）8分類群、貧-中塩性種（淡-汽水生種）1分類群、貧塩性種（淡水生種）113分類群である。分析結果を表1に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図1～図5に示す。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性についてはLowe (1974) や渡辺 (2005)，陸生珪藻については小杉 (1986)，環境指標種群の海水生種から汽水生種については小杉 (1988)，淡水生種については安藤 (1990) の記載を参照した。

##### 〔貧-中塩性種〕

Rhopalodia gibberula

##### 〔貧塩性種〕

Amphora montana, Anomoeoneis styriaca, Caloneis hyalina, Caloneis lauta, Denticula sp., Diploneis spp., Diploneis subovalis, Eunotia bilunaris, Eunotia flexuosa, Eunotia minor, Frustulia vulgaris, Gomphonema acuminatum, Gomphonema augur v. turris, Gomphonema gracile, Gomphonema mexicanum, Gomphonema parvulum, Gomphonema spp., Gomphonema truncatum, Gyrosigma spp., Hantzschia amphioxys, Navicula confervacea, Navicula contenta, Navicula elginensis, Navicula gallica, Navicula goeppertiana, Navicula gregaria, Navicula kotschyii, Navicula mutica, Navicula spp., Navicula submolesta, Navicula veneta, Neidium spp., Nitzschia brevissima, Nitzschia debilis, Nitzschia nana, Nitzschia palea, Nitzschia spp., Pinnularia acrosphaeria, Pinnularia appendiculata, Pinnularia borealis, Pinnularia gibba, Pinnularia

*intermedia*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia schroederii*, *Pinnularia* spp., *Pinnularia subcapitata*, *Pinnularia viridis*, *Rhopalodia gibba*, *Stauroneis smithii*, *Surirella angusta*, *Surirella ovata*

## (2) 珪藻群集の特徴

- 1) 池状構造 (SZ1, 池跡?) 図1: 南地点の底面 (試料3) では珪藻が検出されなかった。埋土下部 (試料2) では真・好止水性種、陸生珪藻、真・好流水性種がほぼ同じ割合であり、流水不定性種も検出された。真・好止水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor*, 真・好流水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Navicula elginensis*, 陸生珪藻の *Navicula mutica*, *Navicula contenta*, *Navicula confervacea*が多く、貧-中塩性種 (淡-汽水生種) の *Rhopalodia gibberula*なども認められる。埋土上部 (試料1) では陸生珪藻の占める割合が高く、*Navicula mutica*を主に、*Navicula contenta*, *Hantzschia amphioxys*, *Pinnularia subcapitata*などが検出された。北地点の埋土下部 (試料2) と埋土上部 (試料1) でも、南地点の埋土とおおむね同様の結果である。
- 2) 1号井戸跡 (SF1) 図2: 埋土 (試料1) では、陸生珪藻の占める割合が高い。陸生珪藻では *Navicula confervacea*, *Navicula contenta*, *Navicula mutica*が多い。流水不定性種では *Navicula goeppertiana*, *Navicula* spp.など、真・好止水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia flexuosa*, 真・好止水性種の *Gomphonema truncatum*などが検出された。また、真・好流水性の *Gomphonema parvulum*も低率に検出され、貧-中塩性種 (淡-汽水生種) の *Rhopalodia gibberula*も認められた。
- 3) 2号井戸跡 (SF2) 図3: 地山層 (試料4) と埋土底部 (試料3) では、珪藻がほとんど検出されなかつた。埋土下部 (試料2) では、陸生珪藻の占める割合が高い。陸生珪藻では *Navicula mutica*, *Hantzschia amphioxys*, *Amphora montana*, *Navicula contenta*, *Pinnularia subcapitata*が多い。流水不定性種では *Pinnularia* spp., *Nitzschia palea*, 真・好止水性種では *Pinnularia microstauron*が低率に検出された。埋土中部 (試料1) では、珪藻があまり検出されなかつた。
- 4) 3号井戸跡 (SF3) 図4: 埋土 (試料1) では、陸生珪藻の占める割合が高い。陸生珪藻では *Caloneis hyalina*, *Nitzschia debilis*, *Amphora montana*, *Navicula contenta*, *Navicula mutica*, *Nitzschia brevissima*, *Hantzschia amphioxys*が多い。また、流水不定性種の *Nitzschia palea*などが低率に検出され、貧-中塩性種 (淡-汽水生種) の *Rhopalodia gibberula*も認められた。
- 5) 5号井戸跡 (SF5) 図5: 埋土 (試料1) では、陸生珪藻の占める割合が極めて高い。陸生珪藻では *Navicula contenta*が卓越し、*Navicula mutica*, *Nitzschia debilis*, *Pinnularia subcapitata*などが伴われる。埋土 (試料2) と井戸外 (試料3) では、陸生珪藻の *Amphora montana*, *Navicula contenta*が多く、*Navicula mutica*, *Nitzschia debilis*, *Pinnularia subcapitata*などが伴われる。流水不定性種では、*Nitzschia palea*が多く検出された。
- 6) 6号井戸跡 (SF6): 試料1では珪藻が検出されなかつた。

## 4. 珪藻分析から推定される堆積環境

- (1) 池状構造 (SZ1, 池跡?): 埋土下部の堆積当時は、水の流れ込みがあり水草が生育する水城から湿地、および湿润な陸域を伴う多様な環境が推定され、池状の水域およびその周囲の環境が示唆される。埋土上部の堆積当時は、埋土の堆積などにより水域が減少し、湿润な陸域が優勢になったと考えられる。

遺構底面では、珪藻が検出されなかつた。珪藻が検出されない原因としては、珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境であったこと、水流による淘汰を受けたこと、土層の堆積速度が速かったことなどが考えられる。

- (2) 井戸跡 (SF1, SF2, SF3, SF5, SF6) 珪藻は、細胞内に葉緑体を持ち光合成を行っていることから、

表1 曾井第2遺跡における珪藻分析結果

\* 「SC」は現在の最高で報告書では「SCL」のことである。

井戸内部の暗いところでは生育が困難である。したがって、遺構埋土から検出された珪藻については、遺構外からの混入（流入）の可能性が考えられる。なお、陸生珪藻については、井戸壁面上部の比較的明るく湿ったところに生育していたものが井戸内に堆積した可能性も考えられる。

6号井戸跡（SF 6）では、珪藻が検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては、前述のような要因の他に、珪藻の生育に適さない暗く密閉された環境であった可能性も考えられる。

## 文献

Asai,K.& Watanabe,T.(1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p.35-47.

K. Krammer & H. Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae · 1-4.

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.

小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.

小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.1-20.

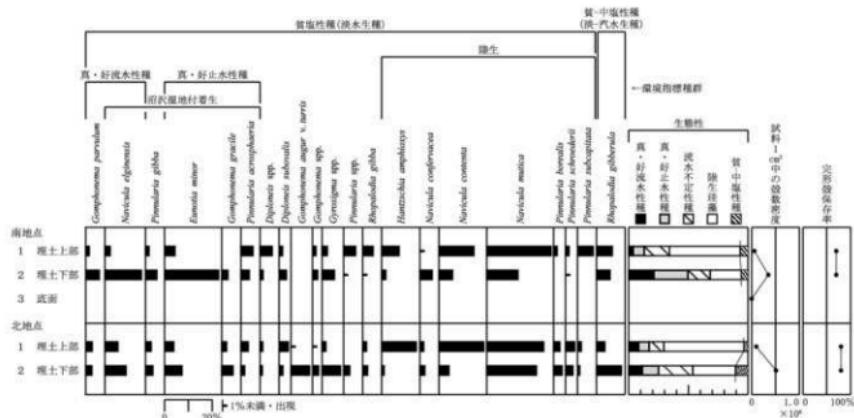


図1 曽井第2遺跡、SZ1（池跡？）における主要珪藻ダイアグラム

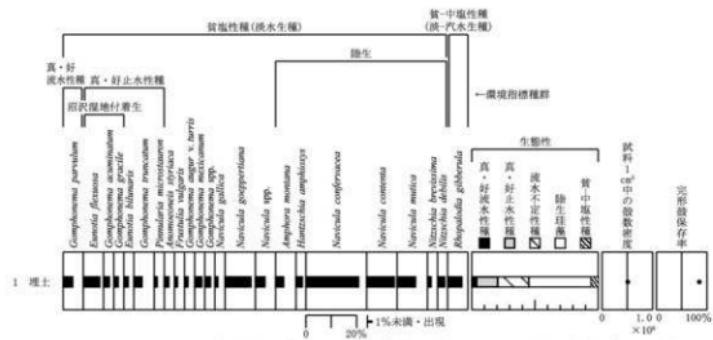
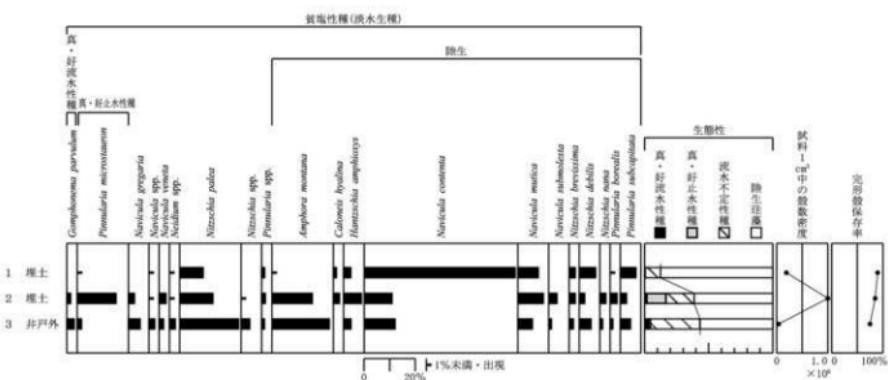
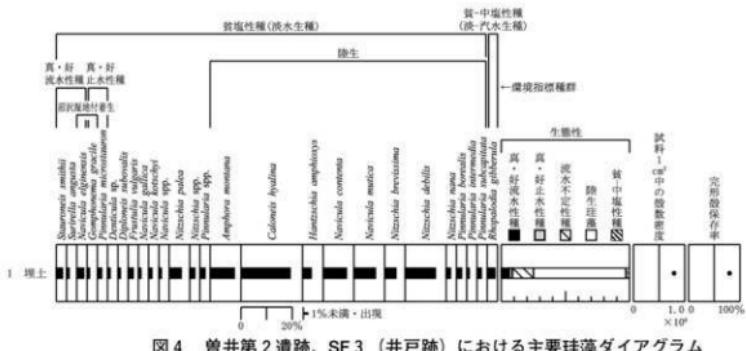
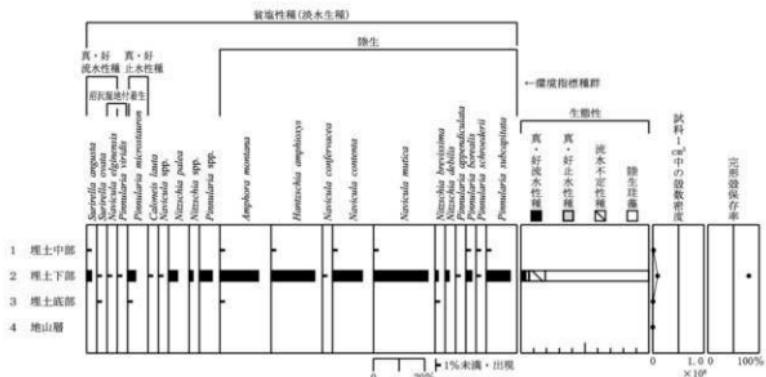
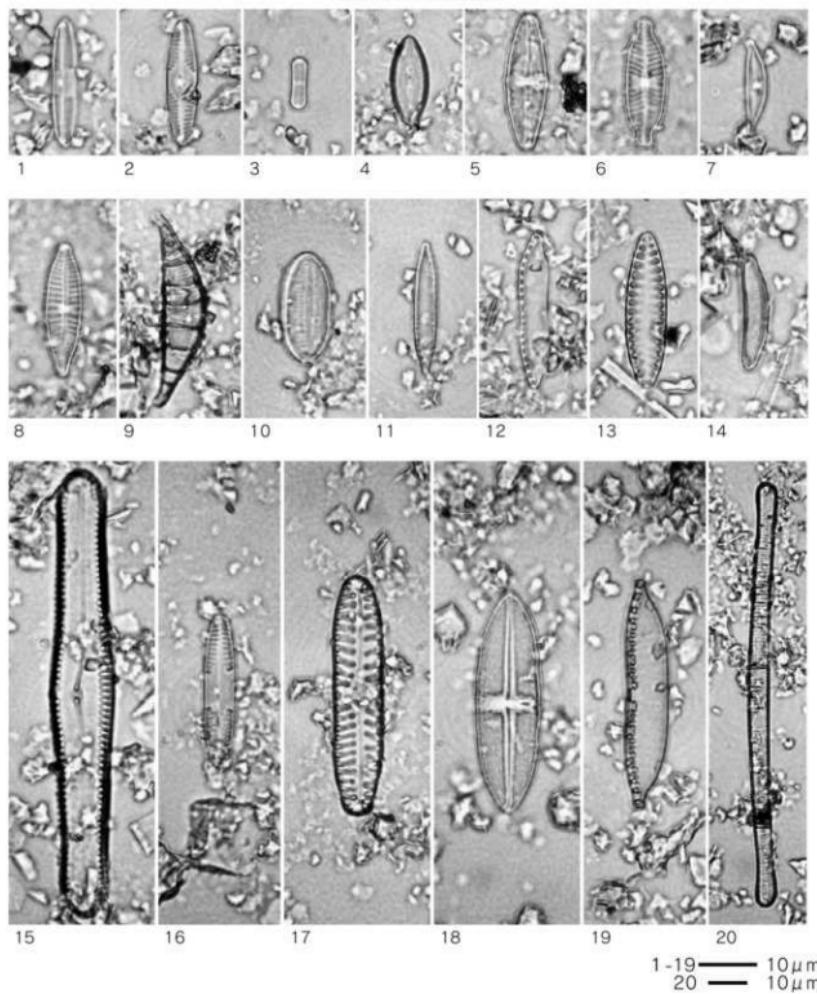


図2 曽井第2遺跡、SF1（井戸跡）における主要珪藻ダイアグラム



曾井第2遺跡の珪藻



1. *Caloneis hyalina* 2. *Pinnularia microstauron* 3. *Navicula contenta* 4. *Navicula confervacea* 5. *Navicula mutica*  
 6. *Navicula elginensis* 7. *Amphora montana* 8. *Gomphonema parvulum* 9. *Rhopalodia gibberula* 10. *Nitzschia debilis*  
 11. *Nitzschia palea* 12. *Nitzschia brevissima* 13. *Surirella angusta* 14. *Eunotia minor* 15. *Pinnularia acrosphaeria*  
 16. *Pinnularia subcapitata* 17. *Pinnularia borealis* 18. *Navicula goeppertiana* 19. *Hantzschia amphioxys* 20. *Eunotia flexuosa*

## 第4節 植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_4$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。

### 2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスピーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10–5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.91、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、ミヤコザサ節は0.30である（杉山, 2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

### 3. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕イネ、ムギ類（穂の表皮細胞）、キビ族型、シバ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）、ジュズマ属

〔イネ科—タケ亜科〕メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科—その他〕表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科、その他

## (1) 植物珪酸体の検出状況

- 1) 池状遺構 (SZ1, 池跡?)：南地点の遺構底部（試料3）では、樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）やマンサク科（イスノキ属）などが検出されたが、いずれも少量である。埋土下部（試料2）では、イネが比較的多く検出され、スキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型なども認められた。イネの密度は3,700個/gと比較的高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを上回っている。樹木（照葉樹）ではマンサク科（イスノキ属）が多く検出され、クスノキ科、ブナ科（シイ属）なども認められた。埋土上部（試料1）でも、おおむね同様の結果であるが、イネの密度は2,800個/gと比較的低い値である。
- 北地点の埋土（試料1, 2）では、南地点の埋土とおおむね同様の結果であり、各試料からイネが検出された。イネの密度は埋土上部（試料1）では4,200個/gと比較的高い値であり、埋土下部（試料2）では1,400個/gと比較的低い値である。また、少量ながらマダケ属型やシバ属が認められた。
- 2) 1号井戸跡 (SF1)：埋土（試料1）では、イネが比較的多く検出され、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型なども認められた。イネの密度は3,600個/gと比較的高い値である。樹木（照葉樹）ではマンサク科（イスノキ属）が多く検出され、ブナ科（シイ属）なども認められた。
- 3) 2号井戸跡 (SF2)：地山層（試料4）では、スキ属型やウシクサ族Aなどが検出されたが、いずれも少量である。樹木（照葉樹）ではマンサク科（イスノキ属）が多く検出され、ブナ科（シイ属）、アワブキ科なども認められた。埋土底部（試料3）では、ジュズママ属、ネザサ節型などが出現し、マンサク科（イスノキ属）は減少している。埋土下部（試料2）では、イネが6,100個/gと多量に検出された。埋土中部（試料1）では、植物珪酸体は検出されなかった。
- 4) 3号井戸跡 (SF3)：埋土（試料1）では、イネが9,000個/gと多量に検出され、スキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、および樹木（照葉樹）のマンサク科（イスノキ属）なども検出された。
- 5) 5号井戸跡 (SF5)：埋土（試料1, 2）では、イネが多量に検出され、ムギ類（穂の表皮細胞）、スキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、マダケ属型なども認められた。イネの密度は5,500個/gおよび6,200個/gといずれも高い値である。また、ムギ類（穂の表皮細胞）の密度は700個/gおよび1,400個/gと比較的低い値である。樹木（照葉樹）ではマンサク科（イスノキ属）が多く検出され、ブナ科（シイ属）なども認められた。井戸外（試料3）でも、おおむね同様の結果であるが、ムギ類（穂の表皮細胞）は認められなかった。イネの密度は3,500個/gと比較的高い値である。
- 6) 6号井戸跡 (SF6)：埋土（試料1）では、マンサク科（イスノキ属）が多く検出され、ブナ科（シイ属）、クスノキ科、アワブキ科なども認められた。イネ科ではキビ族型、ウシクサ族Aなどが検出されたが、いずれも少量である。

## 4. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

- (1) 池状遺構 (SZ1, 池跡?)：遺構埋土の堆積当時は、周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。また、遺構周辺で敷物や藁製品など何らかの形でイネ藁が利用されていたことも想定される。

当時の遺跡周辺には、イスノキ属、シイ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布しており、部分的にメダケ属（メダケ節やネザサ節）やマダケ属、スキ属、シバ属なども見られたと推定される。イネ科の草本類が少ないとから、遺構の周辺は比較的管理の行き届いた環境であった可能性が考えられる。マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。

(2) 井戸跡 (SF 1, 2, 3, 5, 6)：遺構埋土の堆積当時は、周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。また、遺構周辺で敷物や藁製品など何らかの形でイネ藁が利用されていたことも想定される。5号井戸跡 (SF 5) の埋土では、少量ながらムギ類（穎の表皮細胞）が認められた。当時は稲作とともにムギ類などを栽培する畑作も行われていたと推定される。遺跡周辺の状況は、池状遺構 (SZ 1) とおおむね同様であったと考えられる。

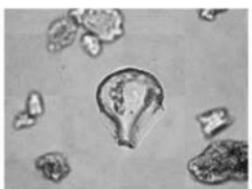
#### 文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、31, p.70-83.
- 杉山真二（1990）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史、第四紀研究、38(2), p.109-123.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オバール）、考古学と植物学、同成社, p.189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オバール分析法の基礎的研究(I)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オバール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オバール分析による水田址の探し－、考古学と自然科学、17, p.73-85.

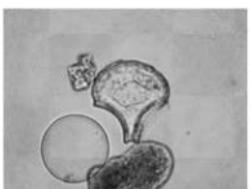
表1 宮崎県、曾井第2遺跡における植物珪酸体分析結果



曾井第2遺跡の植物珪酸体 (プラント・オバール)



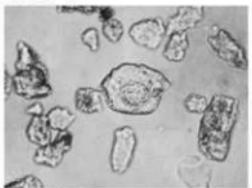
イネ  
SC1北 2



イネ  
SF5 3



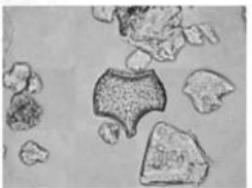
ムギ類 (穂の表皮細胞)  
SF5 2



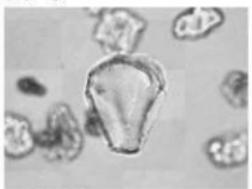
ジュズダマ属  
SF2 3



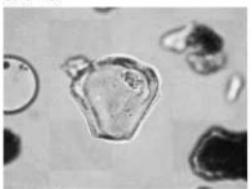
スキ属型  
SF5 2



シバ属  
SC1北 2



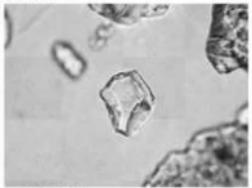
メダケ属型  
SC1南 1



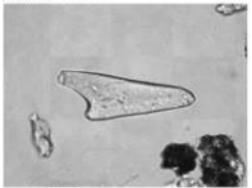
ネザサ属型  
SC1南 1



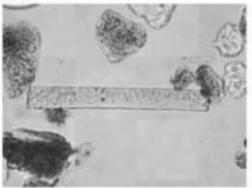
ネザサ属型  
SF2 2



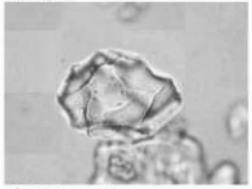
マダケ属型  
SC1北 1



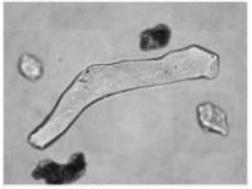
表皮毛起源  
SC1北 1



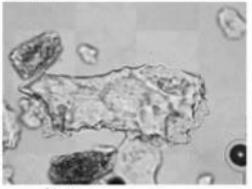
棒状珪酸体  
SC1南 1



ブナ科 (シイ属)  
SC1北 2



マンサク科 (イスノキ属)  
SC1北 1



アワブキ科  
SC1南 3

— 50 μm —

\*「SC1」は調査時の番号で報告書では「SZ1」のことです。

## 小 結 [第1節～第4節]

株式会社 古環境研究所

### (1) 池状遺構 (SZ1, 池跡?)

珪藻分析では、水の流れ込みがあり水草が生育する水域から湿地、および湿润な陸域を伴う多様な環境が推定され、池状の水域およびその周囲の環境が示唆される。花粉分析でも、イネ科、カヤツリグサ科、セリ亞科、イボクサ、ミズアオイ属、ハスなどの水生植物が生育する池状の水域の存在が示唆される。当時の遺構周辺では、水田稲作をはじめソバ、アブラナ科などを栽培する畑作が行われていたと考えられる。イネの植物珪酸体については、遺構周辺で利用されていた藁製品に由来する可能性も考えられる。

遺跡周辺にはスギを主体としてマツ類、シイ類、カシ類、イスノキ属、クスノキ科、クリなども見られる森林が分布していたと考えられ、スギは植栽や造林、マツ類は植栽や二次林が想定される。また、遺構の近隣にはブドウ属が生育していたと考えられ、カエデ属、ツツジ科、グミ属、カキ属などの存在も認められた。

埋土下部では、少量ながらカビラリアとマンソン裂頭条虫の寄生虫卵分析が検出された。これらは、主に鳥およびヒト以外の哺乳類の寄生虫である。

### (2) 井戸跡 (SF1, SF2, SF3, SF5, SF6)

各遺構の埋土の堆積当時は、周辺で水田稲作をはじめムギ類、ソバ、アブラナ科などの畑作が行われていたと考えられ、遺跡周辺にはスギを主体としてマツ類、シイ類、カシ類、イスノキ属、クスノキ科、クリなども見られる森林が分布していたと推定される。3号井戸跡 (SF3) では、マキ属が特徴的に認められ、近隣に生育していた可能性が考えられる。

5号井戸跡 (SF5) では、アザレ科-ヒュウ科、ヨモギ属などの草本類が優勢な日当たりの良い比較的乾燥した環境が示唆され、スギがあまり見られないことから、他の遺構とは時期や性格が異なる可能性が考えられる。また、同遺構では回虫卵と鞭虫卵が検出された。いずれも少量であり、明らかな消化残渣も認められることから、集落周辺における通常の生活汚染程度とみなされ、トイレ遺構との関連性は低いと考えられる。

## 第5節 樹種同定（1）

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2. 方法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 3. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

シイ属 *Castanopsis* ブナ科 図版1・2

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属には、スタジイとツブラジイがあり、どちらも本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

### 4. 所見

分析の結果、SH1の柱穴から出土した柱材2点は、いずれもシイ属と同定された。シイ属は、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

### 文献

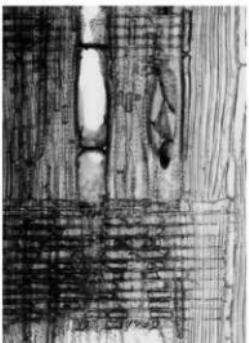
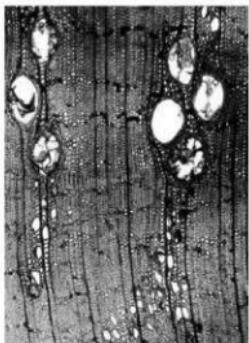
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100。

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296

表1 曽井第2遺跡における樹種同定結果

試料		結果（学名／和名）	
SH 1	柱穴出土材：大	<i>Castanopsis</i>	シイ属
SH 1	柱穴出土材：小	<i>Castanopsis</i>	シイ属

曾井第2遺跡の木材

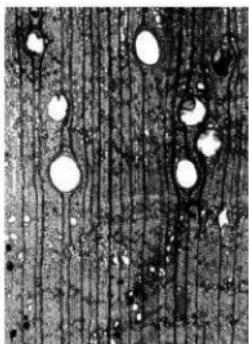


横断面 : 0.5mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

1. 大① シイ属



横断面 : 0.5mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

2. 小② シイ属

## 第6節 樹種同定（2）

株式会社 吉田生物研究所

### 1. 試料

試料は曾井第2遺跡から出土した建築部材4点、雑具3点、用途不明品1点の合計8点である。

### 2. 觀察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

### 3. 結果

樹種同定結果（針葉樹3種、広葉樹2種、タケ類1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

#### 1) マツ科モミ属 (*Abies sp.*) (遺物No.4) (写真No.4)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1~4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

#### 2) コウヤマキ科コウヤマキ属 (*Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.*) (遺物No.2,3) (写真No.2,3)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや緩やかで晩材部の幅は極めて狭い。柾目では放射組織の分野壁孔は小型の窓状で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。コウヤマキは本州(福島以南)、四国、九州(宮崎まで)に分布する。

#### 3) スギ科スギ属 (*Cryptomeria japonica D.Don*) (遺物No.1,5,6A) (写真No.1,5,6A)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

#### 4) クスノキ科クスノキ属 (*Cinnamomum Camphora Presl*) (遺物No.8) (写真No.8)

散孔材である。木口では中庸の道管 (~200 μm) が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に取り囲んでおり、その中に一見小さな道管と見間違えるほどの油細胞（樟脳油貯蔵細胞）がある。柾目では道管は單穿孔と側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はレンズ状の大型壁孔が階段状に並んでいる。板目では放射組織は1~3細胞列、高さ~800 μmからなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞に変化したものがよく見られる。クスノキは本州(関東以西)、四国、九州に分布する。

#### 5) クスノキ科ハマビワ属 (*Litsea sp.*) (遺物No.7) (写真No.7)

散孔材である。木口では道管 (~100 μm前後) は単独ないし2~3個が放射状または塊状に複合する。柾目では道管は壁がやや厚く、單穿孔と階段穿孔を有する。軸方向柔細胞は顯著な周囲状となり、柔細胞の一部は油細胞となる。道管放射組織間壁孔はふるい状で異性である。板目では放射組織は1~3細胞列、高さ~1mm以下からなる。油細胞は多く、そのほとんどは軸方向柔細胞にもみられる。ビスフレックがみられる。ハマビワ属にはハマビワ、バリバリノキ、カゴノキ、アオモジがあり、本州(千葉県以西)、四国、九州、琉球に分布する。

#### 6) イネ科タケ亜科 (*Subfam. Bambusoideae*) (遺物No.6B) (写真No.6B)

横断面では維管束がみられる。放射断面、接線断面では厚壁組織の組織やその他の基本組織の細胞が稜軸方向に配列している。タケ亜科は熱帯から暖帯、一部温帯に分布する。

#### 【参考文献】

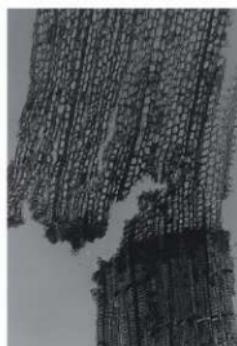
- 島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版 (1988)  
島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社 (1982)  
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I ~ V」京都大学木質科学研究所 (1999)  
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編 I・II」保育社 (1979)  
深澤和三「樹体の解剖」海青社 (1997)  
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)  
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

#### 【使用顕微鏡】

Nikon MICROFLEX UFX-DX Type 115

No.	品名	樹種
1	SF1 出土木製棒板（板状）	スギ科スギ属スギ
2	SF5 出土木製隅柱（柱状）	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
3	SF5 出土木製横棟（板状）	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
4	SF5 出土木製棒板（板状）	マツ科モミ属
5	SF5 出土木製釣瓶（円形底板）	スギ科スギ属スギ
6	SF5 出土A木製釣瓶（側板） B タガ（タガ）	スギ科スギ属スギ イネ科タケ亜科
7	SF5 出土木製自在鉤	クスノキ科ハマビワ属
8	SZ1 出土小型木製品（下駄？）	クスノキ科クスノキ属クスノキ

曾井第2 遺跡出土木製品同定表



木口×40

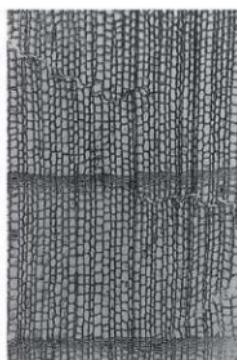


柾目×100



板目×40

No-1 スギ科スギ属スキ



木口×40



柾目×100



板目×40

No-2 コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ



木口×40

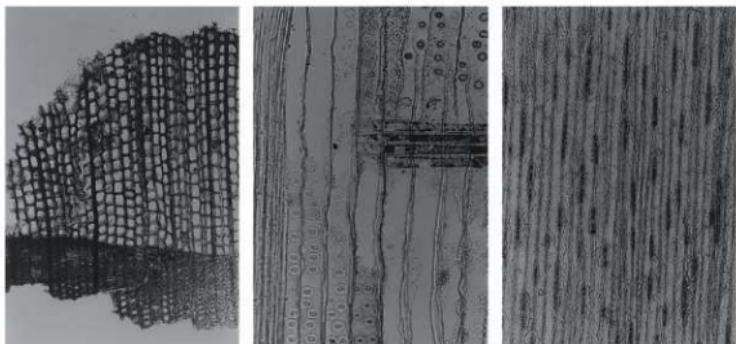


柾目×100



板目×40

No-3 コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ

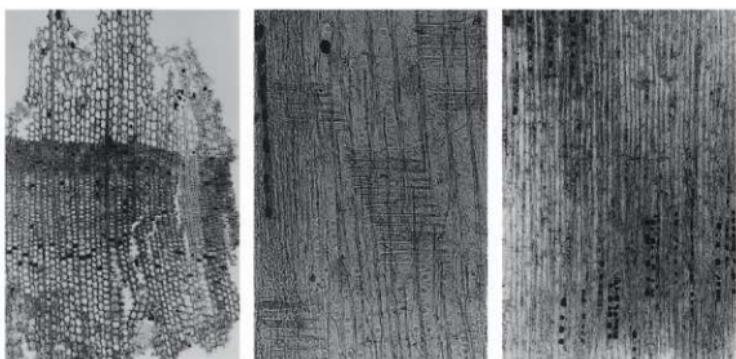


木口×40

柾目×100

板目×40

No-4 マツ科モミ属

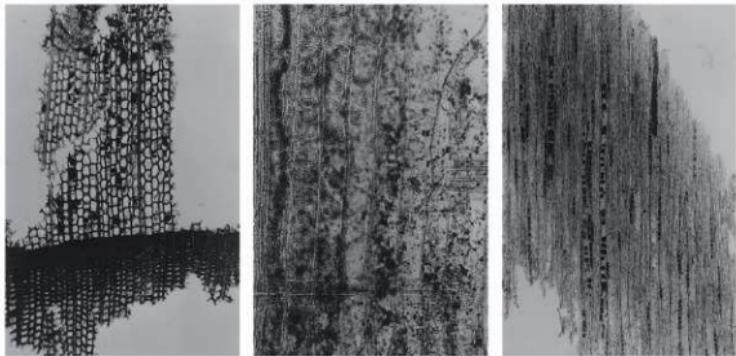


木口×40

柾目×100

板目×40

No-5 スギ科スギ属スギ



木口×40

柾目×100

板目×40

No-6A スギ科スギ属スギ